



43



ながたかずびさ

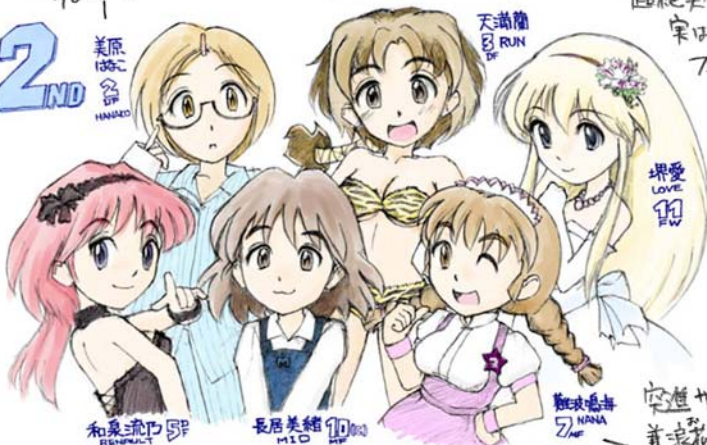
Miracles! Episode 7

- 43 -

神経雙をうてるイケメン  
オマケにカモイ委員長。  
クレーンなスピードDF。

2ND

美原  
はるか  
HARUKA



和美流 RYUUTO

長居美緒 MIO

難波唯 NANA

堺愛 LOVE

天真爛漫食いはかな  
ナチラル・ガール。  
超攻撃的パワーレベロ。

天満  
RUN

無口ながら  
存在感あつかりの  
超絶美少女。

実はお茶目。  
フィジカル系  
17-FW。

セクス振群  
切られ振群  
たまにだんごいっしょにもよく  
ズルい奴。先達サドマッカー。

強く優しく頼もすぎる。  
我らが黒柱。  
パーフェクトボランチ、キャプテン。

空想サッカー小説  
美浪花主婦。  
盛り上げ上手な  
テクニカル司令塔。

ヒロイン  
本日の主役

- ・ 上野大地 (2年) ... サッカー戦術と乙女心掌握の天才。2-4 (監督)。
- ・ 空穂三十六 (2年) ... 軽い足腰と無駄に豊富な印行下。  
4-6、プロトタイプ。

- ・ 高安和輝 (2年) ... 放送部。テニスが高校に有名。

登場人物  
ご紹介

日廻ハートの元F1若ア  
スベター。物腰柔らか。  
微笑みと絶やさぬ。  
中盤の動之将。  
ハービー

ボーイッシュ&元気一番。  
ムードメーカー。  
FW兼任の超反応GK。

1ST

平野  
エルナ  
ELENA  
DF

吹田千里  
CHEETAH  
GK



佐吉都  
COTTON  
Manager

見た目派手でも  
縁の下の力持ち。  
気遣い大好き  
マネージャー。



天王寺ありす  
ALICE  
DF

一見ミウガバイズ、  
実は底の知らない  
天才少女。  
ファンタジスタ。



此花可憐  
KALLEN  
FW

ト単純だけどそこが  
カワイイ裏もん坊。  
コース代表の逸材。  
エース・ストライカー。

天下無敵のバケ倒せおせうさま。  
敵も味方も大混乱。  
鉄壁の右キープバック。

時にカゴア化時に武人。  
麗に見え目に騙されては  
いやな。  
不慮の守護神。

日系4世アラジリアン。  
誰にも止められないガンジリサソい娘。  
トリッキーウイング。

守忍  
SUSHIMORI  
DF



森之宮明桃  
COO  
DF

クールな捉えどこのおにい、  
ど時何何考えておにい  
ネコ娘。  
高難度戦闘爆撃  
センターFW。



八尾由美子  
YUNNY  
MF

努力家の頼める姉貴。  
ガツと開五は  
天下一品!  
MF/DF守備職人。

マキ  
100.  
モリダ  
MORIDA  
FW

3RD



梅田もも  
MOMO  
DF

B3桁のナイトホドゴ  
バケウを荒し回す食神。  
フェアレ-DFAIター。

## ★あらすじ？

「ミラクルズ」はとある街の女子サッカークラブチーム。  
昔の名前は「どきどき・サッカー・クラブ」。  
創設者は難波鳴海、愛称ナナ。  
今回はその、いつも陽気な浪花の弾丸娘のお話。  
新人も入った、コーチも得た、さあこれから！  
というところで、彼女はちいさな小径に迷います。  
そこから引っ張り出すのは、あるいは一緒に迷うのは、  
口も軽けりゃ腰も軽い、我らが空堀三十六クン。  
はてさて、どんな騒動が巻き起こりますことやら……

## ★もくじ！

- 第一幕
  - 一場 独白三十六
  - 二場 独白七
  - 三場 アオリ
  - 四場 ラーメン『山嵐』
  - 五場 革命
- 第二幕
  - 一場 迷子
  - 二場 シンパシー
- 第三幕
  - 一場 リカちゃん電話
  - 二場 西九条家
  - 三場 いつもの
- 第四幕
  - 一場 準備
  - 二場 迷い・困り・怒る
  - 三場 ハーフタイム
  - 四場 エンジン始動
  - 五場 締められる
  - 六場 ウチは浪花の
- 第五幕
  - 一場 宴

## ■ 第一幕

### ● 一場 独白三十六

俺の名前は空堀三十六（からぼり・さとる）。高校二年生。見ての通りのナイ・スガイ。趣味は読書と、まあ書きモンをちよちよいと。

部活はその文藝部と、部員じゃないんだけど演劇部のおてつたい。根っから&子供の頃からのインドア派ツス。暑い嫌い・寒い嫌い・動く嫌い・埃っぽいの大嫌い。

ところが。

そんなあたしがなんだかんだすつたもんだで……え？　なんだその八〇年代くさい話の端折りは？　読んでるもんが古いんですすいません。いいですよその頃の。読んでると、

「ああ、これでいいんだ」

とすつかり心ほだされます。

いいじゃないですかそんなことはどうでも。

すみません脱線多くて。

だって青春ですからね。

まあ、そんな感じでぶらぶらフラフラしておりましたところ。

人間、どこで何が起こるかかわかないもんです。

友達がね？

いや正確には友達らの友達から、その友達を自分たちの劇団に巻き込みたいと。その手伝いをして欲しい。こう言われまして。

ぼく根がお人好しなのか、そういうこと言われちゃうと、自分のことよりよっぽどがんばっちゃう方なんです。で、わりと踏ん張っちゃいましたら、ホントに彼は、その軍団にインしてくれはったわけですよ。

無事ね。

目標達成！

ところがすな。

なんかしらんのですけど、僕も入っちゃった。

「入っちゃった」とか言つて、そりゃ自由意思つてもんが認められていることになっている現代日本ですから、まあ僕もまんざらではなく入ってるんですけどね、そのチームに。

あ、サッカー・チームなんです。そのゴロツキ集団。

しかも女子。

「ナデシコ」とかなんとかかんとか言わはるでしょう？

とんでもない。

ラフレシアですわ。

いやラフレシア言うど怒られるかな、見てくれはエエンスわ、わりあい。軍団は一六人ほど居て、マネージャーの子入れて一七人なんですけど、まあそこそこのがズラーツと揃ってて、結構ですよ。いやホンマね、あんなユニフォームなんて色気無いの着せずに、ハレハレのフリフリのリボンリボンのお洋服着せて、「アイドルユニットでござい」言うて一山いくらで売り出したいぐらいです。

書くよ詞。なんぼでも。書くっていうか、いろんなどこからコピーしてつぎはぎするよ。

せやから、見てくれは綺麗で実は毒々しい……トリカブト？ いや毒じゃないんですよね、むしろ中毒……ケシ？ 痩せた土地、芝一本生えてない土のグラウンドで雄々しく……いやごめん一応女子なんでね、せやかて女々しく言うどちやうし……凛々しく。凛々しく咲き誇らんと背伸びをしている様が、まさに三角地帯のケシ畑！ もう金になるなる金になる。

“麻薬王”に!!! 俺はなるっ!!!!

ここだけの話ですよ？

ま、そんなような具合で、僕が巻き込まれてしまったサッカー・チーム、『ミラクルズ』のおはなしを、今日はひとつ。



たいしたお話やおまへん、どうぞ膝を崩してベルトを緩めて胸を開いて眦を下げ、口角を上げて、ごゆるりとお聞きいただきとうございます。  
では、一献。

## ●二場 独白七

ウチの名前は難波鳴海（なんば・なるみ）。高二。ぴちぴちギャルやで。

いやホンマのぴちぴちギャルは自分のことをぴちぴちギャルなんて言うわけ無い、てのはわか  
ってまつせ。軽いくすぐりやがな。まず最初から印象づけていかんとね。第一印象がだいじやで  
人間。

通称は可愛い可愛いナナちゃん。名選手ディオーン・ダブリン略して『DD』のように、苗字と  
名前から一文字ずつとつていつのまにやら周りがそう呼んでくれてんねんけど、最近自分でも自  
分の名前が『ナナ』のような気がしてきて、いや『難波ナナ』どころか『ナナ』。こないだなん  
か、どつかの会員証の申込用紙に氏名欄『ナナ』て書いてもて、おはなに爆笑された。

あいつ人のミス笑う時爆笑しやがんの、悪いクセやでホンマに。

せやけどそんなもんやで、呼ばれてるとそうなつてくんねんペットの犬猫でもそやろ？

まそれはええとして。

趣味つちゅーか生活の中心はサッカー。

あ、えー、ま、あんまり大きな声で言いますと自慢話みたいになりますんでちいちゃい声で囁  
きますんですけど、いちおう、年代別代表にずっと選ばれてます。

フフフ。

いや凄くない凄くない、ぜんぜん凄くない、わたしは、わたしの毎日やるべきことをひとつずつね、ひとつずつただただやってきただけ。

え？ 「年別代表」がわからない？

あ、えー、まあその、日本代表でありますやろ。あれのね、若いの版ていうのが下からジュニア、これがぎつくり小学生、ジュニアユース、これ中学生、ほんでユース、これが高校生、で一般、いわゆるフル代表が年齢制限無し。この四つに分けられてるんです。だもんでウチは、いまんとこ下三つで順調に選ばれてる、ってことです。

あ、やつと「そこそこイケてる」ってことがおわかりいただけました？

でしょ、おんなは見ただ目やおまへんで。ハート、度胸、心持ち。そこにちよつと愛嬌のスパイスが振りかかつていればそれで十分やね。

まあまた詳しいお話することもあるか思いますが、ウチは高校生に上がる時、強豪の高校からの誘いを蹴って、自分でチームを立ち上げる、というムチャに挑戦しました。

我ながらムチャやと思ってたんですけど、神様っていうのは案外、「こいつムチャしよんなあ」という人には甘いようです。幸運にも、そこそこやれる面子が集まって、ワイワイ楽しいやつてるうちに、そうそうみんな「サッカーに関しては」素直なんで、ウチの言うことよう聞いてくれ

まして、なんと、これは自分でもビックリしたんですけど、地区予選を一位で突破しちゃいましたね。去年、全国行つたんですよ全国。

凄いでしょ？

まあ全国は初戦でコテンパンに熨されて、泣いて帰ってきたんですけど……

そんな感じで、楽しいやつてました。

やつてました。

ところがですね。

学年上がったことだし下に新入生取つてパーツと盛り上がつていこや！と張り切つたはええものの、ほんで思いの外ええのが何人も奪れて「ヒヤッハー！」言うてたのもつかの間、やつぱり人数増えて、みんなめざす方向がバラバラで、チームは空中分解……という大げさですけど、ギク・シヤクして機能不全みたいになつたんです。

好事魔多し、ですなあ。

ウチはウチなりにがんばつてましたし、キャプテン、これがまたエエ女でしてね、頼りがいのある、いやありすぎる、いやなんて言うたらええんやろう、柱？ ダイコクチュウ。ま彼女も頑張つて……

いや、だから「頑張る方向」てのがなんでもだいじでしてねえ。

あれホンマ、今にして思うと、ああいうところがこの人はキャプテンの器であり、ウチはそうやない、と痛感したのが、

助けを求めたんです。

これが、なかなかできん。

特にウチは、サッカーの事ならこのチームの中で誰よりも詳しい、という自負がありましたし、実際そうでもあったと思います、せやけど、サッカー・チームにとって、「サッカーのこと」っていうのは、ほんのちよびーつとのことなんですなあ。

それ以外が9割。

電車で吊り広告見ると

「ナントカが9割！」

てよう書いておまつしやろ。あれだす。

だいたいナントカがだいたい9割で、サッカーとか、一見だいじかな？と思われるようなことは1割ぐらいなんです。

ちなみにサッカーでも体力が9割。九〇分で一三キロインターバル走やれる体力あったらプロにはたぶんなれる。メッシにはなれんかもしれんけど。

そんな簡単なもんか？

ほなやれますか。

やれませんかでしょう？

それをやったらええことあるとわかっててもやれないのが人間つてもんで、だからそれ以外のことをやろうと四苦八苦するんです。もちろんそこから創意工夫が生まれて進歩そして進化もするんですけど、基本はそうじゃない。特に、ウチらみたいに身体使うネタは、そう、そうそう革命的なことなんか起きませんで。

話ズレましたね。

ほんで助けを求めた先つてのがこれまた、

イケメン。

なんかね、この人がね、ヌボーツとした薄らでかい、あとどこ見てるかわからん夢見がち瞳男子、つていうとエエように聞こえますけど、ホンマ普段何考えてるかわからん、なんかフワッフワした男でねえ。大ちゃん言うんですけど。

これがね、

いやあ人間つてホント迂闊やね。

ほんの近くに居る人のことでも、その人のことを積極的に知ろうと思わんと、なにも知らないし、知ることも無い、んです。

練習試合なんですけどね。

新入社員、いや社員じゃない、新入生も揃って新チーム初試合、これそこそこエエトコとやることになって、おうそれは歯ごたえあるな、コテンパンにされてもエエ経験や、ぐらいに思ってたんですけど、実際始まってみたらアレですわ、ホンマにギューツと真綿で首を絞めるように身動き取れなくされてね、ぼんぼーんと点獲られました、あとはへびにトグロで絡みつかれるガマガエル。グゲー、もうあかん、もう死ぬ、タンスの引き出しに通帳入ってるから七海、八太、ふたりで大事に使うて……あの二人は娘と息子の予定なんですけど、そんなピンチ・オブ・ピンチにですねえ。

イケメンご登場ですよ。

びつくりしましたよ普段と全然違うの。

キリッ！ パリッ！ ピシッ！ パキッ！

ほんでから、

バシーン！ バシーン！ バシーン！

と、こう指示を出しまして。

え？ わからへん？

いやもうエエんです細かいことは。バシーン！指示が飛んでピシャーン！とその場に居た全員の背筋が伸びたところがだいじなことで。それが9割、いやすべて。あんた何聞いてますのん人

の話。

で、逆転ショーリ。軽やかに。

はあ。

ため息出ましたでホンマ。

ウチのやつてきたことはなんやろう、いやウチはなんやろう、つて。

イケメンがパシーン！言うたらみんなピキーン！てなつて優勝ですわ。

そりや真理ですよ、真理かもしれないですけど、ほなね、努力とか、計画とか、コツコツと毎日練習は裏切らない……いやあ。

まあ、まあまあまあまあまあまあ、そうは言いましたも？　まあ、チームが強くなる、てのはもちろんいいことです。

それから、やつぱり女子の集団は一人男子入るとちやいますね。あ、もちろん男子もそやろと思うから女子マネが居るんでしょうけど、みんなこうね、パリツとする。あんまカッコ悪いことはできんなあ、てなものでね。

流乃吉なんかあいつホンマダルがりで、練習飽いてきたら人目構わず



「あー たるー」

言うてプラプラプラ歩いてやがったのに、いや歩くの直つてへんねんけど、「たるー」とは言わなくなった。あのそのへんのネコよりワガママな流乃でそうなんで、あとは雄蕊と雌蕊、いや違うななんて言いましてつけ、おして、おして、押し引いて？ プッシュ・プッシュ・プル・プッシュ？

ともかくみんなねえ、いやあ、そう話また逸れるんですけど、ホンマにシュツとした美男子でねえ。くだいようやけど。あウチはなんともないですよ、ああいうタイプの超カッコイイの。ウチ攻撃的ミッドフィールダー、攻撃のタクトを振る役ですんで、人と違ったこと、人の見てないところを見んなあきません。そんなこんなで、みんなが夢中、つてところはあえて見ない。

みんながシャウトするヴォーカルの男の子に、あるいはカッコよくギターを弾きまくる男の子に夢中な時に、薄暗い後ろの方でしかめっ面でキーボードぽちぽちしてる人を見る。これです。まだ同学年は接触する機会も多いんであれなんですけど、一年生とか三年生とか、もうポーツとなつちやつてねえ。も何でも言うこと聞きます、言うてください掃除でも洗濯でも、て勢いで

……はあ。

ウチはもう要らんのかな、いや要らんいうと言い過ぎやね、ただのワンオブゼムでええんかな、と思いますとね、寂しいの半分、でも肩の荷が下りたのも事実。やつぱり餅は餅屋、指揮とか監督とかモチベーションコントロールとか、そういうのはああいいうなんて言いますかね、天才？才能？生まれ持つてそういう資質がある人に任せた方がええんかな、と思ったり思わなんだり……

特性つてありますよ、やつぱり。得意不得意ね。自分じゃわからんこともある。ウチの友達でもありますよ、「アイドルめざす」つて言うて「そうかがんばれ」言うてたんですけど、なんか歌がイマイチアイドルじゃないんですよね。すごい巧いんですけど、なんていうかこの、キラキラッ！ きゅびきゅびっ！てのが無くて。なんか落ち着いてるんですけどよ渋茶色に。ほんでこないだ会つたら着物着てて、しかもこれが似おうてる。なんや言うたら「演歌歌手としてデビューする」と、こうですわ。

「あんた演歌好きやつたん!? アイドルソングしか歌へんやないの」  
言うたら

「演歌初めて歌うたんやけど、なんかプロデューサの人が大喜びで……『演歌歌手やつたらすぐデビューや。アイドルやつたら孤島でサバイバルから下積みや。どっち取る？』言わはるからほな演歌かな、思て……うち蚊とか苦手やからサファリとかケニアとか行かれへん」

「それ恫喝やないか。ほんまかいなそれ。あれか、蠟燭の炎が揺れないように」  
「それは民謡やんか。ほな歌うてみよか。」

『男 岩木山』

「青森の歌かいな。あんた関西人やろ」

「せやで。気持ちはブルー・フォレストや」

「いやあ……」

「B面は『女 十和田湖』」

「B面！ レコードデビュー!？」

「それとカセットテープ。知ってる？ カセットテープ」

「話には、聞いたこと、ある」

「おもしろいんだよ、頭出しとかできないの」

「……まとにかく歌うてよ」

「♪」

これが巧いのなんの。CD、じゃないレコード買うの約束してしまいました。

いやまあ、そんな感じで、ふふ、それもおもしろいのが、じゃ「監督」任せますわ、言うたら僕は「コーチ」がいい、て。

はあ、あれかいな、欧州じゃ監督のことをコーチ言うんで、それかいな、言うたら、それもあ

るけど、ええですかここからよう聞いてくださいよ。キリツとオットコマエな表情かおキメてね、

「みんなと一緒に、歩みたいから」

カーーーッ！ ペッ！

どうですかこのカツコよさ。しょうがないでしょう？

あかんわ。人間見た目が9割5分。イケメンは何を言うても許される。何をしててもセクハラにならん。

もうここまでできればこの可愛い素敵なナナちゃんもホールダップ、お手上げですわ。わかつたやつてくれ全部やつてくれもう全部まかせますと。ウチが男やつたら、

「もう、メチャクチャにして！」  
つてところかなあ。

ん？

いや、メチャクチャにされたら困るんですけどね。

まあそんな感じで、チーム・ビルディングに着手中、てのが現状ですわ。

いや、うかうかしてられませんかよ。代表だなんだ言うても、新しい監督いやコーチの元では横一線スタートが基本。誰かにポジションを奪われることも十二分に考えられます。ここはひとつ、

練習から全力で、エエトコめいっばい、アピールしてかんと……

と、頭では思うてた、んですけどねえ。

いやあ……隙があつたんかなあ。

ま監督によつてはね、自分の権威付けのために中心選手を一旦外す、みたいことをやることもよくあるんですけど、あの人はそんな感じではないし……第一ウチ言うてもユース代表ですぜ？それが、同じクラスの、ほらそれこそエンジェルスのリカとかね、そんなんと替われ言われたらそら考えます。そやけどポツと出のね、いやポツと出にもならん、昨日今日サッカー始めたような文字通りの初心者に……

いやまあ、いや。

いや。

がんばらなあきません！

がんばらな……

いや。

また微妙なんがね、なんとなくそれを受け入れんでもない自分も居るんですよ。これが、自分としては、モヤモヤしてねえ……

へいや、それはアリやな

とかすつごい他人事で聞いてもた。で、その自分に自己嫌悪、というか単純に驚いた。へえ、こ

んなウチもおるんや、て。

いやあ……

やっぱあの旦那……ウチらの大将、上町大地は、一種の天才やと思うね。

ウチ、こう見えても、また自分で言うのもアレやけど、百戦錬磨のヴェテランのハートにね、混乱を巻き起こす、緊張感を掻き立てる、これだけでも見事な手腕ですよ、うん……うん……

……

トッ……

……トッ下やったら、

ウチやろおお!!

### ●三場 アオリ

——その日の練習はみんな気合いが入っていた。

女子サッカークラブチーム「ミラクルズ」、放課後練習。

今日は練習終わりに新システムの発表があります、とまずコーチから宣言があつた。新システム、ということはスタメン、スターティングメンバーがある程度固まる、ということ、それはおおごとだ。

去年まで一人ぴつたりで回つてたところに、五人の新人がやつてきた。うち一人は即戦力、それに前回の試合でテスト起用されたそれ以外の三人もポテンシャルの高さを見せつけた。場合によつては、もう一人ぐらいはスタメンに採用されるかもしれない。となると、二人、いままで苦楽を共にした選手が、ベンチに下がることになる。

いつも和気あいあいと笑いの絶えない練習風景が、罵声や怒声こそ聞こえないものの、ちょっとピリツとした雰囲気終始する。

練習が終わつた。

コーチは全員をねぎらいながら、伝える。

「……さて、システムの件なんだけど」

物腰あくまでやわらかく、しかし単刀直入で合理的。上町大地は、ピッチの側に立つと人が変わる。

「サッカーの世界には、『勝ってるシステムはいじるな』という格言があります」

あーっ、とため息とも悲鳴ともつかないものが漏れた。もちろんそれと対照的な、希望に満ちた輝く瞳も。つまり前回のやり方を踏襲する、ということ……

「GK、忍。」

DF4バック、右から、明日葉、蘭、もも、流乃」

明日葉、のところで何人かが目を剥いた。ルーキーだ。

「中盤底、美緒。基本ゲームキャプテン。」

中盤左低め、美緒をサポートしつつ左インサイドを走ってもらうのに、エレーナ」

わあっ、と今度は声も出る。彼女も新人で、当の本人は口に手を当てて固まっている。

「中盤右高め、ウイングと言うかサイドハーフというか、に、ナナ。」

トップ下、ありす」

〈いーっ!?〉

という声を吐きそうになるのを、ナナはすんでこらえた。だが顔は完全にそうになっていたので、美緒がそれを横目で見て苦笑した。ありすの方はぽかーんとそのたいへんに可愛らしい微笑みを



変えない。事情が呑み込めていないようだ。

「2トップ、センターで体を張るのに胡桃。その周り自由に動いて点をもぎ奪りに行くのが、可憐。」

「以上」  
可憐がちいさくガッツポーズをするのが、濁った心には嫌味に見える。彼女こそユース代表で、さつき言った「即戦力」だ。たとえ脚一本骨折してもスタメン確約ぐらいの立ち位置に居るのだが、いつだって全力疾走が彼女の持ち味で、こんな時でも本気で喜ぶ。

「……ただし」

メモから顔を上げ、ちゃんとひとりひとり見回して、コーチは伝える。

「我々はひとつのシステムで、『自分たちのサッカー』を創りあげて、それを相手に押し付けて、力押しで勝てるような、そんな強豪じゃない。」

みんなわかっているとと思うけど。

相手と調子によつて、まだ試合の流れの中で、僕もどんどん変えていくと思うし、みんなも試合をしながら変わっていくと思う。

ということだ。これを『スタメン』とか『レギュラー』とか、言いたくない。あくまでたくさんあるシステムのひとつ、標準システムでのスターティングラインナップ、ということだ。それこそ次の試合で、ぜんぜん違うメンバーで始めるかもしれない」

と、笑った。

とはいっても、区切りがひとつついたわけで、肩を落したり、ホツとしたり、オロオロしたり、いろんな姿が見られた。

空堀三十六は、マネージャーの住吉古都すみよしことと一緒に、その様を眺めていた。彼はポジシヨンの雑用係……というのが本人の謙遜だが、対外担当のマネージャーのような存在なので、基本サツカーそのものには触らない。だが人事とか、メンタルケアと言えれば、スタメン発表というのには彼にとっても重要なイベントである。ということ、こんなところで突っ立っている。

「……やつぱりレギュラーかどうか、てのはでかい問題なんやねえ」

「そうですね」

「俺あんまりこういう『椅子を争う』みたいな経験が無いんで、どうもピンとこんねんけど」

「ふふつ。空堀先輩はほんと無さそうですね。……わたしも無いなあ」

「こつとんも無さそうやなあ。うまいこと避けてパツと『わたし、マネージャーやります！』みたいな」

「空堀先輩はアレですね、『オレはオレ！ 誰とも比べようがない！』みたいな」

「よーわかつとるやんけー」

「へっへっへー」

見るからにしょぼーんと肩を落としたのが、FWのマキ、マキ・パメラ・キシワダだった。右サイドを自慢のスピードとドリブルで切り裂き、本場ブラジル仕込み（と本人は言うが誰も過去を見たことないので若干怪しい）のテクニクで突破してクロスを送る。役割がハッキリしていて役にも立ってたつもりだったので、落とされると厳しい。

「あの一……落とされた理由、とか、聞いちやダメ？　なのカナ？　やっぱり？」  
「ああ」

褐色の肌・エメラルドの瞳、日系ブラジル移民四世。見た目の派手な印象と裏腹に恐る恐る小さく手を挙げて問いかけるマキに、ごく普通の顔をして大地は答えた。

「いいよ、別に。」

えーつとマキはまず守備がヤバイ」

笑いが起きた。まずみんな知ってるツボを突く。

「エーッ、で、デモ」

「いや、正直言つて、これは激励を込めて言うんだけど、一六人で相当下の方、はつきり言つてしまえば最下位候補なんだ。いくら攻撃メイン、特にウイングといつても、それはちよつといくらなんでも、というレベルで……去年は相当後ろががんばってた？」

大地、キャプテン、ながいみお長居美緒に聞く。

「ナナちゃんがね」

「ウチよりも蘭かなあ。右はもうツイッターやったからボールロストしたらゴールラインまでほぼ一気なんで、すぐ血相変えて蘭が走ってた」

「あはは」

てんまらん天満蘭が口を開けて笑う。

「ランちゃんすぐ居なくなるから、くーちゃんに横に来てもらって」

「前に出るとスイーパーが居なくなる。よく間を抜かれて、よく走らされた」

と、その近辺を守っていた梅田もも、もりのみやくるみ森之宮胡桃が継いだ。つまりとても大変だった、と。

「マキちゃんには悪いけど、前回あすは明日葉ちゃんが右サイドバックにベツタリ居てくれたでしょう？ あれホント楽だった」

「そうだね」

「エー……」

守備陣にそこまで言われては、もう反論する気力も無い。

「……というように、みんなひとりひとりいろんな得意と不得意があるさ。マキの攻撃力を活かす場面もきつとあるので、その時まで牙を研いていてほしい。あと守備の練習ももうちよい」

「ハアイ……」

「このシステムならこの一人の得意と不得意がうまく噛み合いそうだね、というパターンではないので、それぞれ得意を伸ばし、不得意を誤魔化す練習をしてください。」

とりあえず、様子を見てみよう」

「……あれよく海外のインタビューの翻訳とかで見ると決まり文句なんやけど、原語でなんて言うてんねんやろ?」

「『stay tune』じゃなごですか?」

「あーなるほど! こつとん頭エエなあ!」

「英語ちよつと好きなんです。空堀先輩は日本語がお得意でしたよね」

「なんかそういう言われ方すると若干寂しいけど。そやあ、実力テストの国語は入学以来ずっと学年一位やでえ」

「わお」

「ひやつひやつひやつ。他は平凡やねんけどなあ」

「またまたご謙遜を。知つてますよ張り出しにお名前が載ってらっしやる事実を。また二〇番内外というあまり目立たずにしかし実力のほどもアピールできる絶妙のポジションを取っておられることを」

「えーっ、まだ今年実力テストやってへんやんか」

「わたしには秘密の情報網があります。サツ」

と、なんの変哲もない世界で一番売れてるスマホを見せる。色はピンク。

「やるな。ぼくにも秘密の連絡網があるんだ。サツ」

と、なんの変哲もない世界で一番売れてるスマホを見せる。色はピンク。

「おそろい☆です☆」

「フツーに考えたらこれになるやろ。なんでこれ以外の買うねん」

「さあ……わたしはこれを買ってもらったので」

「騙されてるか、メーカーの関係者以外に、どんな理由や」

「さあ……宗教上の理由じゃないですか？」

「人間に理性なんて無いんとちゃうか」

「また極端なことを言うー」

「理性で説明出来るんことをする人が何割も居るんだから、無いのと同じやろ。その場合、全員にあることを前提に物事組み立てて巧く行かへんわけやから」

「そりやそうですけど千年ぐらいはそれでやってきて、次善三善でもまあなんとかこれで、と諦めてるわけですから。それよりホラ、お・そ・ろ、お・そ・ろ。ふふっ、カップルみたい」

「うれしいわ」

「いま生まれてこの方これ以上無いぐらい感情の籠もってない『うれしいわ』を聞きました」

「こつとん厳しいなあ。モテんでそんなこつちや」

「一人いてこましゃいーんですよ、モテる必要なんかありません」

「マネージャー向きやなあ」

「空堀先輩ロマンチストつぼいですよね」

「つぼいてなんや。つぼいつて。ロマンチストですよわたしや。プロポーズは森の見えるチャペルの丘で光と風に包まれながら愛の鐘を鳴らすの。ビーンボーン……ビーンボーン……」

「イメージが湧きません」

「俺に湧いてないからな。」

「そんなことはいいんです」

「あとは……ナナさんですかね」

「えっ？　そうなの？」

ああ、と古都は思った。

この人モテないわ。というか、めつちやモテても本人がまったく認識できないだろうから事象としてはモテてないことになる。

ああそーいや前回の試合の時も、文化系のクラブの女子の先輩一山籠に入れて持って来たじゃ

ん。あれモテモテじゃんこの人。わりとすごい好感度高めだったし。なんでわかんないかなー。

あれだな、『占い師は自分の占いはできない』てヤツだねきつと。

「……ナナさんがこのチーム作った張本人じゃないですか。それを、えー私もよく知らないんですけど、トップ下？ ていう攻撃の主役、ヒロインみたいなポジションがあるなら、やっぱりナナさんがやりたい、ですよね？」

「そりゃそうやな……しかし名コーチの合理的判断によるポジショニングがあるのだから」

「それで納得できるのは男の人……いや、空堀先輩ですよ」

「難波師匠もヴェテランかつプロフェツ・シヨナルやで」

「目の丸背負ったユース代表ならそうでしょう。でもここは、自分の家みたいなもんです」  
「……」

と言われてみればそうだ。

この子賢いなあ、と思った。

難を言えば、自分が賢いと気づいてないので、賢さを無意識にブンブン振り回す。それは、日本では、摩擦しか、起こさない。



でかいリボン付けたり、太い脚を隠そうともしない短いスカートを履いているのも（余談だがこのチームでは太い脚持ちがミニメを好んで履くのだが（さらに余談だがスカートは長さだけで四種類、他にストラックスやキュロットや半ズボン（としかいいようのないもの）もある。タイも数えきれないほどある。それではもはや「制服」ではない気もするのだが。ケツタイな学校だ）、なにか法律でもあるのだろうか？）、そのへんを無意識に隠そうとする所作かもしれない。まそれはいいとして。

なんかこの人、めっちゃヤラしいにちゃあ……って笑顔で俺を下から覗き込む。

「……三十六クンの、出番ですよ☆」

「はあ？」

「慰めれ慰めれ。話を聞くんです話を。」

『俺でよかつたら。ま、なんの足しにもならんかもしれんけど』  
とかなんとか言っちゃったりして、まったくもう！

「はあ。……誰の？」

「あなたバカですか」

「あ、ああ、ナナさんのね。」

あーいや、えー僕ちよつとあの人苦手で」

「はあ!？」

「大きな声を出しなさんな。内緒やで？」

「いややつぱなんかこう、真剣なんよねこのチームの話については。誰よりも」

「そりやそうでしょう」

「あんまりキーッてなってる人の相手しとうないねん……」

「先輩文藝部ですよね」

「あ、はい」

「将来は小説家かなにか」

「いや小説は無理っぽいので、なんかグルメライターあたりができれば、と思っております。そういうとグルメライターさんに失礼ですけども」

「夢が必要以上にコンパクトなのはいいとして、あーた表現でメシを喰うというのは大量のキピーッを相手にすることですよ」

「あ、はい、それはなんとなく……」

「この程度でびびってどうすんですか」

「いやあ……あと同じ関西ルーツの人間なんで、同族嫌悪とまで言うと言い過ぎですけどなんかこう変な意識が」

……はーん。

ちよつと気になつてるな？

最前までキレよくポンポンマシンガンだったのが今やフランス映画の俳優のようにシドロ・モドローだ。

よしわかった。この愛の墮天使こつとんちゃんだが、ハピネス・キューピッツになってさしあげちゃったりなんかしちやつたりなんかして、もう。

矢を、えい！

「グデグデ言つてないでお茶に誘つてきなさい」

「お茶……お茶で柄じゃないよね」

「……そうですね。でもスイーツは女子だいたい好きですよ」

「……ラーメンかなあ」

「人の話よく聞いてますねえ。確かにラーメン・タイプですが」

「……誘うの？」

「そう」

「俺が？」

「なにも『今晚どう？』とか言うわけじゃないんですからいいじゃないですか同級生なんだし

「！」

「いやまあそうなんやけど……いや……」

「この……いくじなし！」

「うわあん、シクシクシク」

「泣き真似の擬音発音するとすごくオタクっぽいですよ」

「……つうお、うお、うおっ……」

インドア派をまとめてオタク扱いするのはやめていただきたい！

趣味は文藝と街歩き！

休日は一日中パソコンの前かカメラ持ってウロウロする不審者！

これのどがおタクやねん！」

「話逸れ気味ですよ」

「わあつたよ！ 行くよ行けばいいんでしょう？」

「そうです」

「なんで一学年後輩のマネの子に罵倒されなあかんねや。俺がなんかしたか」

「なんもせんから悪いんです。」

「そしてわたしはマネージャーだから！」

フーンッ、と鼻息荒くしてデカイ胸を張ってひとつ叩いた。  
そのゼスチャーもオタク臭いと思うんだけどなあ……

「うまいこと行ったらわたし、友人代表スピーチしますから」

「なんの話や。カウンセリングですよ、というか茶飲み話。てかラーメン。  
あ、一緒に来る？」

「殺しますよそろそろ」

「ジョーダンやがな……こつとん殿しいわ……マネ向きやわ……」

「就任して自分の適性がここにあつた、と翼が広がる気分です」

「イイネ。ボクもそんな経験がしたい」

「わりと広げてらっしゃる気もしますよ」

「いや……なんか今まで通りつて感じ。三つめの同じようなジョブ」

「じゃ既に飛んでるんじゃないですか。」

羨ましいです、人生しあわせで」

「……ん、まあ、不幸せではないで。若干不自由やけど」

「じゃお似合いですよ」

「誰と」

「不幸せでは無さそうで、若干不自由っぽい人と」

「……」

眼の奥を見せないニッコウ笑いで手を振るおさげお化け。

チッ、このチームはなんでこんな梁山泊みたいになつてんだ。

もちろんそれは類友。日本最高の高校からの特待生の誘いを断つたアホ娘の始めたチームに、世界の名門が行列をなして面会を乞いに来たのに誰にも会わなかつたあんた諸葛亮か、というバカ旦那が加わつたんだから、そりやもうその程度のやくざ者は山のように流れ着いてきますよ。

エツちなインフォメーションならボクにおまかせ、ナニからナニまで世界まる見えハウマツチ！なオタク・ボーイなくせして、とういかそうだからこそ案の定、現実社会では奥手も奥手大奥手、フォーク・ダンスと聞くと前日からヤスリで爪を整える空堀三十六くん、後輩女子に煽られまくつてお声がけに向かう羽目に。

●四場 ラーメン 『山嵐』

「……難波さん」

「うん？ なに、空堀君」

「あ、えー……今日は、皆さんでお帰り？」

「あ、そうかな。うーん、なに？」

「いや、いい店知ってるんやけど、一緒に行かへん？ ラーメン屋やけど」

「おーラーメンええなあ。んー、ほなちよい聞いてきてええ？」

「もちろん」

着替え終わりに声をかけると、スタスタと二年溜まりに向かう。

チームに二年生は六人。この人難波鳴海さんに、キャプテンがあのだーんと構えた重心の低い安産型タレ目タヌキ顔で、長居美緒殿。ほんでむこうの脚が身体の八割ぐらいある赤毛、あれ地毛だそうです、和泉流乃いずみのさんで、ちよつと小柄で華奢だけど顔見るといかにもキツツそうでマニアにはたまらなそうなメガネおでこちゃんおでこちゃんが、美原はなこ女史。それからヤケクソにガタイのいい、いや「ナイスバディ」言うよりも「ガタイがいい」んです、が、天満蘭ちゃん。顔も濃いね。

逆に還暦過ぎてもいつまでもお美しい、と褒められそうな女優さんっぽい美人が、堺愛さん。しかし改めて見ると綺麗やなホンマ。

あ、まあ僕と、それからコーチ・上町大地も二年生なんで、まあ八人とも言える。

ちよちよつ、と話すとすぐ来た。

なんですかそこ！ なんにもないですよ！ なにその五人揃って生ぬるいニヘラ顔！ なんもないつちゅーに！ ちよつと難波さん！ なんかつツコミ入れて！

と、背を向けてる難波さんには見えるはずもなく。

「……ほな行こ。なんかみんなはスイーツ探検隊やつて」

「あら。スイーツはお嫌いなのか？」

「ううん。大好きやけど、ラーメンほどやないねえ」

「ラーメン、好きなんだ」

「具になりたいぐらい」

「そりゃ好都合」

ぬるい顔五つと、グラウンドを離れてぬぼー顔に戻った大ちゃんにちいさく手を振って別れる。



あれ大ちゃんスイーツ行くんか。あの人も大変やな。歩き出す。

「……コーチ誘った方がよかつたかなあ」

「なんで」

「いやあれたぶん慰め会なんで。愛吉と、おはなの」

「ああ」

残念ながら昨年センターフォワードの愛ちゃんは胡桃先輩、というか可憐ちゃんにポジションを奪われ、昨年ストッパーだったらしいおはなさんはシステム変更によって弾き出された。

「……3バックっていうのはいろんな形があるんやけど、ウチらの使ってたのは三枚センターバックタイプを並べて、その後ろにさらにスイーパーを置くという超守備的なやり方やってんな。ほんでさすがにそれは、っていうことで今回4バック、これもやり方いろいろあんねんけど基本的に守備専は二人で、両サイドの二人は攻撃にも出る脚の速いのを使うから、今回で言うところと明日葉やね、ほんで去年三人居たうちの一人が要らんようになんねん」

「なるほど」

聞いてるだけではさっぱわからん。帰ってウェブで復習しよう。えーつと3バックと4バック、と。

当方スポーツするのはあんまり興味ないんすけど観るのは大好きで、オリンピック期間なんかずーつと寝不足マンなんすけど、なんかどうもサッカーだけはなんだかタイミングを逸してほとんど観てないんです。

あれかなあ、ワールドカップというと日本中が盛り上がりまくるんで、そういうのに反発あつたんかもしれせんね。

サッカーは嫌いじゃないんですけど、ある日突然サッカーで盛り上がる人が嫌いなんです。普段からサッカーが好きな、年間一〇回スタジアムに行くような人は好きですよ。大好きです。

あとどうも外人さんのプレーとかちよいちよい流れてくると、これまた奥が深そうなので、触るとエライことになりそうだ、という予感が自分で自分に制限掛けてたのかもしれないね。

僕クルマも好きなんですけど、あもちろんまだ乗れませんが、いやああれも奥が深くてねえ。図書館行くと一日中高級クルマ雑誌に見とれてられますねえ。あんななつてしもうたら人生が捗りませんやん。

「……まフォワードはしゃーないで。天下の此花可憐やかな。ウチがワントップやってたかて譲らなあかん相手や」

「またまたご謙遜を」

「謙遜なんかするかいな。あんたら知らんねや、協会の強化部が一〇年に一度の天才をどんだけ腫れ物に触るかのようになんか大事に大事に扱ってるのかを」

「ホンマですか」

「ホンマやで。ウチらみたいに野原に放牧でシロツメクサとか野草喰って育ててるのと違う、ビールでお腹マツサージしてクラシック聞かせて育ててる松阪牛やで」

「へー」

「それをこんなところ来よつてからに……」

半ば本当に怒っているようでもあり、半ば理解や共感があることに嬉しそうでもあり、半ば呆れ返つて物も言えないようでもあり。あ、2分の3になつてもた。

「……まあ、あの皆さんだから大丈夫じゃないですか。堂々と『なんでやねん』と疑問をぶつけ、上町コーチも敢然と受けて立つ」

「……そうかもしれんね。あ、ここ？」

「そう。」

「……大將ー」

「おうらつしやい!!」

馴れ馴れしい呼びかけにニコヤカに応えてくれる短髪をツンツン立てた髭大将。店の名前は

『山嵐』。店名と店主のイメージがピッタリ。

「なに常連さんなん？」

「うん、二回目」

「なんや」

「スポンサーになつてくれませんか、つて尋ねに来たら、利用頻度による、と返されたんで、こりや通うしかないな、と」

「なんじゃそりや。……へー、ウチ道こつちちやうから知らんかつたんやけど、きれいなお店やね。……美味しい？」

最後は小声で。

「まあ美味しい。俺の舌を信用してくれるなら」

「へー……お手並み拝見。」

せやけどあれやな、スポンサー集めとかホンマにしてくれてんねんな」

「そらしまんがな。雑用はぜんぶおまかせあれ」

「いやあ……悪いわ。」

「ユニも新しいすんねんやろ？ お金、だいじよぶなん？」

「ま・か・せ・て。」

それは大口のアテがあるさかい」

「マジかいな。あかんで銀行強盗とかしたら」

「しますかいな。むしろストリート・アートやね」

「なに売んのん」

「字はがき」

「そらはがきには字い書いたあるやろ」

「筆ペンで書いてあんねんがな書が。書道の書が。」

『くだものだもの みつよ』」

「怒られんで」

「誰に」

「みつ……よ」

「『人間がさき。著作権があと。』」

「ホンマにだいじょうぶかいなこの人……」

と、ようやくすこし笑ってくれた。

苦笑も笑いのうち、が僕のモットーです。

失笑とかね。

笑やいいんだよ笑や！ なんとかホルモンが出るんだよ！ 健康になるヤツが！

「それよりメニュー。なににする？」

「……お。ここはいろんなんで攻めれるタイプやねんね」

「そうそう。基本は醤油とんこつなんやけど、魚介も塩も味噌も白い豚骨もいける」

「節操ないなあ……嫌いやないけど。」

「どれがおすすめ？」

「二回めの客に聞きなな。大将に聞くとムツとして『ぜんぶ』」

「……あの大将やつたらそれエエカツコで言うてんやなくてホンマつぽいな」

「……たぶんマジで決められへんねんで」

店内は小綺麗なファミレス風で、民芸調流行りのいまつぽい感じでもなく、通好みの古い中華屋つぽくもない。味はわりと本格派だと思っただけど、ターゲット客層はラーメン・マニアだけでなく普通のファミリも狙いたい。そんな迷いが見え隠れ。

「……んーじゃあスタンダードな醤油とんこつの……チャーシュー麺である？ てかわつかりづらいなこのメニュー」

「大将に言うとかわ。てか俺が書くか」

「メニュー作れんの？」

「メニューを作れそうな人を知っている。美術部の岡本さん」

「顔広いなあ。安うでやつてくれんの？」

「修業だからタダで」

「迷惑かけたらアカンでホンマに……あ、これか。チャーシューだけで三種類……迷いがあるなあ」

「あるね。これにしといたら？ 豚バラチャーシュー」

「なんでよりによつて一番コツテリしたのを選ぶんや」

「好きでしよう？」

「大好きです。これにしよ。大将ー！

あんた決めた？」

「あ、うんまあ適当に」

「……あ大将、ウチ豚バラチャーシューの大で」

「担々麺と、餃子と唐揚げ一つずつ」

「おつ？ サイド攻撃!? あ、そんな技があるんか、ウチも」

「シェアでよければ」

「あじゃあいいです。それでー！

あちよつ、まつ、白ご飯、大！」

「大はない」

「あつ、じゃつ、二杯！」

「あの大將、ちよつと大目盛りで」

アイヨー、と苦笑いでとりかかる髭大將。

「……白ご飯おいてたら量はセレクトブルやろフツ。チャーハンでも半チャーあんのに。この店には迷いしかないんか」

「許してくれ。青春やねん。ウチらにおうてると思わんか」

「いや！」

「……うーん、まあ……」

なんでもかんでも、つてところが。

「……ほんでなに？ ご用件は」

「いやなんとなく。お近づきになりたくて」

「嘘言いな。」

しよーもない顔してたから、氣い遣うてくれたんやろ？」

「いや」

「ふふん、ウチかてそこまでアレやないで」



「アレやないのはわかってるさ。しかし、アレでなくてもアレなときもある。なぜならそれが青春だから」

「あんた青春好きやなあ」

「お嫌いですか」

「嫌いではないですが好きかと聞かれてもわかりません」

「それが青春つてことです」

「はあ」

我ながらアホそのものやな。

もうちよつと気の利いたセリフが吐けんか。

「じゃ逆に聞くけど、さつきはしょーもない顔したはりましたんか」

「……してた思うね」

「なにが、ですか。……つて聞いていいですか」

「うん、まあ。あんまりペラペラしゃべらへんて約束する？」

「するする、する。」

あ、あのわたし素人なので、わかりやすーく話してくれるとわかりやすい」

「ふっ。」

……サッカーはある程度ポジションが決まってて、それはシステム、フォーメーションとかいろいろ呼び方はあるんやけど、これによっていろんなポジションがいろいろ発生するんやけど、基本的には攻撃、中盤、守備と大雑把に三つに分けられます」

「はい」

「ざっくり言うとな攻撃は点を奪る人、フォワード。守備は相手の攻撃を防ぐ人、ディフェンダー。そして中盤は攻撃と守備の中間でその両者を繋いだり、ボールを奪ったり、それを運んだりします。ミッドフィルダー」

「はい」

「ウチは攻撃と中盤の間で、後方から任されたボールを運んで、アタッカーに最後のパスを出す役、これを攻撃的MF、オフエンシブ・ミッドフィルダーと呼ばれたりします」

「はい」

「細かく分けると攻撃的MFにもいろんなタイプがあるのですが、花形はフォワードのすぐ後ろに控えて、彼女らをパスで操りつつ、自分も点を奪りに行くタイプ。これをトップ下と一般的にいいいます」

「ああ。」

「それをポツと出のありすちゃんに奪われたのがムカつくと」

「ツツコミが早過ぎんねん！」

「……ま、まあ、端的に言えばそう、なります」

「そりやムカつきますなあ。なんたつてユース代表のレギュラーですからなあ」

「あ、いやまあ」

「調べさせてもらいましたよ普段の大活躍を。ジュニアユースのアジア大会で直接フリーキックをぶち込む勇姿を」

「あー……あれな。ま、まああれは、写真がエエねん写真が」

「見出しが」

『ウチもおるでえ！』

他に誰が居るんですか」

「……ラーメン来た！」

「食べましょう！」

「うわまたこれゴツツイな！」

「嬉しそうですよ。ではいただきます」

「いただきますー」

ズズツ、ズズズズズズー

……んまい！ では待望のチャーシューを。おつ、ホロツと崩れますねえ、これは期待大です

ねえ……

「……むまい！」

しあわせそうやな。

食い姿幸せそうな人は、本当に幸せそうで、たいへんよろしい。  
俺も担々麺の肉味噌をちよつと崩してつまんでみる。

……うんイケる。ピリ辛過ぎず甘過ぎず味噌過ぎずネギの存在感あり過ぎず、いいバランスです。

「そつちちよつともろてええ？」

「早いな！ もうちよつとマイ・ラーメンを喰りなさ……もうだいぶ無いんかいな！ 早いで大は二玉やで！」

「ラーメンは、飲みもんやで！」

「ウガンダ師匠ー！ 帰ってきてー！」

まあどうぞ、どうぞ

「あい」

「……ちよつとなるみ師匠、普通こういう時はかえつこかえつこにしません？」

「あ、ああごめん」

「一人っ子か末っ子ですわね!？」

「末っ子です。上兄二人。」

あ、餃子来た、唐揚げ来た、た、大将、ごはん、ごはん忘れてへん!? わかっているすぐ持つてくる? あ、キター! 山盛りやー! 昔話やー! これを、これを待つてたんや!」

「待つてません!!」

なにひとつ。  
大将笑いすぎです。

人のオーダーを完全に自陣に取り込んでなんの遠慮会釈もなくモツシヤモツシヤと貪りながら、難波師匠、顔だけマジメに話を戻す。

「……その誰か、は、清水リカという女や。コイツがなあ」

「あ、若干その時調べました。なんでもフル代表の経験もすでにある、日本の至宝と」

「調べてんなら話は早い。パワー・スピード・テクニク、そして元氣・勇氣・根氣」

「隙がない!」

「隙がないよお。体格の良さに無限のスタミナに判断の速さ、思い切りの良さ、そしてなにより

鋼のメンタル。どこをどうとつても今すぐフル代表で10番張つてもおかしくない、逸材・オブ・逸材です」

「なぜそうしないんですか」

「長期計画があつて。いまのユースは割と才能のある選手が揃っているんで、次の五輪を今のフル代表で戦つたあと、その後のワールドカップ予選からウチらの世代が華々しくまとめてデビュー」

「ほう、日本には珍しい長期ヴィジョンですね」

「サッカー協会は比較的マシやで。なんたつて世界戦があるんで、結果が誤魔化しようがないからな」

それはバスケットでもフィギュアでも柔道でもテコンドーすらそうだと思うのだが。

それはさておき。

「まあ小学校ん時出会つた瞬間衝撃ですわ。初めて代表候補つていうかジュニアの合宿みたいな呼ばれて行つたら、エーリアンがおんねんエーリアンが。あこらあかんわ、と思つた。巧さとか、ま、強さぐらいなら鍛えたらなんとかなりそうやけど、速さとかデカさとかどんならんやん。特にウチタツパないし」

確かに難波さんは、上背はあまりない。しかしそのボディはまったくムチムチとかミチミチで、筋肉の塊という感じではある。こう、前後の厚みがすごいよね。よく見るとこの人、胸もそうとうでつかいんですけど、それが目立たないぐらい、鎧をまとったような身体つき。

その難波選手が、「どんならん」という。

写真で見た清水選手は、手足の長い、ついでに黒いロングヘアがまるでその名の通りのお人形さんのようなスタイルなのだが。

「……ということウチらの世代では攻撃的MFのファーストチョイスは彼女です。だからウチは、リカのできんことや、やらんことをやって生き延びてきました」

「なんとサバイバル。小学生中学生の頃から」

「具体的には長いパスとか、狭い局面を無理矢理突破するとか。両方リカには必要無いねん。自分で持ち込んだらええし、自分でシュートすりゃええし」

「なるほど」

「ただしリカ・リカ・リカ・リカ・雨・リカ・リカでは攻撃が読まれてしまいますので」

「野球好きですか」

「わりと。あんた関西弁を操るんやから関西にゆかりがあるんやろ？ もちろんタイガースやん

な!？」

「ノー!」

「なにい!? ま、まさかバファローズ!?」

「ノウ! 俺の心の球団は、近鉄バファローズ!」

「バファローズやないか」

「ちつがー!ー!う!! あんなもん近鉄やない!!」

「それはそやけど」

「野球の話は今止めましょう。ラーメンが涙で薄まってしまうので、つてもう完食ツスカ!  
な、なんか追加しますか」

「大将ー! 替え玉二つとライスおかわり、またこれで!」

「炭水化物好きですね」

「お好みにごはんはアリやんな」

「もちろんですよ焼きそばにごはんもアリです」

「うどんにごはんは?」

「バカにしないでください、俺は大阪の男ですよ」

「同志!!」



手をギュッと握ってくれた。  
ちよつと嬉しい。

「……みんなラーメン屋で白ご飯頼んだらおかしいとか言うねん。その方がおかしいやんな」  
「そうです。ていうか人の食い方をおかしいとか言う権利は誰にもない」

「そうとおり！ チミは話がわかるねえ！」

「課長にしてもらえますか」

「考えておく」

「……それでは読まれるので、リカリカたまにナナ、と」

「うい。」

「でまあ、D S C……じゃない、えーウチのチームでは、逆にウチが頼りにされているわけだから」

「なるほど、逆にナナ、ナナ、ときてたまに、えーと」

「マキやんや流乃やね。C Fの愛ちゃんは昔から囧だったんで」

「しーえふ？ あ、センターフォワードか」

「そうそう。」

それで楽しかったんやけど、まあ、これでまた、代表と同じように、脇役かな、と思うと…

…

「ハッ」

思わず変な笑いが出た。

この人は、自己評価が低すぎる。

「んなわけないでしょう。脇役なんて。ありすちゃんも新人のド素人ですよ？ あれはそれこそ賑やかしにすぎんと思いますね。

やっぱり、攻撃の主役は、ナナさんしか居ませんよ」

「……」

顔をふにやふにやとさせた。

喜んでるのか怒っているのか、わからない。

「こんど大地はんに聞いてきましょか？ このやり方の真意を」

「いやそれはやめて。ウチが聞かせたみたいやんか」

「そこはバレんようにやりますて」

「いや。いい。」

真意とかやのうて、うーん……いや、そりやウチのワガママやったな。ちよつとやりたいこととやらなあかんことにズレが出たんで、エーッ？て思うただけや。やりまんがな右サイド」

意外に氣い遣いいでもある。

このへんがユースでも便利に使われる所なのだろ。

うーん。生き方として否定はせんが、もつたいない氣もする。

ほんとに大ちゃんに、こんど聞いてみよう。

「……ナナさんは、どんな選手になりたいんですか？」

「え？ ウチか？」

ウチは……ウチのような選手！」

「そんな心にもないこと言うてもダメですよ。誰か居たはるでしょ心のアイドルが」

「ははっ。」

まあ、そりや居ますよ。ありきたりやけど、やつぱり、ウチらのポジションやと、マラドーナやねえ……」

「マラドーナか。いまはおもしろ丸っこいおじさんですけど、現役の時は凄かったと聞きます

が

「凄いなんでもんやないよ。一人で試合を決めてしまう。『マラドーナ二世』と呼ばれる選手はメッシに至るまで世界中で何人も出てきたけど、メッシも含めて誰ひとりとしてその域には達してない」

「リカさんは？」

ちよつと挑発気味かもしれない。

しかし鳴海師匠はかぶりを振りながら、その前で手も大きく振った。

「うんにやーにやーにやーにやー！」

大阪のおぼちゃんやな……大阪のおぼちゃんやねんけど……

長く離れていた故郷に帰ってきた時の気持ちって、こんな感じなのかな。

停車場に　ふるさとの訛　聞きに行く

「そもそもタイプが違う。ヤツはどつちかかという試合を壊す。強いていえば全盛期のリヴァウドかなあ。」

「ごちゃごちゃ言うてんと実物観たらええんや。あんた持つてんねんやろ、すごいスマホを」

「いや普通のヤツですけど。ああ、マラドーナの動画ね」

「そうそう」

検索した。たつくさん出てくる。

「どれを」

「八六年メキシコワールドカップ、対イングランド戦」

それだけでもたくさん出てくる。

「ちよつと見せて。NHKの中継がええねん。……んー、えーと、あ、これかな」

一応ラーメン屋といえど飲食店、イヤホンを出して、ひとつずつ耳に入れる。再生。

画面の中でマラドーナが鳩胸を張って躍動する。

パスが入り、ドリブルをする。

敵が寄ってくる、かわす、かわす、かわす、かわす、そして、かわして、ゴールする。

「……すばらしい」

「せやろ？ あんたこれ見たことない？」

「あるけどこんなしつかり見たことはなかった。サッカー、ちよつと観てると、このプレーがウ

ルトラプレーだつていうのが、よくわかるね」

「そお。」

世界中の攻撃的MFやFWが……いや、世界中のサッカー選手が、これがやりたくてサッカーをやっていると言つても過言やない。いや過言。でもチャンスさえあればこんなすんごいのを、やりたい」

「わかる」

「歴代ベストシュート集、みたいなアンケート取つてもいつでも不動の一位やからなあ。二位以下はいろんな意見があつても、一番はこれ。」

ああ、それを更新できるような、スーパープレーが、やりたいねえ……」

「やるさ」

「またそんな適当な。」

あんたホンマ適当やなあ」

「いや、やりたいと思う人はきつといつかできるもんだよ。」

やれるかやれないかには、それがだいじ。」

むしろそれ以外はどうにでもなる」

「そうかなあ。」

これ大変やねんで、見てるよりも」

「難波鳴海なら、やれる」

「フッ」

呆れたようだ。

「ウチそういう、根拠のないことを相手の歓心ひこうとしてペラペラ言う人、めっちゃ嫌いやねん」

「そらすまなかった。」

「じゃあ撤回する。難波鳴海には、こんなことは一切できん！」

「人の話マジメに聞いている？」

「できん断言されたら嫌い悪いやないの。ウチかて条件が整えばできますよこれぐらい」

「せやからできる言うたつてんのに嫌いやとか言うから」

「それは……乙女心がわかってないなあ」

「よく言われます」

「誰に。あれか、あの前の試合ん時にズラズラ連れて来たファンクラブ御一同か」

「ファンクラブなんかとちやいまんがなこつちが頭下げて普段から付き合ってるからあんなところへ来てくれるんであつて……ははーん、妬いてる？」

「なにを妬くねん。」

餅か」

「ポイントカードはお餅ですか？」

「安倍川も磯辺もええけど、極めつきは砂糖醤油やね」

「オンリー・ザ・醤油生一本やろ。」

「なんで糖質の塊である餅にまだ糖を掛けるか」

「やっぱりあんたエセ関西人やな。」

「糖質・オン・糖質の喜びがわからんとは」

「道頓堀で産湯を使い、子守唄が枝雀師匠のこのワテが、エセ言われると堪えますな。」

「糖尿なんでそんなG I高い食い方してたら！」

「食事制限して長生きするぐらいなら、美味しいもんたらふく喰って早死したい！」

「そんな人間に限って長生きするから人生っておかしいな」

「せや。」

「ストレスが無いからな。」

「人間はだいたいストレスで死ぬねん」

「難波さんは……それでは死にそうにないなあ……」

「なに言うてんのん、ウチストレスだらけやで。その解消を、こうしてグルメでやってるわけ



「や」

「ポツと出のありすちやんにトツプ下奪われたしな」

「キツ、キエエエエエエエエエエエエエエエエ!!」

たつ、大将!!

ふつうのラーメンもう一杯!!」

「まだ喰うんか!」

「ライスつけようか?」

「もちろん!」

「シエー!」

「その擬音をしゃべんのやめ。オタクみたいやで」

「もうなんでも言うてくれ」

「それとギャグめかしてズバズバ言うのもな。」

モテンで」

「モテる必要なんか無い。一人にウケればええんで」

「言うなあ。確かにその通りやけど。」

……あんた、おもしろいな」

「なるみ師匠ほどやおまへん」

「……ズバツと言われるのに慣れてなかつたんかもしれん。

せやな。ウチはまだまだ修業中。なにごとも成してない身や。足らんところは指摘してもらつて、ガンガン直していかなあかん」

「ですな」

「よし！ 大将、唐揚げも！」

「そこは足りとるやろ！」

「あーん、こない出すハメになるとは……」

「へっ!? なに奢ってくれんの? 割り勘やろ!?」

「サラツと詐欺を認めて強盗をごまかすようなやり口はやめてください。いや出しますよ俺が誘つたんだし」

「悪いやん、別にデートでもないし。」

「あ！ これチーム経費で落ちへんの!？」

「その方が悪いわい」

「栄養費、栄養費」

「えーっ……えー……あ、アリかな?」

「アリやで、アリアリや。予算次第やけど」

「いやまあ、予算は、無いわけでは、無い。そやな、栄養費言われたらそら確かにそや。よし」

「いやつたー。大将、餃子もうひとつ」

「うおおい」

「あんたの分やがな。ウチばーっかり食べて、あんたあんまり食べてへんやろ？」

……：そういうえげそうやな。

サイドオーダーはもちろん、担々麺もほぼほ喰い尽くされた。

「じゃあ湯麺タンメンにしようかなあ」

「お、ええね！ 湯麺と餃子ね！」

「いや餃子じゃなく、いや、まあ、いや」

「あんたエエ人やな！」

「食いもんで釣られないでくださいな。タダ飯タダ酒ほどあとで怖いものはありませんで」

「怖いん？」

「いやいまは怖くないけど。」

みんなには秘密ですよ。さすがに四六時中となると足らんくなりそうや」

「もちろんですよ、二人だけのヒ・ミ・ツ」

「やれやれ」

ニコニコしてる。

たんじゅ……シンプルやなあ。

スポーツマンてのはそうでないといかんのかな。  
ちよつと見習いたい。

「……もつかいマラドーナを観よう」

「あ、ウチもウチも。これなあ、実況がまたサイコーやねんや」

「そやなあ。

これぞ実況て感じやなあ。

あ、そうだ実況ええな。実況アナウンサー、雇うか」

「ええっ!? そんな口もあんの!？」

「ああ、放送部に高安てのが居て、ヤツはお祭りとか大好きだからたぶんやつてくれる。もちろんタダで」

「はー。すごいな、あんだ」

「は？ なにが」

「頼れる友達が多くて」

友達は友達同士持ちつ持たれつだろう。  
困った時に頼れてこそ友達ではないか。  
中国人なんか金借りる時まず友達に借りるんやで。

「難波さんにはチームがあるやないスカ。  
頼れる仲間が」

「ハハッ。まあ、せやな。」

いやあ、ユースの方はみんなライバルでもあるからね。そんな気軽に『やってー』『おっけー』みたいな間柄ではなくて」

「そらいかな。それではチームは強くなるん」

「そうかなあ。緊張感あつた方がええことない？」

「Googleの研究で、いろんな働き方やチームの作り方と、そのチームの創造性との関連を研究したのがあつて、結果導き出されたのが、創造性のある、生産性の高いチームってのは、」

「仲の良いチーム？」

「そう」

「うーん……」

「あなた自身が実践してゐるのではないですか、ド素人を一〇人集めて全国へ出たあなた自身が」  
「いや、細かく言うとはド素人つてわけでもないんやけど……  
そうか。そやね」

「だからありすちゃんとも仲良くやつてください」

「キエエエエエエ！」

「あんたホンマ底意地が悪いな！」

「んー？ そうかなー？」

「ま觀ましょ觀ましょ、マラドーナを」

「よし、あ、湯麵きた。いただきまーす」

「あれ？ それ僕の……」

「……ふえ？」

「いやいいです。」

……ああそうか八六年言うとはオークランド戦争の直後か。でイングランド対アルゼンチンという本物の『因縁の対決』やな。こらあ熱狂するわ」

「ほれな、ほんでほの前のフレーがまたひゅーめーなフレーでな」

「食べてからしゃべりなさい」

「ぎょーぎ、はべへええで」

「はいありがとうございます。」

「……おもしろいなサツカー」

「ほもしろい、つひゅーねん」

三十六はまだ知らないが、難波鳴海が皿皿の料理を人に勧めることはまず無い。イヌかネコを想像して欲しい。順番を待つということはあっても、譲るとなると親子か夫婦の間柄になる。

つまりそういうようなことだが、三十六はまだ知らない。もちろん、ナナもまだ知らない。

## ●五場 革命

「……ちよつと質問があるのですが、大コーチ」

「うん、なに？」

ちいさいなりとも三十六が見つけてきた部屋である。以前「印刷室」としてガリ版印刷機が動いていた部屋で、片隅にはまだ動きそうなそれらがいくつもう高く積まれている。部屋サイズは六畳ほど。さすがに狭い。だからミーティングなんかはもちろん青空、着替えは汎用の女子更衣室。しかしであるがゆえに、ここには大地と三十六の二人きり。うふ。

放課後である。

三十六は昨日の話どおり、大地に疑問をぶつけた。

「……素人の疑問なんで、複雑な理由があんねんやつたらそれでええねんけど、えーつと、わたし昨日ちよつといろいろ調べまして」

「はい」

「トップ下、というのは攻撃の指揮をしつつ自分も点を取りに行く、重要な役割だと知りまし



て

「ああ」

主旨がわかったらしくちよつと表情を和らげるが、続けた。

「なぜ、難波さんではなく『新人の』ありすちゃんなんですかね」

「いい質問です」

軽くイタズラっぽく微笑む。

うーん、こんな表情が似合うのはハリウッドスターか上町大地か、つて感じやな。ぐるり、あたりを見回す大地。

「……内緒の話、したら誰にも言わない？」

「も、もちろん。墓場まで持つて行く」

うわあ。

コイツあかんわ……こら女の子ヤバイですよこれ。二人だけの秘密の共有。基本ですな。

「はは、墓場までは要らないと思うけど。」

えーつとね、まずサッカーのチーム作りには、おおまかに分けて二つの方向があるんだ」

「うん」

「それが『ポゼッション』と『カウンター』。」

『ポゼッション』というのはできるだけボールを支配し、それを敵陣まで運び、ゴールを狙う。ボールを持つている限り点を獲られることは絶対に無いんだから、一〇〇%のボール支配率を達成できれば、必ず勝てる」

「そらそやな」

「対して『カウンター』というのは、まず相手にボールを持たせて、攻めさせる。するとサッカーの場合は、相手選手が大勢こちらに上がってくるので、逆に相手陣に大きな隙ができる。ここを狙う。ギリギリでボールを奪回したら、大きく縦に運んで、一気にゴールへ」

「ふむふむ」

「もちろんどちらのチームもそれしかしない、つてわけではなくて、状況に応じて逆の戦法も使うんだけど、基本ラインはどちらかに決めておく。なぜなら、戦術にあった選手を起用しないといけないから」

「そうか。」

たとえばポゼッションなら、ボール扱いの巧い選手、とか？」

「そうそう。」

カウンターなら、特に前線に速い選手が欲しい。守備も、足元の巧きなんかより、とにかくタフで打たれ強い選手がいいね」

「ふむ。」

で、我らがミラクルズは」

「その前に、両方のデメリットを挙げておくと、まずポゼッションは、巧い選手、これは一般的には数が希少で、プロなら高価、を揃える必要がある、かつチームとしてどんな時に誰がどう動いてどうパスを回していくか、来る日も来る日も練習して練度を高めておく必要がある」

「わかる。」

ボールをずつと持つてなあかんもんな」

「カウンターは、守備力がないとそもそも成立しないのと、速いフォワードが少なくとも一人必要なのと、それから、相手が出てこないと仕掛けられない戦法なので」

「そりや隙ができなきや突けんわな」

「先制点を奪われたり、相手がこちらを格上だと認識していて最初から守る気満々で引かれたりする、やりにくい」

「なるほど……」

てことはやはり、カウンター」

「ご明察。

さすが三十六、話が早い」

「俺やのうてもすぐわかるて。そこそこ経験あるゴツいディフェンダーが居て、GKが良くて、そこに可憐ちゃんや。こらもうカウンターにおあつらえ向きやないか。名門校でも伝統あるクラブチームでもないから、相手も舐めて掛かって前に出てくるやろうし」

「そう。

しかしそれでも、相手がカウンター・チームだとわかってると、警戒される。特に強いチームになればなるほど、そういう『守って守ってカウンター』というチームとはよく当たっているの  
で、対応の仕方が巧い。

そこで僕は」

「はい」

「このチームが、カウンター・チームであるということ、隠します」

「おおお、なるほど！

敵を欺くにはまず味方から、か」

「そのとおり。

うちはカウンター狙いだ、と思っていると、自然そういう動きになってしまう。それだと敵に

警戒される。あくまで普通に、ボールをできれば支配して、前に運んで、点を獲りたいなあ、という感じで戦う。がつぷり四つ」

「しかし実際には、ここぞ、というところで本性のカウンター・アタックが炸裂して」

「勝つ」

「うーん」

見事な机上の空論だ。

一般的に、戦略目的は末端に至るまで徹底されているべきで、それによって現場で臨機応変に、「現在の目的に対して合理的な行動は何か」をその場その瞬間に創り上げていく……のが、理想的だとされる。

秘密作戦というのは、イメージほど効果的ではない。

ましてウチには、

「……それ他ののもかく、可憐ちゃんとナナさんを騙せんのか」

「それさ。それが胡桃とありすの役目」

「む」

「誰がどう見たって普通、このラインナップだったら、此花可憐1トップで決まりだよ。ポゼツ

シヨンとかカウンターとか関係ない。しかし、そうはなっていない。この14番の役目はなんだと」  
14番は、胡桃の背番号。

「動き出すと、楔のボールを受けるポストプレーと、空中戦を中心に最前線に居る。なるほど、このチームはまずここに当てる、そこから展開していくチームなんです、つまりボールを繋げてじっくり攻め込んでいくチームですね、と」

「むむむむむ」。

その流れで行くと、ありすちゃんがつップ下なのは」

「可憐ーナナと縦に並んでいると、まちがいなくこの二人で速攻仕掛けてくるってバレバレなので」

「離す、と」

「それが第一番目の理由」

「うーん」

そりや言えんな。

「二番目には、ありすは初心者だけどわりとやれそうなんだ。あんまり約束事に縛られないトツプ下で経験を積みあげば、あれは大化けしうる」

「まあ、あのシュートは凄かったな。あれはビギナーズ・ラックなんて範疇を越えてると俺も思う」

「でしよう。」

「なかなか見られるものではない物を見たよね」  
「うん」

前戦で放たれたマジカル・シュートは、脳裏に焼き付いて離れない。

スタメン発表時に攻撃の選手からできささほどの反発が起きなかったところを思い出すと、それはチーム全員の脳裏にある。

「で三番目に、ナナはトップ下、もちろんとても向いてると思うけど、サイドアタッカーやボランチでも、それと同じぐらいか、むしろそれ以上の力を発揮しうる、と思うんだ」

「ほう。それはなぜ」

「キックの質。フリーキックやコーナーキックを見ればわかるとおり、流れの中でもクロスの質は天下一品だ。あれだけでご飯が何杯もイける」

「飯が食える」の方がいいな。

「フォワードの近くに置くと、そのチャンスが減る。それが、とてももったいないんだ」

よし、こつちなら話せそうだ。

「どのぐらい？」

「デイビッド・ベツカムという選手が昔イングランドに居てね」

「聞いたことある。ハリウツドスターばりの二枚目で」

「二枚目だから損をしてるんだ。やつかみかなにかしらないけど、選手として明らかに過小評価されている。実はもの凄い選手なんだ」

「どんなふうによ？」

「ハーフウェーから向こうなら、どこからでもゴール前にボールを正確に供給できる、恐るべきクロスを持つ」

「おー、凄いなそりや。」

「ほとんどチート（不正技）やな」

「ああ、やつぱり知らない人の方が凄さがわかってもらいやすい……」

「そうなんだ。万全の状態でクロスを入れれば、FWは下で待つただけで得点チャンス」



「上飛んで行けば、地表のディフェンスとか全部関係ないしな」

「そう、そう、そう。」

僕がもしワールド・オールタイム・ベストイレブンを組ませてもらおうとしても、ベツカムはどこかでなんとかして、システムを変な形にしているでも使いたい」

「チートつちゅーか……空間を操る能力、テレポーターションとかそのたぐいなので、特殊技って感じやね。」

ああ、王さんが王シフト敷かれた時に、『ホームランなら関係ない』と言い放った故事成語を思い出す」

「王さんって、ホームラン王の？」

「そそそ」

「ホームランに似てるかどうかはわからないけど、要するにさつき言ったように、ウチは実は『速攻から一発』を決めたいチームなんだ。」

ナナはその能力を活かして、できるだけ遠くから、ゴール前に、というか突っ走る可憐めがけて一気にボールを放り込んでもらいたい」

「なーるほどー。」

でもそれならそれで、そう伝えればエエやんか。それなら難波さんも納得するだろう」

「あれ、何か言ってた？」

「あいやなんにも。あ、違う、え、いや、ちよつと僕の想像で」  
「なるべく長いのを遠ーいところから入れてくれ、と言うと、あんなヴェテランなら『あーはいはいカウンターですな』とバレちゃうよ」

苦笑する。

しかしそこまでせなあかんもんやろか。

可憐ちゃんはちよつと知らんが、難波さんなら意図を理解したうえで、適当にそう見えないように誤魔化してくれそうな気がするが。

「それでも得点能力の高い人を、ゴールから遠いところに置くのも、これまたもつたいないんじゃないの？」

「いや、昨今の流行では、ウイング気味のサイドアタッカーは、クロスを上げるだけじゃなくて、自らインに斬り込んでどんどんシュートを、得点を狙うポジションだよ。トップ下に比べて攻撃的じゃない、なんてことはない」

「そうなんか」

「もちろん選手の得意不得意もあるし、向き不向きもあるけど、基本的に攻撃の選手はいつでもゴールを指すわけだから、ポジションはどこでも一緒だよ。」

いや、サッカー選手たるもの、センターバックでもチャンスとあればロングシュートを撃つてもいいし、駆け上がってゴール前空中戦に参加してもいい」

「まあそれでも野球でもね、『四番バッター』には特別な記号性が」

「チームの勝利より四番になりたいことを優先する選手は要らない。すぐベンチ」

「ふええ」

躊躇いゼロ。このひとならユース代表でもベンチへ放り込むだろう。

しかし理屈はよくわかった。まずは合理的でもある。

それとなく伝えて……伝え……いや俺のサッカーの理解度ではヘタに何か喋らんほうが、ええかなあ……

「あ、あと四番目として、ナナで無ければ右サイドはおそらくマキになるんだけど、昨日言つたとおり彼女は守備がかなりザルいので、後ろに控える明日葉に負担が掛かり過ぎる」

「あ、そこも聞きたい。」

前の試合観てて、可憐ちゃんとありすちゃんは採用理由がよくわかります。エレーナちゃんもよく頑張ってた感じがするし、なんととっても運動性能が高いので育てたい、そんな感じはわか

ります。しかし明日葉ちゃんはある限り目立ってなかったと思うんですが」

「目立ってなかったでしょ？」

それが、デインフェンダーとして素晴らしい才能があるってことさ」

「はあ」

「敵が攻め込んででもなんでもなく処理する。

いや、攻め込みそうな時にその芽を摘む。

いやまず、攻め込もうと思わせない」

「ほほーう」

「右サイドバックは替えるまでなごだったんだけど、確かに派手にやられたりはしなかったんだけど、なんだかガチャガチャしてて、落ち着かなかつたんだ。相手のサイドの選手とずーつとべつまくなし引つ張り合いやつてて、ちよーつとキツいなあ、と。彼女は守備力そのものはかなりいいと思っただけね。そういうサイドバックが必要なシステムや戦術の時は、使っていききたい。

対して明日葉を入れた瞬間、なにも起きなくなつた。もちろん攻める時間帯が長くなつたのもあるけど、これはなかなかいいぞ、と」

「ふーむ」

これひとりひとり聞いていくと、山のように答えが返ってくるのだろう。

……おまかせした方がええね。

「……しかしさすがコーチというか、すでに権謀術数がスタートしているとは思いませんでした。しかも味方をも相手に。」

あつ、ひよつとしてボクもいま何か仕掛けられていますか」

「ははっ、そんなことないよ。」

むしろいま正直に話してて、僕の頭の中でも議論が整理できた」

「わしゃ黒幕の膝のペルシヤネコですか。」

……しかし正直……おもしろい」

「でしよう」

ニヤリ、笑うと、にやり、笑い返される。

もつかい、カマ。

「いやあ僕やつたら難波さんは彼女の好きなポジションで自由にやつてもらいたい、と素直に思っちゃうけどなあ」

「いや。むしろ自由にやつてもらおうよ」

「そうなの？」

「これを見て」

ノートを広げると、おお、これは新システム。

背番号がピッチに並ぶ。

脳内で変換が忙しい。

7は……ああ、右サイドに。

「ここ全部、ナナの仕事場」

右上部分、つまりピッチの1/4を大きく指し示した。

「対してここがトップ下、ありす。窮屈でしょう？」

「むむ」

すぐ前に9（可憐）と14（胡桃）が居て、すぐ後ろに10（美緒）が控える。その脇に8（エレーナ）まで居る。確かに、比較にならないぐらい狭いゾーンだ。

「もちろんありすにはここに囚われず自由に動け、と指示するつもりだけど、どのぐらいやれるかはやってみないとわからない。対してナナなら、この広大なスペースを上手く使え、といえ、きつと上手く使ってくれる」

「なるほどね。」

いやあ、すみません差し出がましい口を聞いて。あれですね、齧りたてのニワカがプロがよく考えた結果に口出さん方がええですね」

「いや、プロも思考の迷宮に迷ってわけわからなくなることも多いよ。どんどん疑問はぶつけて。それより僕が気になるのは、むしろナナは、攻撃的MFとしてはちよつとまともすぎる気がするんだ」

「まとも？」

「教科書的というか……いや違うな、もつとエゴイステイックでいいと思う時でも、周りちゃんを見て、着実にプレーを進める。」

あれじゃボランチだよ。オフエンシブハーフってのは、もつと突撃小僧、いや小娘か、つて感じだいいと思うけど。マキを見ればわかるでしょう、前に突っ込むことしか考えてないよね」

「うむー」

その理由のすくなくとも一部を知ってるが、これは伝えるべきだろうか？

……ペンディング。

「そりゃまあ、去年はチームまるごと背負ってたわけですから。ハチャメチャはできませんって……そうか。まあ、そうだよな。」

じゃあ今年は、前に可憐も居るし、美緒に後ろをまかせられるし、大暴れしてもらいたい、もんだね」

「うんうん、慣れてきたらきつと本性があらわになるって」

とりあえずそう言っておく。

本性か……代表でもずつと清水リカとやらの相方。それは彼女の持つて生まれた「星」かもしれないが、しかし、ボケとツツコミで言うならあきららかに彼女はボケ……いや？

「……ツツコミかもしれん」

「ん？」

「いや、そうやな。完全にツツコミやないか。ツツコミの人間がボケになろうとしたらあかん」  
「？」

「ということは、や。いや、そう、まわりにエエボケがおらなあかん。それこそがツツコミのツツコミ力を引き出す一番簡単で効果的な方法！」

俺は自分をツツコミやと思うてたが……

……ふふ、この空堀三十六がボケをせなあかんようになるとはな……



「どうしたの、三十六」

「あ、ああこつちの話。」

いや、言つてから、『本性』なんてもんは、自分が一番よくわかつてないなあ、と思つて」

「ははっ、そうだね。僕も、まさかコーチやるとは思わなかつたし、こんなにおもしろいとは思わなかつたよ。向いてるかどうかは、わからないけど」

「オモロイと思うつてことは向いてんねんて。板についてるでー」

「そう？ だったらいいけどね」

板につきすぎてて怖いぐらいや。

カマボコか。

「そらあしかしオモロイなあ。これで狙い通り、強豪をぶつ倒せればまた」

「もちろん。クイーンズカップでは優勝を狙う」

「おお！ 言い切つた！」

部員一六人うち四人が新人さんの高校生チームが、日本最大のオープン大会で優勝するて言い切つたで！」

「いや。」

そんなもんじゃすまない。

ミラクルズは日本のサッカーに、『革命』を起こす」

「かくめい！」

また激しい単語が！」

「革命を起こす」。

男子なら一生に一度は吐いてみたいセリフだ。たとえそれが「トイレの掃除ブラシ目立たず収納革命」であつても。

「……あはは、『革命』はちよつと言ひすぎかな。『一石を投じる』ぐらいで」

「いやいや、なんでも言ひ過ぎなぐらい、大袈裟なぐらいがええねんて。して、革命とはどのような」

「それはナイシヨ」

ウインク。

惚れるくくく。

「ちよつ、ちよつ、ヒント、ヒントだけでも」

「あはは、いや、もつたいぶるほどのことはなくて、つまりカウンターとポゼッションを融合したようなことをやりたいんだ」

「ほう」

「というか、さつきも言ったようにいいチームというのほどもチームレスにやれる。ポゼッションの総本山、バルセロナだって自陣深くで拾って快速FWが走ってれば躊躇なく縦一本を送り込むし、カウンターの強力なリアル・マドリールだって、じっくり攻める時は急がずボールをくるくる回す。これをね、やる」

「やりたい、ではなく、やる」

「うん」

「高度すぎませんか」

「いや、むしろどちらかに方向性を決めることから話がややこしくなってる気がするんだ。ボールを、『ゴール方向に動かす』のと『いい状態の味方に渡す』というのは、独立の事柄であつて、別に相反する要素ではない」

「しかし一致してゐることは珍しいですよね」

「もちろん」。

でも選手個々のワンプレーにまで分解すると、たぶんどちらかはやれる。逆に、方向性を決めちゃつてると、その方向性に沿わない場合、無駄なプレーになる」

「……ん？ ほな何かえ、ワンプレーごとに、極端に言うのと、ポゼッションとカウンターが切り替わる、つてこと」

「極端に言えばね」

「それ、は、無い、ん、ちゃうかなあ……」

野球で言うたらビッグボールとスモールボールを混ぜるようなもんやろ？」

「？」

「ああ、えー……ノーアウト・ランナー一塁でバントしますか、ヒッティングしますか。混ぜたら戦略がブレるやろ」

「だからそこだよ、混ぜない方がおかしいんだつて。バントしてくるとわかってたらそう対策されるし、打つてくると決められてるならそう対策される。『わかりきっている』アクションを

『攻撃』とは呼ばない」

「いやいやいやいやいや、そこはホレ、確率や能力・技術の良し悪しがモノを言うのであつて」

「要塞があるとするよ、毎晩一二時に白兵夜襲、毎晩それやってとれますか？ ある日は遠距離から大砲で撃つ、ある日は夜襲、『いつたい次はいつ何をやってくるんだ』と」

「いやそれは例え方が巧いだけちゃうかな……」

大ちゃんの言わんとすることはなんとなくわかるのだが、なんかこう、話のレイヤーがズレてる気がする。

「それは戦術のレベルでは有効だろうけど、戦略のレベルではある程度方向性があった方がやな」

「戦略のレベルでこそその瞬間の判断を基にした反応、変化が重要だよ。クリティカルと言ってもいい」

「う、うーん、まあ、たしかに」

ガダルカナルにインパール、着眼点の悪さと計画の杜撰さはもうしようがないとして、一番良くないのは失敗を認めず戦略を転換せず、ズルズル引つ張ったことだ。スッパリ諦めた時に比べてダメージが三倍五倍一〇倍になる。

「……ま、まあでもお手柔らかにね。どんなシステムでも『両方』てのはね、これなかなかね、片方だけでも極めるのは難しいもんで」

「いや、むしろ両方やるのが前提なら、どちらも極まって無くてもいいんじゃないかと」

「大谷翔平を御覧なさい！ あれは投手としても野手としても一〇年に一人クラスの逸材だったから二刀流なんてことができたんですよ！」

「デイ・デイ・エ・デシャンは速くも巧くも強くもないけど、ワールドカップとユーロを連勝してついでにCLも獲つてる偉大なるキャプテンだよ」

「ああいえばこういう」

「……本当に強いチームっていうのは」

不意に眼が真剣になった。

やっぱりこつちの方が惚れるな。

「その瞬間その瞬間に最適な一手を繰り出し、相手の反応や結果によつて素早くそれに対応した次の一手を繰り出せるチームのことなんだ。最初からデザインされた『こうしなさい』を機械のように正確に精密に繰り返すことができるチームのことじゃない」

「……それは、よくわかる」

そして俺は詳しくないが、おそらく日本のチームに、特に強豪と呼ばれるようなチームには、そういうチームが多いであろうことも。

「そうやって新しい刺激に対して自分の力や技術、感覚を総動員して反応する、これがサッカーのいちばん楽しいところだよ。自分でも想像もしていなかったプレーができたりして、クリエイトとか、成長とか、そういうことまで実感できる」

「なるほどね。」

だからそうじゃないようなチームは

「叩き潰す」

「おつかねー」

「……ウチからプロになるのはぶっちゃけ可憐とナナの二人だけだと思う。でも進学したり就職したりしてチームを離れても、『ああサッカーするの、楽しかったな』といつまでも思ってた欲しい」

「突然学校の先生みたいになった」

「おんなじだよ、根はおなじ」

「……そう聞くと、確かにそうやねえ。」

しっかし、難しいこと考えるなあ」

「難しくなんかないよ。つまり、

『楽しくやろう』

つてことか」

「で、楽しくなければ、やり方が間違ってる？」

「そうそう、そう。さっすが三十六、やつぱり話が早い」

「できますかね」

「する」

「もし全国へ行けても？」

「行つてからが本番です」

「ヒューカツコイ」

なんだこの当然だと言わんばかりの溢れまくる自信は。そりやまあ確かに「根拠の無い」とま  
では言わんが、言い切るには高すぎる目標だぞ。

「……うーん、この、

『おれがやるつて言つてんだから、やれるつしよ』

みたいなどころが、ぼくに無いところやねえ」

「無いところがあるから、コンピを組んだりチームを組んだりする意味があるんだよ」

「そりやそうだ。あそうそう、俺には『革命は二人で起こせる』という持論があつてやね」



「うん」

「創造者の天才と実務家の秀才がコンビを組めばいいんです。そうすると一十一が二ではなくて、一〇とかになる。」

本田宗一郎に藤沢武夫、盛田昭夫に井深大、毛沢東に周恩来」

「上町大地に空堀三十六」

「言うてて恥ずかしいわ!」

「あはは、恥ずかしいねえ。何様だつて」

「いやいや、革命家はそんなぐらいの勢いでないと。」

わたしのフェデルよ、このゲバラ、貴方と革命のためならこの身を投げ出そう」

「キヤラ的に逆じゃない?」

「そうすると失敗するやないか。カッコイイ方やりたいやん。男の子やもん」

「畳の上で死ぬるよ」

「キューバに畳あんの? てかまだ死んでへんし」

「まあとにかくそんな感じで、これは内緒」

「どつから? 全部?」

「そう。隠れカウンターから」

「わはは、すぐバレんちゃうかな。可憐ちゃん鼻効きそうだし」

「可憐はあんまりそういうの興味なさそうからだいじょうぶ。漏れるならナナかな」

「ナナさんなら……黙つといてくれ、巧いことやってくれ、といえ、そうしてくれると思うよ」

「ふむ」

「というか、難波さんには『あなたは大黒柱です』とハッキリ伝えたほうがええように思うね。あの人多分、そういうこと言われると実力以上に奮起するタイプ」

「いや、だからそういう風みんなが扱うから、重荷になつて、それをやろう、それをやろうと無理をしているようにも、見える」

「……」

ううーむ。

俺にはサッカーのことはわからんが、ピッチの上ではそのようにも見えるのだろう。それは、普段もそうかもしれない。

まだよく、知らない。

知るには？

「……みんなで遊びに行こか！」

「ん？ どこへ？」

「どこでもええねん、せやな、しゃつかてんでも行きますか」

「シャツカテン？ ああ、あの新しくできた大きな」

「そそ。我がステーションに敢然と聳え立つ、商業ビルとしては日本一の」

「おのぼりさんだね」

「イエース」

「あれ、あれでも上がるのにお金要るんじゃないやなかつたつけかな」

「む。マジか。ちよつと調べるわ。要るようなら……なんとかしよう」

「なんとかできるの？」

「世の中の物事にはだいたい裏口がある。大きなシステムほど抜け道やバグがある」

「ほほー」

あれだね、でもユニフォームとかも頼んでるけど、ホントにだいじょうぶ？ 無理しちゃダメ

だよ」

「無理なんかしまつかいな。

お金出すほうが泣いて喜んで出す。

これがスポンサー道の王道」

「それはそうだろうけど……」

ま、まかせるよ」

「まかせまかせ。泥船に乗った気分で」

「嫌だなあ」

「じゃノアの方舟」

「それも嫌だよ」

「世界が滅んで自分の家族しかおらんねんな……どうするよ、ある日方舟に載せられてこのチームだけ生き残るの」

ほわほわほわほわ……

想像中・妄想中・悶絶中・

ちーん

「「死ぬ」」

「どうしてこんなおそろしい想像をさせるの。三十六、僕になんか恨みがある？」

「無い。すまん。俺が悪かった。カラツカラになってまう」

「僕には丸い何かを回してる絵が浮かんだよ」

「世界は滅ぼしたらあかんよ」

「うん。人類みな兄弟。みんな、なかよく」  
「基本やわ……それが基本やわ……」

革命家も身内には弱い。

## ■第二幕

### ●一場 迷子

ということをやつてきたのは日本一高いと噂のビル、『ハル・カナル』。百貨店つまり巨大デパートを中心に、ショッピングモールに映画館に美術館に巨大書店に家電量販店……つまりなんでもある。

二年生八人ご一行、試合のない休日には暇なもので、誘えば全員来た。とりあえず展望台でも昇つてお店でも冷やかして茶でも啜るか、と典型的な青春ノー・プラン。映画は各々の観たいものが笑えるほど一ミリもかぶらないので難しく、美術館は興味があるのが三十六とはなだけという溢れ出る非文化性が素敵すぎるー。

興味ありなしは別にして一応誰しもがお世話になる、服のお店を覗くとそのはなこの独壇場。それぞれにあれやこれやと似合いそうな服を頼んでもないのに持つて来てくれる。またかなりセンスが良くて、その気にさせられてしまう。

三十六に黒白ボーダーのシャツを、押し付ける。

「いやシマシマなんか俺着たことないから」

「似合う！ イケる！」

「えーそおかなー」

確かに鏡を見ると、いけんこたない気もするが、若干胡散臭い気もする。芸術系文化人……に憧れてオサレカフェ巡りが趣味の意識高い男子で感じた。

……ああまあ、否定はせんけど。

「このグラスを掛けて！」

丸くて黒い縁の……

スチャツ。

「こりや無理だ！」 「バツチリ！」

「ほらみんな笑ろてるやんか！ こんなもんシマの色赤やったらウォーリーやろ！」

「そのぐらい似合ってるってことじゃない！」

「天満さん？ どっすかこれ？ ダメですよね！」





「さすが美原さんだなあ」

君らなあ。

難波さんに姿見の前まで引つ張つていかれて、二人でポーズ。

彼女はあごを両手で支え、僕は両手をパツと広げて二人で営業スマイル・マキシマム。芸人名鑑に載るイメージで。

いや。

どわっはっはっはっはっはっは……

笑いすぎやて。

ちよつと。店内でフラッシュ撮影は止めなさい。

「……イケるなあ？」

「あかんで」

「ウチ、プロのサッカー選手になられへんかったら、モデルやろうかと思ってるんやけど」  
「なんやその『パンが無ければお菓子を食べればいいじゃない』的な」

「漫才師もアリやな」

「だからあかんで」

「夫婦漫才の席は一つ半はある。もう大花が物理的に寿命やから、かつさゆの次に」

「大花あれあと二〇年はいきますよ。」

「失礼やな君も！」

「コンビ名は『メガネ夫婦』」

「ひねれ少しは」

「『シマシマメガネ』」

「ひねれ、言うてるやろ」

諸君笑いすぎですて。

つまみ出され……っていうか店員ども笑うな。

あかん。

こんな笑いの沸点の低いリーグにおつたら、技術が錆びつく。

結局、騒がせ賃込みで僕がシマシマだけ買いました。

服あんまり興味ないもんで、こういう機会でもないし攻めの服なんか買いませんもんで。

——ひと騒ぎしたあと、いよいよ展望台に登ろうか、というのでチケット売り場の前。そこで、ちよつとした異変に気づいたのは、閃く野生の勘、天満さん。

「……あれ、あの子、迷子かな？」

五歳ぐらいだろうか、ちいさな女の子が、沈んだ表情でひとりぼっちでたたずんでいる。しかしどうも「ここで待つてなさい」と言われてる感じでもない。

どうしよう、と考える間もなく。

すつ、と難波さんが歩み寄った。俺も、慌てて駆け寄る。

「……お嬢ちゃん、おひとり？」

「……」

首を縦にふるような横にふるような、微妙な動き。

伏し目は恥じらいではなく、なにかもつと重いものに耐えてるような感じ。

「おかあさん、待つてんのん？」

「……」

また同じ仕草だ。イエスともノーとも言えない。それは……

難波さんが顔を上げた。

「空堀君」

「サービスカウンターへ連れて行こう。念のため」

「……せやね。」

お嬢ちゃん、お名前は？」

「……まい」

「マイちゃんか。エエ名前や。おねえちゃんと一緒にゆつくり座れるとこ行こか。おかあさんもきつとすぐ来てくれるで」

「……」

ほんとうにごくわずか、あごを引いた。難波さんが見たこともないエエ笑顔でにっこり笑って、手をつないだ。

俺は事情を説明に戻る。

「……さて、ほなみなさんは展望台の方へ。これチケット。ウチらはあとから追っかけますわ。なかなか来えへんかつたら、適当に遊びにいつてください」

「迷子案内に連れて行くだけなら、みんなでいくよ」

「いや、まあ、たぶん、難波さんの性格からして親御さん出てくるまでついてる、つて言うやろから」

「ああ。じゃなおのこと僕らも行つたほうがいい」

「いやいやいや、どんな部屋か場所かわからんけど、八人で押しかけたらおかしいやろ。二人で」

「賑やかな方が寂しくないんじゃないかな」

「大地君、ここは漫才夫婦におまかせしようよ。」

「……じゃあ、空堀君、よろしくお願いします」

「まかせてちよんまげ」

こういう時は長居さんがコントロールするんやなこの集団は。アクの強い五人が黙って従う。まるでピッチの中のように。

漫才夫婦でなんや。漫才夫婦で。

「……ウチ一人でもええでー」

「笑かすために漫才やれ言われましたんで、相方が必要でしょ」

「ウチはピンでも十二分のおもしろさや」

「一たす一は八以上」

「八て。中途半端やなあ。」

「……あ、ここやここや。マイちゃん、ちよつと待つてな。お姉ちゃんとお話してくるさかい」

受付のキレイなお化粧のお姉さんは、すぐ立ち上がって我々をスタッフルームへと連れて行ってくれた。

最近是这样い事態に備えて、持ち物に名前住所を書いてあるケースが多いそうで、実際マイちゃんのちいさなポシエットからは、プラスチックの板に小さな字で書かれたネームプレートが出てきた。

『米倉舞』

名前も米なら一生食い物には困らなそうだが、さすがに上から読んでも下から読んでも感が海苔すぎるから自重されたのだろうか。

男性のスタッフが電話を掛けてくれている。

さきほどのお姉さんは、冷たいジュースを持って来てくれた。しかもちゃんと三人分だ。

「……まいちゃんジュースやでー一緒に飲もかー」

「……」

いくぶん表情もやわらぎ、しつかりうなずいてくれた。

難波さんはずつと膝を折つて、目線を合わせて語りかける。保母さんみたいやな。やれやれこれで少し待てば……と思いきや。スタッフの人が来て、申し訳なきそうに言う。

「……あのく、米倉様はお一人で来られたようでした」

「えつ、こんなちいさい子が？」

「はい。おばあさまがお迎えに来られるそうで、すこしお時間が掛かりそうです。よろしければ、わたくしどもでお相手させていただきますので、お客様はどうぞお買い物にお戻りいただければ、と……」

「私達がついてあげてもいいですよね？」

難波さんの即答だった。顔を見合わせることにすらしな。

「それはもちろんです。わたくしどもも助かりますが」

「じゃあ、そうします。」

「エエやんな？」

「愚問を」

「……まいちゃん、おばあちゃん来てくれるって。

おばあちゃん来いはるまで、ウチらと一緒に遊んでよかー？」

「……」

まいちゃんはさつきよりはいくぶん力強く、うなずいた。

「あ、ていうか展望台行こや。来はったら携帯で呼んでもらえばエエンやし」

「あそれエエな。」

まいちゃん、ごつつ高つかいとこ昇りに行こかー。見晴らしエエでー。キレイやでー」

「……えれべーたに、のるの？」

「そうそう。ものすごい乗る」

「……」

さらにキリツとうなずいた。顔は真剣だ。

どういふものか経験済みかな？

——スタッフさんにそう告げて、俺達はさつきのチケット売り場に戻った。



「……まいちゃんの分のチケット買わな」

「まだ予備がある」

「なんぼ持つて来たんや。てか切符あんたが用意してくれたん？」

「イエース。割引券なんかあったらいいなー、と思つて金券屋覗いたらやっぱりあつた。これサ  
ービス券、オープンの時バラ撒いたらしくて二束三文でさ。一〇枚一五〇〇円」

「えーっ、これ一枚一五〇〇円で書いたあんで。なんでそんな安いのん」

「見てこれ、『午前中専用』やねん。オープン一〇時で二時間しか使われへん。使いにくいから  
やな」

「ケチやなー。なんぼサービス言うてもなあ」

「ケチりにケチつたからこんなビルが建つんです」

しょうもないことを言っているうちに、高速エレベータが来て、乗つて、着いた。最近のエレ  
ベータは加減速Gの気持ち悪さも無いし、ショックもない。つまらん。

エレベータを出ると、そこは空中庭園。

花壇や緑がそこかしこを彩る、一見ちいさな公園のようできて、見渡せば三六〇度空しか見え  
ない。

なんだかファンタジー世界の空の城に居るようだ。  
というか、そういうコンセプトで造つたんだろうけど。  
そして俺はそのままきに、自分が高所恐怖症であることを思い出した。  
……なるべく真ん中に居よう。

「……おーい」

「あ、いたいた」

六人と合流する。

さつそくみんなでまいちゃんをいじくりだす。長居さんが話しかけ、天満さんがよく見えるようにと抱きかかえ、さらには肩車。堺さんがポーチからキャンディを取り出して与える。

「……いちごミルクと、パイン。どっち？」

「……」

はにかみながら迷うまいちゃん。

「……じゃあ、両方」

ぎゅつと握らせてあげる。にこつ、と初めて笑った。

「愛吉ズッコイわ……飴ちゃんは卑怯やわ……」

「……点は獲ればいいの」

「くそう」

といつても、まいちゃん、もう片方の難波さんの手を離そうとはしない。

「はな、なんか得意芸で楽しませてあげなよ。あっちの方にアメリカが見えるよ、とかなんとか」

「ここで流乃が自慢の長い脚でラインダンス」

「ほんとに子供産んで育てられるの？ あたしたち」

「その前に相手いるかな」

「おるよふたりとも」

「また始まった空堀ちゃんのお調子が」

「いやいや、マジでマジで。おふたりとも人気あんですから」

「「えー」」

「いやほんと。二年生だとね、五位六位を争う」

「おもつきりBクラスじゃん」

「あいやあれよ？ チームじゃなくて二年オールだから一〇〇人中よ？ 六人中じゃなくて」

「なんかちよつとホツとした自分がさかしい」

「なんでそんなデータあんの」

「僕を誰だと思いいですか。全文化部にコネクチオンのある空堀（ヘザ・コネクター）三十六ですよ」

「なんかそんな人気投票だか解析だかしてる部活あんの？」

「それはぴみちゆ。」

あ、いつそオフィシャルに総選挙やるのもいいか。盛り上がりそう」

「ジェンダーなんかやらかんちゃらでぶつ潰してやる」

「五、六が取れるのに!? 子供に自慢できるよ?」

「ダー ダー ダー、空堀ちゃん、カラちゃんおはながわかってない。このひとキューキョクに負けず嫌いだから。そーゆーのも一番以外やなの」

「いやそれはわからんでもないですが愛さんおられますからねえ」

「ツラがいいだけじゃん」

「スタイルもいいですよスラッと立ち姿美しく、まさにプリンセス」

「ちなみに、聞くまでもないけど二、三、四は？」

「和泉つちは案外好きよねこういう話題。そこは団子で、大活躍有名人の難波さん、なんといつでもスタイル抜群の天満さん、そして、おかあさん」

「男ってなんでみんなマザコンなの」

「なるほど、あたしたち武器が無いのよねそーゆーね。あ、はなにはあるじゃん、歌と踊り」

「踊らないわよ」

「歌は否定しませんな」

「ヘタだけど好きよ」

「じゃあカラオケ行きましょかー」

「はな凄いや。採点で全国で一位とか取る。こないだ一〇〇点獲ったよね」

「マジで!？」

「いやマイナーな古い外国のポップス歌うのよ。歌ってるの全国で二〇人ぐらいだから」

「それでも凄いわ。そういう歌が好きなん？」

「いや。勝つために覚えた」

「凄いや!」

「凄いや。一〇〇点なのにぜんぜん心に響かないの」

「るーのー。人くさしてないでたまには歌えー」

「あたし、人が歌ってるの聴いてるのが好き」

「二万パーうーそー」

勝つためにはなんだってする美原さんと、勝てない勝負からは走って逃げる和泉さん。好対照だ。

子供あやし隊とアホ言いながら見守り隊にクッキリ分かれてしまいました。  
まあ得手に帆を揚げて。

見るとずいぶんまいちゃんにも笑顔も増えてきた。よかった、よかった。  
いま気づいたけど、それに応じて、難波さんもニコニコしている。  
よかった。

——と、そうこうしてるうちに、携帯が鳴った。俺は難波さんとまいちゃんを呼んで、みんなと別れて先ほどのスタッフルームに戻る。

## ●二場 シンパシー

——現れたのは白髪もお召し物もたいへんに上品な老婦人。おじぎまで優雅ながら、俺達に山のような感謝の言葉をくれた。少ないですけどお礼を、という封筒をきつぱり押しとどめて、代わりに聞いた。

「……まいちゃん、よほどのことがあつて一人でやつてきたんだと思うのですが、よかつたら思い当たる理由なんか教えていただけますか」

「空堀君、あんまりそういう」

「いえいえ、実は……」

むしろ事情を説明できてホツとした、という表情で語ってくれたところによると。

まいちゃんのお母さんは、遠く空気の良い山中の療養所に居るそうだ。病気なので、当然娘は残していくことになる。旅立つ前に最後に二人で訪れたのが、この展望台。

もちろん今はビデオ通話でやりとりもするのだが、やはりちいさな画面の中では会った気にはならない。手触り・肌触り・そして同じ空気を吸う。コミュニケーションにはそれが大切。

「おお、それはさみしいな、まいちゃん」  
「……」

何の話かわかっているんだろう。ずいぶん緩んでいた顔がまた、薄く曇る。と、難波さんが、膝を折って彼女の肩を両手で持つ。

「……まいちゃん。おかあさん元気にする方法を、教えたらか」

「……え？」

「まいちゃんが、元気になるんや」

それは、真理だろう。

「身体を動かして、友達と走り回って、泥だらけになって、ごはんをおなかいっぱい食べて、ぐっすり寝て、また走り回る。」

これで元気になる。

そしてその姿を、おかあさんに見せたげるんや」



「……」

ぎくぎくとだが、まいちゃん的首が縦に動いた。

「お姉ちゃんな、サッカーやってんねん。サッカー知ってる？ 球蹴り遊びな。知らなかったらおばあちゃんに教えてもらい。お姉ちゃん教えてやれること言うたらサッカーぐらいしか無いけど、よかつたらいつでも教え上げるから、いつでもお姉ちゃんとか遊びに来たらええよ。さっきいたお姉ちゃんたちや、このお兄ちゃんも、それからさっきのイケメンのお兄ちゃんもおるで」  
「わしゃノーイケメンか」

「細かいことで邪魔しいな。」

それより連絡先とかなんか持つてへんのかいな」

「ああそうだそうだ、えーと……名刺作つてある」

おばあちゃんにお渡しする。もちろんパソコンとプリンタで作ったものだが、こういう場合に自分の役職が「雑用係」というのはオタクくさい軽い自虐ネタで、若干恥ずかしい。作りなおそう。

「……えーと、あと学校がここで、あいや、次の練習試合がちょうど日曜日、丸珠公園第三球技場でありますので、よかつたら遊びに来てください」

「まあまあ……」

と、追加情報をペンで裏面に書き込む。国際化を目論んで裏に書いてた英文版が邪魔である。

「……行けますかどうか。まいは『おかあさんといっしょじゃなきや嫌だ』とどこへも行かないのです」

「おばあちゃんとあまり仲良くすると、おかあさんに悪いような気がしているんでしょう。わりとあることですよ。どうぞ、いつでも」

「まいちゃん、来てくれるやんな？」

「……」

下を向いたまま、もじもじしている。

難波さんはその頭を優しく二回ほど撫でて、立った。

「行こか」

「うい。

……じゃあ僕らは失礼します。まいちゃん、またね。楽しかった」  
「バイバイ。おおきに」

……ルームを出てエレベータを待つ。一階で待ち合わせてケーキ屋さんにでも行こうかと。来た。シースルーから、さつきよりだいぶ大きな街並みが見える。

「……さみしいな」

「あの年頃はおかあさんが宇宙みたいなものやからな」

「……ウチも寂しかったん」

「そうなんか」

「知ってる思うけど、ウチのおとんサッカー選手やろ。おかんがまたおとんラヴな人でなあ。ちよつと長い遠征言うたら、世話焼きに飛んで行くねん」

「ええこつたね」

「せやけどそうなつたら、兄ちゃんら二人共クラブの合宿所とか行つてまうし、ウチ一人や。ウチは父方母方ともじいちゃんばあちゃんところちよつと遠くて頻繁には行かれへんかって」

「そら寂しいな」

「寂しいでえ、一人の家に帰んのは。せやから、ずーつとサッカーやってた。日が暮れるまで」  
「それで上手くなつたんやな」

「最後の方はみんな帰ってまうから、一人でできることやつてたなあ。FKの練習とかな。自分で実況しながらPKの練習とか」

「難波鳴海らしいよ」

「……サッカーに、助けてもろたよ。まいちゃんを、どれだけ助けられるかわかんけど、サッカーでなくてもええから、なんか助けてくれるのがあつたら、ええな。お絵描きとか、ピアノとか、なんでも」

「アニメでもゲームでもマンガでもええな」

「いやあの子はアウトドア派やで」

「そんなん見ただけでわかる？」

「せやないと一人で電車乗ってこんなとこ来えへんやろ」

「まそりやそうだ」

「……おおきに、な」

「なにい」

「ずつと付き合ってくれて」

「乗りがかった船やからな」

「……まいちゃん、つよう生きるんやで……」

目が潤んでいるので、ハンカチを……ハンカ……うわあこういう時に限って無いんだよなあ……大慌てでリュックをひっくり返して、底から圧縮の効いたティッシュを発掘した。

「……ぺっちゃんこやんか」

「出てくるだけ男前やと思え」

「テレクラの宣伝やし。どこ歩いてんの」

「この無断転載のイラストが可愛いなあと思て」

「アホちゃうか。ほらー、繊維カチカチ過ぎて目えこすつたら痛いてこれ」

「マジか。あホンマやなすまん、ドラッグストアかコンビニで新しいの買お」

「そこまでせんでええて」

「代わりに俺の袖使う？」

「なんか伝染りそうやな」

「なんやとー」

……ティーン。

目の前に、六人。

「……あら。恋物語が進行してるわ」

「はやっ。もう痴話喧嘩」

「このひと女泣かせだと思ってたんよ案の定」

「ちよちよちよ待って待って」

「ホンマ酷いで、泣かされっぱなしや」

「なんぼさーん」

「見てこれ、ウチ泣いたらこんな鼻紙投げてよこして」

「投げてなーい」

「デートDVだ、デートDV。釣った魚には餌やらないタイプだ」

「うおおい」

「あんた、酒も呑みなはれ。博打も打ちなはれ。うちはあんたが日本一の、日本一の……なに？」

なんだろう？

「逆やろ。」

「あんたが日本一のサッカー選手になるためやったら、あてはどんな苦勞にも耐えてみせます」

「「おー」」

「ちよ待つて待つて待つて待つて待つてその『衆人環視の中告った男子の勇氣に感心する群衆』みたいな歓声は止めて。いまのは冗句。イツツ・ア・ジョーダン」

「手打つときなよ、ナナ。博打はやらなそうだよ。酒と女は怪しいけど」

「ぜんぶやりませんで」

「残念ながらタイプやないねえ」

「ニヤツと笑つて、残りのティッシュを突き返す。」

「じゃ理想のタイプ、聞いてええ？」

「サッカーが上手くて、自分が大好きで、自由に生きている人」

「マラドーナか。」

「全部ダメだ。」

「出直します」

「諦め。ウチみたいなのヤクザな女、好きになったらあかん」

「いや……」

そこら。クツクツクツク笑わない。

ギャグやから。ネタやから！

「それでも好きでたまらへん言うねんやつたら……

地球の果てまで、付き合ってもらおか!!」

「難波さん、難波さん」

「ウチは……ウチは日本一の、いや世界一のサッカー選手になるんや。

世界一やで？ わからんか三十六。

なんやその辛気臭い顔は！

サッカーやサッカーや、サッカーやんでえ!!」

「はい思う存分やつてください」

「サッカーのためならオトコも泣かす……それが……それがいつたいどうしたというのだあ！  
文句があるかあ！」

「ありません」



耐え切れなくなつて爆笑する皆の者、なんだか脳内ワールドに逝つて帰つてこない難波さん、奇人集団を見る周りからの視線が軽く痛い。  
わしどうしたらええの？

## ■ 第三幕

### ● 一場 リカちゃん電話

RRRRRRR RRRRRRR

「……お、リカちゃん電話や」

今晚も独り。

ただ、今日は夕食をみんなで食べたので、さほど寂しくはない。  
やっぱり「メシをみんな」というのは効くなあ。

おっと、相手からのでんわにでんわらなあかん。

………苦しい。

「………もすもす。あーまいどまいど」

清水リカは名門・聖愛学園の寄宿生だ。高校女子サッカー界のツートップ、そのもうひとつの  
西海女子学院が全寮制なのと違い、聖愛には遠方からの入学者用のちいさな寮があつて、リカは  
そこで暮らす。ちいさな、といつても学年あたり二〇人は入つてるので、三学年で六〇名ほどの  
所帯であり、食事時などは賑やかだそう。食堂だろうか談話室だろうか、ワイワイ音が聞こえ  
る。

ウチの前回試合後のピクニックを思い出す。二〇人前後であれだったから、あの三倍か。そり  
や姦しいな。

「……ほー、ほー、そらいきがエエな。エエなあそら。前線は何人おつてもエエからなあ」

話題は自然にサッカーになる。なんでも一年にいいのが入つてきたそう。もちろん聖愛学園  
のスカウト網に掛かるのだから優秀だろう。しかしユースに顔を出しているナナは一学年下のめ  
ぼしいところを一通り知っており、知らない子ということ掘り出し物だ。さすがやなあ。

「しかしウチには天下の……」

え、なに、可憐元気がつて？

もう元氣元氣、こないだ一緒にちーと試合やったんやけどな、ものごつついジャンピン・ヴォレーをこともなげに決めやがって、やつぱモノが違うでモノが。あんなん聖愛に入られてたらもうおしまいやった……え、なに、いやなに言うてんねん、クイーンズカップであんたら叩きのめして優勝するんのは、このウチらD……じゃない、ミラクルズや！

……え、なに、いい名前って？

おうエエ名前やろ。カッコエエやろ。そつちも新チームでフレッシュやろけど、ウチらも盛り上がってきてんでえ」

おそらく可憐の様子でも聞けとユース聖愛軍団にけしかけられのだろう。リカは、そのメチャクチャなフィジカル・モンスターっぷりと裏腹に、ふだんは控えめ、というか、どーんと構えて多少のことには動じない。あ、じゃ裏腹じゃないか、そのままか。まとにかくカチャカチャそういう細かいことを気にするタイプではない。

「……というのはまあ冗談としても、秋ぐらいには聖愛さんと練習試合組んでもらえるようなナイス・チームに仕上げたいと思つてまつせー。

……え？ 秋は選手権で忙しい？ 聖愛たいへんやな。あの、高校のチームはクイーンズは勝ち上がらへんやろ、という日程はおかしいよな。わつはつは、その点ウチらは有利やでー」

逆に高校のチームだけが参加できる大会に、クラブチームであるミラクルズは参加できない。夏のインターハイと冬の選手権がそれだ。強豪は試合数をこなして強くなっていく。ただし高校のチームの場合、特に選手権が注目度が高いので、クイーンズカップには力を入れないチームも多い。

そこが狙い目である。

ナナはいつも不思議に思うのだが、日本人は「箱の中」で競争したがる。日本女子最強チームを決めるのは、誰がなんと言おうとオープン大会で強豪プロから企業ベースチームまで出てくるクイーンズカップに決まってる。男子と違い女子ならユース世代でも体格差・体力差はそんなにないので、大人を相手にしても箸にも棒にもかからないということはない。足りないのは経験値だけだ。それなら気合いでなんとかなる……と思うのに、そして実際去年は地区予選を突破してみせたのに、まだ高校生同士の戦いの方が重要だと言う。

わけがわからない。

高校などプロへの通り道に過ぎないと思っっているナナにとって、この一点だけとってみても「ああ聖愛学園のスカウトを断ってよかった」と心底思う。

ただし、聖愛学園はその中でもクイーンズカップで力を抜かない方で、というより抜くも抜かないも実力が高すぎて普通に勝ち上がる。昨年度は、準優勝である。

ナナはこれもいつも思う。

同じ高校生や。あそこまでは、イケる。

『……はぁーい、ナナちゃん、おげんきー？』

「あ、ジュリ姉。元気も元気、元気だつせー。ジュリ姉もあいかわらずで」

『アハハ。なんか楽しそーな話してるから。うちもう可憐ちゃんの代わり見つけたからねー』

「へっへっへ、そう簡単にあれの代わりはいません。ウチがぴゅーとクロス入れたらすぐ1点ですわ。わーっはっはっはっはっはー」

『うちでもそうしてくれたら、かおりんかりカちゃんも獲ってくれたのにー。ぶーぶー！』

荻崎樹里亜（にらみきじゅりあ）はギャルっぽい態度や風体に眉をひそめる大人も居るが（つけまつげ付けてピッチに出て叱られたこともある）、センターバックとしての技量は天下一品。スピード、対人、対空、フィード、ラインコントロール、どれをとつても文句なし。むろんユースではDFリーダーとしてライン中央に陣取る。

もう一年前の、聖愛をフツたことをまだ話題にしてくれる、実はいい人である。

「あれ、ジュリ姉居るってことは合宿ですか」

『そー。ホント合宿多くてやんなつちやうよ。こればかりはナナちゃんに羨ましい』  
「いーじゃないスカ、チームワークが深まつて」

合宿か。エエなあ。

ウチも一回ぐらいやりたいなあ。

『もーこれ以上深まんないつて。香織や智子の顔見飽きた』

後ろで笑いが起きてる。国見キャプテンや藤枝師匠も居るんだろう。

「ウチ来ますか。歓迎しまつせー」

『えナニ聞いたよ、ちよおクールな美男子がコーチやつてるつて！』

「どつから知つたんですか！ まさかスカウティング!？」

『あ、これ内緒だった』

ホンマか。聖愛スゲエな。逃した魚（ウチと可憐）のチェックか、それともめぼしいチームにはあまねくスカウターを送り込んでいるのか。

『まだ写真とか観てないけど、いい男だったらこんど紹介してよー』

『もうね。ちょう、オットコマエ』

『えー！ ホントにホントにー!? 会ってみたーい!!』

「うちのチームの宝物でつきかい、簡単には売れませんなあ。ダンディーな立飛監督でガマンしてください」

『おとーさんそーゆうジョーダン全部スルーすんのよー』

「わはは。あいかわらず根っからの監督さんやねえ」

『リカ聞いた？ すごい美形だつて。……うわ興味なさそー。あんたねー、あんたもちよつと浮ついたところ見せないよ、人気出ないよ？ あんたこれから国民的ヒロインになるにあたつてね』

「ちよつ、ちよつ、説教はそつちでやつてくださいって」

苦笑い。樹里亜のDFらしさといえは見かけによらずおせっかい焼きなところで、それが説教あるいは小言という形になって現れたりもよくする。新しくユースにやってきた、特に守備系の子が最初に面食らうのがこの説教地獄だった。それもなんかヤケに長い。

しかしまあ、リカはアイドルになるだろう。やはりスポーツでは、身体能力がズバ抜けている



選手は見てるだけでワクワクするものだ。顔立ちもとても整っているし。

……いや。

「……ヒロインといえば、こっちにもひとり、エエのが入ったんですよ」

なぜそんなことを吹く気になったのか、自分でもわからない。

あまりに巨大な聖愛の組織力を前に、見栄や虚勢を張りたかったようでもあり、あるいは単純に、この目で見た驚きを、わかってもらえる相手に伝えたかっただけのようでもあり。

『えっ、可憐ちゃん以外に？』

「そうス」

『どんな？』

「それはまだ言えませんが、フへへへへ」

『いいわよ勝手に丸裸にするから』

最後はわずかにマジメが入った。あのクオリティなら、隙を突けば樹里亜率いるカテナチオ・ラインだつて突破できるかもしれない。

「あと去年CBやつてた先輩がトップにコンバートされたんで、高さも強さが補強されました。前線四枚はどこに出しても恥ずかしくない陣容ツス」

『言うわねー』

もうちょつと吹いた。ポテンシャルはそうかもしれないが、現実にはそうなるのは、まだ先だ。しかし待てよ、これでボランチにキャプテンが居て左に流乃が走って忍様が後ろを守って……ウチ、結構強いんちゃうかコレ。

「……ということで秋あたりには一度お手合わせお願いしたい、ときつきリカに言うてたんです」

『へー。や、アタシたちもやりたいと思つてたんだー。『ちようどいい練習』に』

「ええ、ええ。『胸を貸したげ』まつさー」

『へへッ、じゃリカに代わるー』

『ういうい。』

……ああ、相変わらず元気なお人やなあ。

……ん？ なんや？

……楽しそう？ そら楽しいよ、毎日充実してる。

は？ そうじゃない？ なにが。

へ？ 声が明るいの？ ウチや昔から明るいですよ。

ほ？ 昔から知ってるけど知らんぐらい明るい？ そおかなあ。

ひ？ なにか変化があったんか？ あ、そやから言うてるやん、超男前のナイス・コーチが就

任して、優秀な新人がゴロゴロ入ってきて、『希望がある』てのは人を明るく……

ふ？ そうじゃなくて？ なにが言いたいのか。

……はあ。

はあ。

はあ。

……は？ か、彼氏？」

ア、アホなことを。

「そ、そんなんできてませんよ、そんなん。

えっ？ ど、動揺してる？ して、してへんて。

そもそもそんなな、ウチみたいな生活してたら出会いが無い出会いが。わかるやろ？

えつ、私達よりある？ いやそらそやけど意外に普通の共学の高校通ってたつて無いもんは無いで？ いやホンマに。ウチのチームかてそのコーチとやな、えー」

いや。なぜ、隠したがるのか、わたしよ。

いや違う、いくらなんでも「雑用係」は悪いと思ったのだ。しかし「お手伝い」とか「サポーター」も変だろう。「広報係」？ それもしてるが、それだけではない。「マネージャー」？ それに近いがそれはまた別にいる。

なんて言うんだろう、ああいう人を。

「えー、まあ、うん、

え？ 隠した？ 隠してへん隠してへんて！ いや、もひとりおんねんけど、ちよつとなんていうたらわからんくて、

は？ イケてるかって？ いや」

どうなんだろうアレ。確かにぶちやいくではないけど……まあそのもひとりの方と比べるのもこれもまた悪い。リアル・マドリーの10番と比べれば、ガンバ大阪の10番だつて色褪せる。そのぐらい？

「いやいやいや、待つて待つて、イケてるかどうかなんか関係ないやん、ウチは」  
『エーッ！ ナナボン彼氏できたのー!?』

あつ、うるさいの帰ってきた。

「いやちやいますちやいます、リカの誤解です」

『ナナならね、共学の高校行つてたらそりゃあモテモテで毎朝靴箱にミッシリ手紙が入ってるかと思つてたのよ』

「そんなもん一通も貰つたことない。なんで一通たりとも貰えんのか。女の子からでもウエルカムや言うのに。」

いやちよつとホントに待つてくたいて、ちやうんですつて」

『そうつかー、引退かー。残念だなー』

「勝手に寿引退さすなー！ ウチやもし結婚できても引退はしませんでー！」

『あ、そこまで考えてるんだ。ひとことも言つてくれてなかつたのに』

「待つてつてー。ちやうつてー」

『聞いて聞いてかおりん、ともー！ ナナちゃん結婚すんだつて！』

「ちよつ・とおおとおお!!」

さんざいじられた。

まあ、合宿サッカー漬けは電話やメール、メッセージの交換ぐらいしか発散口が無いのは確かだ。

ピッチではキリツとカッコよく、バレンタインなんかには日本中から（もちろん女の子から）貰ったチョコをダンボール箱で数える、ユース聖愛カルテット——国見香織、葺崎樹里亜、藤枝智子、そして清水リカ——だって、普段はフツの高2高3の女の子である。

——電話を切って、ベッドに寝転がった。

頬のあたりが痛い。顔が火照る。

メシん時もそうやったんやけど、なんでウチの周りの人間はアレと付きあわせたがるんだろうか。

ウチはそんなに危ういんやろか。ああいう細々したことが得意そうな、頼めば家事でもちゃんちゃんとやってくれそうな男子をくつつけといた方が良いという親心だろうか。

うーん。

わからん。

しつかり生きてるつもりやけどなあ。

それに、あの人の方かてウチみたいなのはノー・センキューやろ。モテそうやからな、というか、モテてるからな。あん時もファンクラブぞろぞろ引き連れて歩いてからに。カッコ悪いんだかカッコエエのんかわからへん。

『いやファンクラブとかちゃうって、持ちつ持たれつやってー』  
って？

アホか。

そんなんでたまの日曜に埃っぽい野っ原の球技場まで来て興味もないサッカーの試合見るかいな。ほんであのメシ喰うてた時のあのおたがいの牽制しあう距離感のビミョーさたるや。ホンマにあの人は乙女心っていうのが、わかってない！

第一なんやあのテレクラのティッシュ。ちゃんとしたハンカチ持つとけ小学校で習うたやろ。まだ目の周りほんのり痛いわ。はー、もー、ウチみたいなの広い女やから許せるけど、あんなもん彼女相手にやったらフラれんで。

あかんあかんあかん、無し無し無し。

ウチは日本一のプレイヤーになるまでは、恋とか愛とかそういうのとは、無縁です！

サッカーのためならオトコも泣かす。

だからオトコちやうつて。

『はい思う存分やつてください』

半笑いでそう言った顔が浮かんだ。あの人いつも半笑いやねんて。それが気に喰わん。もうちよつとマジメに人生生きなあかんやろ。ギャグの時、マジメな時、メリハリをつけていかなあかん。まあああいう軽い人でないとそのー、なんだ、まだわからん、ああいう人なんていうんや、というような立場は、できんのかもしれんけど……

モヨモヨもよもよ考えているうちに、不思議にいろいろ緩んできて、寝た。



## ●二場 西九条家

——学校の校門で待っていると、漆黒の大型ミニバン、というのも変な表現だが、が現れた。お、あれはアメリカのメジャー車種ですね。あれ、のご先祖が大活躍する『突撃野郎Bチーム』というドラマが好きでさあ……

ガラガラ、と大きなスライドドアが開くと、顔を覗かせたのはやつぱり、西九条さんだ。

「こんばんわー」

「まいどです！ ホンマすんません休みの日に！」

「い〜え〜。時間はありましたし、楽しみにしていました。どうぞ、中へ」

「失礼します。そう言ってもらえると助かりますわー」

「……今日はいつもの長リムジンじゃないんツスね」

「オフとオンの区別は付けなさい、とお祖父様がおっしゃるので」

「区別」

中は豪勢な革張りキャブテンシートが二脚ズデー・ズデーと置かれており、足を伸ばして

ワイングラスでも片手にこのまま夜の街中観光としゃれこみたいところである。隣に美少女も居るし。いつものクルマより豪勢ではないか。

「……漆原、出してください」

「ホンマすんませんねえ、そもそも西九条さんにわざわざ出てきてもらわんでも」

「大切な先輩をお迎えにあがらなければ、それこそ叱られます」

「いやあ」

するすると走り出す。想像より乗り心地がいい。椅子の革がヤケに柔らかくて心地よい。この椅子持つて帰りたい。

「冷たいものでもお飲みになりますか？」

「冷蔵庫あるんだ。あいや、おしっこ行きたくなったらアレですんで、ご遠慮」

「温かいものもありますよ」

「あ、どうぞお嬢様はどうぞ」

「お嬢様はやめてください、空堀先輩」

「あ、はい、明日葉様」

「先輩」

「冗談です、冗談。明日葉ちゃん」

「はい」

緊張で冗談にもキレがない。

いつもキレがないなんて言うなよ、悲しくなるだろ？

事は、スポンサーの件である。

クラブ活動にはカネが要る。特にミラクルズは学校の正規部活ではないので、金の出所がない。去年は持ち寄り持ち出しでなんとかしのいだ。特にナナはかなり多めに出したらしい。ノリはどう見てもシブチン浪花主婦だが、もちろん父親がプロ・サッカー選手なので、比較的裕福なだろう。おうちの理解もありそうだし。

といつて、今年も無理させるわけにはいかない。人数も増えたし、やりたいことも多い。ユニも新調したいし、練習試合の後には打ち上げもやりたい。

ならばスポンサーを募る、というのが定番で、実際学校の周りをすこし駆け回ってはみたものの、感触こそまあまあだったがいかにせん額がちいさい。あたりまえの話で、個人商店主相手に知名度のない我々が、「ウチらをスポンサーしてください」と言っても、千円も出ればありが

たい方だ。昔イタリアに修業に行つてた、だからカルチヨには目がない、というイタリアンのオーナーシェフが一万円くれた時には、飛び上がって抱きついて「そんな趣味はない」と叱られた。

ということ、ラストリゾート、最終手段にとつておこうと思つていたが、早くも明日葉様の御実家、つまり西九条家に頼ることとなつた。明日葉にとつては迷惑、というかなかなかお家中でも言い出しづらい案件だろうに、快く引き合わせを承諾してくれた。

それにしても相手は天下の西九条家、平安朝から八百年続く伝統の名家であり、いくらそばに明日葉が居てくれているといつても緊張する。待つてる間、リュックの中のプレゼン書類を何度も確認して、段取りを空でシミュレートした。

長い長い漆喰の塀が尽きる頃、ふわつふわの乗り心地のミニバンは滑るように門扉に吸い込まれた。また乗降場というか玄関口というか、までクルマで走るのが距離感がおかしい。ここは本当に日本か。

黒尽くめ三つ揃え&サングラスの漆原さんにドアを開けてもらつて、降りる。SPにこんなことしてもらつたの初めてだよ。

ばかでつかい玄関をくぐり、RPGのダンジョンのように長い廊下をくきくき九〇度曲がりながら歩いて、もはや独りではたぶん帰れなくなつたあたりで、障子の前に明日葉ちゃんが座る。

慌ててどうしたもんか中腰になつて、明日葉ちゃんにそのまま、と手で示される。

「……お祖父様。明日葉帰りました。空堀先輩をお迎えました」  
「うむ」

明日葉ちゃんはスツ……と両手で障子を開ける。板についた所作がカッコイイ。育ちがいいつてのは羨ましいなあ。促されて部屋に入る。一礼する。

「はじめまして！ 空堀三十六といいます！」  
「おお。どうぞ、お座りください」

床の間を背に座るのは西九条家当主、お祖父様。

また絵に描いたような、白髪総髪に白い髭、渋くて遠目からでもイイモノ感バリツバリの和装がお似合いだ。横にお祖母様らしき方もおいでで、部屋真ん中の座布団をすすめられた。正座する。さつぱりシンプルに美しい和室はしかし、想像ほど歴史と伝統で黒光りがするほどではない。むしろ建てたてのような清らかさだ。

「……お話はお伺いしております。明日葉は居た方がよろしいですか？」

「あつ、どちらでも……いえ。とりあえず、外していただいて」

「明日葉、そうしなさい」

「はい。では後ほど」

わあ後ほどてことは後でまた送ってくれるってことかな。

悪いなあ。

「単刀直入に申しませんが」

「あつ、はい！」

さすがというか、俺が座るとすぐ本題だ。このへんのスピード感が、いまも現役で財閥の一角を占める西九条家の家風なのかもしれない。プレゼン資料は無駄になる。

「……当家は財閥などと世間では言われておりますが、企業経営は当家と各社と完全に分かれておりまして、ご想像ほどには経済的余裕はありません」

嘘をつけ嘘を。

思わず口をつきそうになって、すんで堪えた。

主要株主リストに載つてる優良企業だけでも何十社もあるはずで、ということは配当だけで年に何十億入ってくるかわからない。ひよつとすると何百億かもしれない。相手高校生だと思つて、バカにしとんのか。

「ということで金銭的な援助は難しい」

そこいらのイタメシ屋のマスターが一万出したて言おか。

……ま、しかし、しょうがない。こういうものはやるかやらないかだ。額は問題ではない。やる気が無いなら、長居はご迷惑。

「そうですか……いえ、甘えていました。わざわざお時間、お手間とらせて申し訳ありませんでした。すみません。本日はありがとうございました。失礼します」

「まあまあ、そうお急ぎなさるな」

立ち上がりかけると、笑つて制された。

「……とはいふものの、当家も古い家柄。つながり、コネクションは多少ありまするゆえ、現物支給やサービスでなら、お力をお貸しできるでしょう」

「現物……」

あ、ありがとうございます！ それは助かります！」

たとえばユニフォームを、関連企業の宣伝費か何かで落としてもらえれば、それだけでもう現金にして三〇万四〇万、いやセカンドまで作ればその倍のスポンサーになる。それは、現金より嬉しいかもしれない。

まったく人が悪い。最初にそう言えいいではないか。

落として・上げる。

人心操縦の基本か。

「ええと、それでしたら早速、あの、たとえばユニフォームなのですが」

「その前に」

「あ、はい」



声色が変わった。

硬く鋭く、刺すようにというよりは、金槌のように、神経を叩いてくる。

「……つかぬことをお伺いしますが、この援助をして当家には、どのような利益がありますかな？」

来た。

想定していた質問だ。

だが、頭の中にある用意してた答えは、どれもこの状況に耐えられそうにない。

普通の企業なら、「広告になります」とか「地域への還元です」とか「若者を大切にするメツセージは有望な人材を惹きつけます」とか言える。

しかし見よ。西九条家にはすでになんでもある。

利益……メリット……意味……やりがい……

喉が乾く。

考えろ三十六。いや感じろ三十六。いや……いや。

……いや？

「……あのう、西九条家には、なにもありません」  
「ほう」

こういう、ときは、基本に、返って、ですね。

「西九条家にはありませんが、お祖父様にはあります」  
「それは？」

人間は、自分のことしか、考えられないんです。

「可愛い孫娘が、もつと可愛くなります」

にこつ、と笑われた。

ああなにかようやくこの瞬間、「西九条家当主」が「明日葉のおじいちゃん」になった。気がする。

「……では、西九条家としてではなく、わたしが個人的にスポンサードしましょう。ポケットマ

ネーで。はっはっは」

空気が一気に緩む。

肩の力が、抜ける。

「なんだかその方が悪いような気がするのですが……」

「なに、どの社の広報宣伝を通しましたが、小うるさい審査や調査などがありましたな。わたしの小遣いからなら、誰気兼ねなくすぐ使えますから」

「それはそうかもしれませんが……あいや、そこらの年金生活じいちゃんばあちゃんと一緒にすると失礼ですね、すいません」

「いやいや。では早速、そのお手元の」

「あ、これユニフォームの資料なんです。あそうだ明日葉ちゃん、明日葉様もぜひ一緒に」

「そうですね。呼んできなさい」

「はい」

明日葉ちゃんが来て、ユニの説明をした。ショップ経由で注文しようと思っていたら、そのユニフォームの会社ならコネがあるという。

スゲー。いやむしろ大企業同士ならその方が自然か。

と思う間もなく、執事みたいな人を呼んで、指示を出す。

スゲー。やつぱり金持ちスピードあるな！

金持つてると心に余裕があるから決断早いし頻繁にチャレンジつまり投資できるんだよね。ほんでまたそこからリターンがバンバン返ってくる。持てば持つほど豊かになる勝者総取り方式。

資本主義間違うとる！

と、どつぷり浸かりながら思うのであります。

明日葉ちゃんは目をキラキラさせて「楽しみです」を繰り返す。それを見ておじいちゃんおばあちゃんも相好を崩す。ふふんもちろんユニのサンプル画像は、

「ASUHA 17」

だ。資料を覗いて、明日葉ちゃんが言った。

「難波先輩は、鳴海ではなくて、ナナなんですな」

「NANA 7」。

「うん。ユースでもこれで通してるらしいし」

「ニックネームだと、可愛らしくていいですねー」

「そうだね。西九条さんもなにかあったら、それにするよ」

「うーん……あんまりそういうの、ありませんー」

他に言うと、胡桃先輩は愛称が「くー」なので「COO 14」、そして吹田ちゃんが

「CHEETAH 20」。千里つて名前から「チー太」と呼ばれたりするのだが、さすがに「チー太」そのままは女の子にどうなの、と思ったので。

と、おばあさまが思い出したように。

「……明日葉ちゃんは昔子供の頃、『はっぴちゃん』って呼ばれたりしてましたね」

「ふふっ。そうですね。いまでも京都に行くときそう呼ばれたりしますね」

「『はっぴちゃん』かぁ」

でも「HAPPA」はちよつとなあ……はっぴ、はっぴ……

「TAIMA」

無理。じゃ、

「DYNAMITE」

いやダイナマイトやけどなあ。

ちよつと考えよう。

——珈琲党の俺もひっくり返る美味しい紅茶が出て、なんか食べたこともないぐらい旨くて可愛

いと菓子が出て、メシは喰うか酒は飲むかと勧められ、食べてきましたすいませんと断るのが非常に悔しかった。無理して喰って途中でギブるの絶対よくないそういうのも見られてる、と思つて涙を呑んだ。

たぶんのたうち回るぐらい美味しい寿司とか、水みたいでいくらでもガブ飲みできる日本酒とか出たはずなんだ。悔しいなあ。

小話で盛り上がつてゐるうちにご当主文学がお好きと知り、それなら多少心得あるのでパーパーパー適当なこと吹いたらまた乗つてきてこられて。

「漱石は近代の息苦しさを初めて描いた人なんです、だから近代国家の重さに気づき始めた明治人から、その重さに耐え切れなくなりつつある現代人特にサラリーマンまで、たくさんの人の心を打つんです！」

とか言うのと膝打つてらした。もちろん最近読んだ『ジャパン・イズ・バック』つて本からの受け売りだ。

なんでもご当主、昔は文学青年で、小説家になりたかつたんだとか。実際、大学生時分には地方紙だが新聞に連載小説を書いたこともあるそうで、特に日本の近代文学には詳しい。というか、ご自身がそのただ中におられたわけで。ノーベル賞作家を「健三郎」呼ばわりですよ。

もう冷や汗しか出ない。

——なにやら予想外に楽しい時間があったという間に過ぎて、また明日葉ちゃんが送ってくれるというから固辞するもまた「叱られます」と大型ミニバンに乗り込む。その前におばあさまが、手土産に菓子折りのようなものと、

「これはお車代で」

と矛盾したことをおっしゃる。送り迎えさせてそれはない、とこれも固辞すると、いや学校まで来られたでしょう、とこう。集合場所が最寄り駅ではなくまたウチの家に来てくれるわけでもなく学校というのはそういう意味か、と歴史と伝統に積み重ねられた外交プロトコールの難しさを思い知りつつ、はあまああそうですか本当にすいません、と頭下げて貰った。

ぺらっ、としているので千円……てこたないか、五千円かな。もし太っ腹に一万円入ってたなら、みんなに奢ろう。

車中、ニコニコ嬉しそうな明日葉ちゃんに一年生の話をいろいろ聞いた。初めて行ったカラオケが夢のように愉しかった、という。

「じゃあカラオケこんどはみんなで行きましょう、美原先輩なんか一位取れるらしいですよ全国で」

「一位！ すごいですー！」

「明日葉ちゃんは？ やつてみなかった？」

「はいー。そういう機能があるって、知らなかったんですー」

「そおかあ。残念だね。今度やってみよう」

「はいー！ ぜひー！ 一位、狙ってみたいですよー！」

「はは。一年では誰がお上手？」

「そうですねー、みなさん個性的で、ステキでしたー」

「……古都さんを、除いて」

明日葉ちゃんの顔が、不意に真顔になった。

「あらっ。こつとん音痴なの？ なんか器用に歌いそうだけど」

「いえ。音痴、ではなく。」

「……芸術、なのです……」

「はあ。」

お嬢様は、車窓から流れる街の光を眺めていた。

西九条さんのこんな表情初めて見た。こうしてると本当に美人だな。

「……空堀先輩。」

世界って、広いですね」



「う、うん」

「負けないように、がんばります！」

「う、うん。がんばろう」

「はい！」

——学校前で降ろしてもらおう。笑顔の明日葉ちゃんに手を振る。ずっと運転してくれた漆原さんに会釈する。敬礼が返ってきた。

さて、と歩き出そうとして、ちよつと胸騒ぎがした。

手にした菓子折りの紙袋に突っ込んだ、お車代を取り出す。和紙の手触りのいい封筒だ。ぴつちり封を爪先でピリピリ破って、取り出す。

あこれ現金じゃない、タクシー券か？

……じゃない。

やばい、小切手だ。

いち、じゆう、ひやく、せん、あーやばい。

やばい。

なにがヤバイってね、カンマが三つあるの。

ほらね、一やばい、二やばい、三やばい。

三つあるでしょ？

人が悪いにも、ほどがある。

ここまで人をおちよくらんと、家て八百年続かんのか。

さあ大変だ。

「どう使うか」が見られてる。

祖父さんひよつとして俺を婿にでも取るつもりか。金の使い方のテストとかさされてるんやなからうな。むしろそう考えたと数字書いててよかった。白紙だったらホントどうしようもない。その辺は若者への優しさか。いや待てよ、これまず受け取る／突っ返すってところからテスト・スタートなんか。いやあ……こういうのなあ。

こういうの、なあ。

三十六は個人的には、こういうのは好きじゃなかった。

だがチームのことなら話は別だ。ありがたくて涙出る。

祖父さんは逆だ。仕事の話なら金は出せん。

だが孫娘のことなら話は別だ。なんぼでも出す。

世の中なかなか、ままならぬ。  
いや、ピツタリいい巡り合わせ、とも言えるか。

それはいいとして。

これどう使おう……やっぱ大ちゃんに相談だよなあ……  
と、そのままに。

「……ありがとう、ございまー……ツス!!」

夜空に感謝を叫んでおいた。

夜更け、人通り少なくて、力一杯。

### ●三場 いつもの

「……今日は楽しかったねー、大地君」

「うん。」

久しぶりに、楽しかった」

「ふふ」

『ハル・カナル』から空堀君オススメの『山嵐』というラーメン屋さんでみんなで晩ごはんを食べて、帰り。ひと駅、二人で歩く。

一時はあんなに「生きる屍」という言葉そのものだった大地君が、こんなに普通の、いや普通より優しい表情に戻ってくれて、いや戻ってくれるところか、中学からずっと横で見えていた見たこともなかったほど温和な顔で、本当に、うれしい。

「……空堀君は、本当にこういうのが上手だねえ。企画というか、司会進行というか」

「うん。男友達でどこか行く時でも、たいてい幹事は彼。そしてだいたい、おもしろおかしくう

まく行く」

「だろうねえ。」

私としては、あんなに美味しいラーメン屋さん、あんな学校の近くにあったとは知らなかったよ。よくチェックしてるつもりなんだけど……」

「はは。そんなこともあるさ。『猿も木から落ちる』」

「サルかあ。さるさるー」

「『医者の不養生』じゃないしね。美味しかったね」

「なんか店舗もメニューもコンセプトがバラバラなのよね。そしてああいうお店はだーいたくない不味いもんで、迂闊だった。やつぱり、食べてみないと、わからない」

「はは」

美緒は食事・食べ物・料理のことになると、本当にうるさい。まあ僕がサッカーのこと語りだすといつまでも語っているのと同じだけだ。

「湯麺がおいしい、つてことは野菜がいいのよ。あれ結構いい野菜入ってる」

「まいちゃんも可愛かったね」

ほおつておくといつまでも「見逃した自分」を反省してそうなので、話を変えた。

「あ、うん。お母さんとの思い出をたよりに一人で電車に乗ってくるなんて、前途有望だよ」

「僕五歳の時そんなことできたかなあ」

「私は……包丁を握るので精一杯だったかな」

「それはそれですごいよ」

「料理しないと死ぬと思つたみたい。死ぬと思うと爆発力があるものよ、人間。特に子どもはね」

「まいちゃんにとつてはそのぐらい真剣なことだったんだろうな。子どもの頃の真剣な気持ちとか、どんどん忘れていくね」

「うん。まあでもとりあえず、無事に帰らせられて良かったよ。試合も見に来てくれるといいね」

「うん、ぜひ」

「さーてまいちゃんが、二人の恋のキューピッドに、なつてくれるでしょうか」

「……二人の恋の？」

「……大地君それボケだよ。ボケと言つて」

「なんの？」

ダメだ。

よーろーろーく思い知ってるはずなんだけど、相変わらずダメだ。

「ナナちゃんと、三十六くんの」

「……あ。ああ。あれ、マジメにそういうことだったの？」

「みんなでさんざんいじくり回していたじゃない！」

「いや、それはだからギャグにして遊んでるもんだと……」

「火のないところに煙は立たぬ、ちよつとでもそういう傾向がなきや、ネタにもなんないよ。見たでしょ席座る時。こつちの四人テーブルに、窓際ナナちゃん座って、三十六くんその横座って。躊躇いもなく」

「それは僕が居たからじゃないの？」

「ちーがーうー」

それでメニユー見て、三十六くんが『これ？』ナナが『ん』。あれ絶対一回二人で来てる。こないだ二人でどつか行つたの、たぶんあそこ」

「えー、そうなの？ よく見てるねー」

「しかも、前に来てることを、私たちに言わないのよ。普段ナナそうじゃないでしょ？」

『はっはー、そこウチも行ったことあるでー！ めっちや美味いでー！』

「それはそうだな……」

「でまたお料理がサーブされると三十六くんがササツ、ササツとナナちゃんの前に井やお皿並べてあげてね」

「あれは、あいついつもああだから」

「そか。」

まあ、二人とも、まだ本格的に意識するという段階ではないようだけどね」

「なあんだあ。じゃあ、僕が気づかなくても問題ないじゃないか」

「んなことない。」

大地君チームリーダーでしよ。細かいところまで気がつかなきや」

「サッカー以外のことまで無理だよお」

ちよつと甘え拗ねみたいなの口調されると、弱い。

異様に可愛い。

くやしい。

「……そおかあ。うまくいくといいねえー」



「ふふつ。そうだね。」

本人たちどう思ってるかわからないけど、めちやくちやにお似合い、だよね」

「うんー。服屋さんで言つてたけどもうあのまま二人で舞台に出てそうだもん」

「しつくりくる、つていうのは、だいじだね」

「だいたいそういう時は、うまくいくね。なんに限らず。」

……女の子も、恋の力でパワーアップ、とかするのかな？」

あら、珍しいことを。

てか目の前にそのこれ以上ないサンプルが居るのに、わかりませんかその答えが。

「そりやもちろん、するよ」

「じゃあいいね、ナナのコンディションがいいと、ウチの攻撃は捗るよ」

「またそんな言い方するー。サッカーと恋路、どっちがだいじなの」

「僕にとつてはサッカーだよ」

「いやそりやそうだけど。」

大地君、あんまり思つたことズバズバ言わない方がいいわよ」

サッカーのことになると、スイッチが入っちゃうのよね、この人。

「……でもそうだね、ウチは、ナナに頼りきりのチームだから」

「うん。負担を軽減したくて、今度はああいうシステムを組んでみたんだけど」

「うーん」

「あそうだ美緒に聞こうと思ってたんだ」

「なに？」

「ナナってよく脚をケチるじゃない。あれ、なにか原因があるの？」

「ああ」

サボると言うと言い過ぎだが、攻撃で一仕事終わるとかなりさつきと歩いて戻る。繰り返すがナナは攻撃の司令塔であり、チームで一番巧い選手であり、可能性が低くともボールがオフプレーになるまでは走り回って欲しい。

「……トラウマ、っていうと言い過ぎかな、全国出た時にね」

「うん」

「点いっぱい取られて、こっち当然ゼロで、なんとか一矢報いたくて、ナナワントップ前残り、

ロングボール放り込んで逆襲で1点でも獲ろう、って残って貫ったのよ。後半のもう後半、三〇分は超えてたかな……」

「去年の陣容なら、リーズナブルな決断だね。流乃やマキではフィニッシュが不安だし」  
「そうそう。」

で、やつぱりチャンスが来たのよ。蘭ちゃんが炎のスライディングでボール獲って、私にすぐくれて、必殺のカウンター炸裂！」

「おお」

「ナナが得意のドリブルで運ぶ、運ぶ、運ぶ。GKと一対一、ナナなら外さない、やった、1点だ……」  
「うむ」

「駆けちやつて。GKをかわすフェイントを入れたところで」

「あらら」

「吉本新喜劇だったよ。それ見て全員でコケた」

「そうなるねえ……」

「ナナには珍しいミスというか、要するにもう脚が残ってなかったのよ。最初からガツチガチにマークされて。去年のウチ、彼女だけ殺してしまえば何もできないチームだったから。それ外そうともがいてもがいてもがいて」

「そうか」

「頭ではそれはわかるんだけど、ガツクリはするのよ。そこまでは、縦一本ナナに通れば、1点ありうるぞ、というのを心の支えに戦ってたから」

「目の前で『それも無理です』と本人に身体張って証明されちゃね」

「そこでみんな折れた。私も手叩いて怒鳴ってたけど、実のところ折れてた」

「うん……」

なるほど、それで自分だけは、最後まで脚を残そうと」

「だと思っ」

「むしろ今年こそ、どんどん売り切れてくれていいんだけどな。替えも居るし」

「ナナちゃんそれは嫌がるなあ」

「まあそうだけど。」

あるいは私達を信頼しろ、とキャプテンが後ろからケツを叩く」

「うーん。」

私より、コーチじゃないかな」

「うーん。」

心の壁は」

ふと、真面目な目になった。

自分のことを思い出しているのだろう。

「……自分で壊すしかないからね」

「……ノックする人は、居ていいと思う」

確かに。

それはしかしたぶん、キャプテンでもなければコーチでもない。

「……三十六か」

「でもまさか空堀君にずっとピッチサイドに居てもらおうわけにもいかないしね」

「そうだねえ。漫才が始まりそうだしなあ」

「『走れ』」

『やかましいわー』」

「うわ、やりそう……ははははは」

「ふふふふ……」

空堀君みたいな人のことを、なんて呼べばいいんだろう。本人言ってるみたいに『雑用係』じ

やかわいいそうじゃない？ えーつと、『お世話係』じゃ変だし、『スタッフ』じゃ曖昧すぎるし」

「『プロデューサー』じゃないの？」

「あ」

それだ。

なぜそんな便利な言葉を忘れていたのだろう。

「じゃこれから空堀P、略してカラPで」

「三十六それはさすがに嫌がるんじゃないかなあ……」

「カラPだよ？ ビールのおとも、つて感じで、美味しそうじゃない？」

美緒はだいたい物事を美味しそうかそうでないかで二分しすぎる。

まあ、実のところそれが、彼女にとつては正確な分け方なのかも、しれないが。

「さとP？ 36P？ わー、ねね、36Pチーズって食べごたえありそうじゃない？」

「あはは、なにそれ。細くない？ 扇型が」

「ちがうの。一段6Pだから六段あるの。バウムクーヘンみたいに」

「そんな塊そんな切り方じゃなくていいじゃない」

「なにを言ってるの大地君、いまはチャーシューだつて切れてる時代なんだよ？ あ、やっぱりチャーシュー麺も食べておいた方がよかつたかな」

「また行けばいいじゃない」

「食べたいと思つた瞬間が、食べごろなんだよ！」

「いまから引つ返す？」

「……」

「考えなくていいだろ、おなかいいつぱいだよ！ どんだけ食べたのさつき！ 八人居たからつてラーメン屋さんで三万円はおかしいだろ!？」

「じょーだん、です」

目が笑つてない。

食い物のことに関しては何談に思えない。美緒だからな。

「……やっぱり一人二杯から、つて最初の設定が甘かつたんだよ、あれ三杯にしておけばこんなことには」

「最初からおかしいよ」

「大地君は身体動かしてないから」

「今日はサツカーしてない」

「したよ。」

「心の中で」

「それカロリー使うの？」

「身体よりも」

「ほんとうかなあ……」

うんうんうん。

なんですかそのドヤ顔。

「あそうだ大地君、こんどカラPが言つてたケーキ屋さん行ってみようね、並んで入れないぐらいおいしいって」

「いまは食べ物の話はもうやめてー」

「『エスポワール』にも負けないお店、つてなかなか無いよ？　また私の知らないお店を知っている……空堀三十六、悔りがたし」



「恋のキューピッドか……」

僕にも来るのかな」

「来ない来ない、来ない。来ないね」

「えー、どうして？」

「どうして・も！」

「えー？ 美緒、ひよつとして意地悪言ってる？」

「イジワルは大地君ですっ！」

「はあ。」

ここは、犬も喰わない。

## ■ 第四幕

### ● 一場 準備

〈……あー遅いなもーホンマなにやってんねんやろー……〉

と、口に出しては言わない。どんなに焦っていてもイラついていても、それを表に出してチームの動揺を誘ってはいけない。プロデューサーはアイドルを心置きなくクリエイティブに専念できるようにするもの。

三十六は、あらかじめ仕込んだ「三つのモノ」を待っていた。

——丸珠公園第三球技場。

ミラクルズがミラクルズになった、思い出の、といつてもそれはついこないだのことなんだけど、のグラウンドである。ほぼ土で申し訳程度の芝生は、くたびれたサラリーマンの頭髪のよう

に儂い。

ミラクルズ、としては初の練習試合である。

本日の相手は地元そこそこ強豪校をご用意した。なによりこの「そこそこ」というところが難しい。あまり強豪になると年度初めの新チームとはいえ昨年の主力が残っていて強くて話にならないし、といつて一応こちら前年は全国に出たチームがベースになっており、そのへんの楽しくやつてる部活でもまた、話にならない。

しかし青春はよくしたもので、そこそこの高校チームにとつてはミラクルズはたいへん都合のいい相手らしく、三十六がおそろおそろコンタクトを取ると即諾してもらった。選手権やインターハイで当たたら「ない」というのも手の内を晒さなくてポイントが高いらしい。

集合は試合開始三〇分前、相手チームはすっかり準備万端、こういうグラウンドであるからユニフォームの上からジャージを着てきたもので、脱げばすぐアップ開始。

おお、黒基調でなかなかワイルドではないか。

フフフ……敵役にピツタリだぜ。

さあ俺たちミラクルズの、正義の味方つぽいユニフォームを見よ！

……と言いたいところなだけ、ど。

まだ私服制服入り乱れ。

待つてるモノ一つ目は、ユニフォーム。

この日に新ユニフォームを無理矢理間に合わせようとして、当日朝できあがりの現地直接受け取り、などという無茶なスケジュールを組んでしまった。

試合開始予定一〇分前になると、住吉古都、マネージャーは気が気でない。相手の女性の顧問先生がちらちらこちらをみてるのも気になる。

「……あのう、空堀せんぱーい」

「はいなんでしよう辣腕マネージャーこつとん先生」

「万が一を考えて、旧ユニ着てもらいます？」

「いや、あー」

一応事故でも起きたことを考えて、各自に旧、というか現行ユニは持つて来てもらってはいる、  
が……

「着替え大変だろうし、ギリまで待とう」

「もうギリですよ。着替えはまあ、女子はタオル一枚でなんとかする技術がありますので」  
「いや、んー……」

正論である。

俺が逆の立場なら、そう言ってる。

しかし、新ユニはカッコよく華々しくお披露目したいではないか。

「巖流島じゃあるまいし、待たせていいことないですし」

「うん、そうなんやけど」

大地の方を見ると、指揮官は思案げにグラウンドの方向を向いている。いつもそうだが、特にピッチサイドでは何を考えているのか読めない。

その視線の先では、相手チームが柔軟やジョグに勤しんでいる。われわれといえば、たとえば可憐と千里はボール使ってじゃれており、タンクトップ姿の蘭は一人でラジオ体操をしてる。はなこに至っては文庫本を読んでいる。

定刻が迫るのに焦っているのがマネージャーだけ、というのが、信頼の証というか、ノンビリしているというか。

「ではわたくしがマネージャー権限で準備を」

「そんな権限あるの!？」

「あるかどうかコーチに聞いてみます」

「……あーごめんごめんごめん!! 遅れてすまん! ごめん!」

二つ目に待ってたモノが、先に来た。

スタジアム・アナウンサー。

飛び込むように走ってきたのは、放送部の高安和輝。三十六の友人で、今日のスタアナをお願いした。もちろん二つ返事である。もともとが「マイクの前でしゃべれば金を払ってもいい」という口から先に生まれた星人。

「アーム・ソーラー!」

「髭そーりー。だいじょぶよまだ始まってないから。今日はよろしく!」

「まかせて! じゃあ早速!」

肩掛け鞆からやおら取り出す小型ビデオカメラ。

「さ! 試合前ピッチリポートです、ピッチサイドの高安さーん!

はい高安です！」

さつそくレポートが始まった。バツ、とそのカメラを古都に向けると、  
「マネージャーの住吉さんです！」

マネージャー！ 今日の抱負は！」

「えっ、私ですか!? あ、はい、力一杯サポートします！」

「具体的にはどのようなことを！」

「あ、えーと水分を用意したり、がんばれーと声援を送ったり！」

「勝てますか！」

「勝ちます！」

勝つてくれると、信じています！」

「期待しています！ テレビ・ラジオの前の全国のみなさんに一言！」

「はい！」

強く！ 優しく！ 美しく！

カワイイ・イズ・ジャステイス！

めくるめくガールズ・アンド・フットボール、

ミラクルズに、貴方の清き一票を！」

「ありがとうございます！」

「こちらこそ！」

仕込んでないよ。ぼく仕込んでない。

この子もなかなかやりおるなあ……

無言でマイク突きつけるので指で×。俺は黒子。大地を指す。飛んでいった。

「……あのー」

わ。相手の顧問先生だ。怪訝な顔で、暇そうな俺を捕まえる。

「そろそろ」

「あ、はい、あのですね、ちよつ、と準備に手間取りまして、あの、えー」

「わーっ、なんだありやー！」

吹田ちゃんの素つ頓狂な声が響いた。その方向を見れば、おお、待ちわびていた一つ目、そう新ユニフォームが。



……うわあ。

僕ね、マイクロバスもお願いしたんですよ。着替え場所兼用になるかなと思って。そしたら来たのがスーパーハイデッカーの二階建て大型観光バス、ピカッピカの芸能人が深夜番組で東京観光に使うようなヤツ。またこれがロゴなど一切なしのグロスブラックでテカテカと仏壇のように輝いてるのが不気味というかド派手というか。

その巨体を球技場横にむりくり収めると、若い運転手さんが飛んで来ると、俺が飛んで行くのが、途中でごつつんこ。

「……空堀三十六様ですか！」

「はいそうです、おつかれさまです！」

「遅くなつて申し訳ありません！ これ入れる入り口が公園に一つしか無くてですね」

「問題ありません、早速使わせてもらいます、こつとーん!!」

「はあい!!」

「ユニ中にある、着替え手伝つてー!!」

「はあい!!」

みなさーーん！ ユニ来ましたあーー!! 中で、ダッシュで着替えお願いしまーす!!」

わーっ、と歓声を上げながら吸い込まれていくみんな。  
肩の荷が下りた。ああ心臓に悪い。

顧問先生にあと一〇分待ってくれ、と告げるとポカーンとしてた。大地は一瞥して表情を変えずにピッチに目をやる、が、敵陣もポカーンとして動きが止まっている。運転手さんが汗を拭きながらまだ平身低頭。

「……いや本当にすみませんでした、申し訳ございません」

「……西九条家の方ですか？」

「はい、叱られます……」

「言いませんよ。その代わりみんなにも内緒ですよ」

「はい、それは伺っております」

「どうぞ休んでください。ご苦勞様でした」

「いえとんでもない。ビデオ撮ります」

手にしたゴツイポストンからつかい業務用っぽい黒いビデオカメラが。

「え？」

「お嬢様の勇姿を撮影してこいと」

「あー……三脚に置いて回しっぱ、つてできますか」

「叱られます」

「いや、それでおねがいがしたい。事情はこちらから伝えます」

「そうですか……」

私個人的にも楽しみにしてきたのですが。お嬢様の勇姿」

「僕のスマホ貸しましょうか」

「いえそれでしたら私もありますので」

「あんまりお嬢様ばかり狙うと、お嬢様に叱られますよ」

「ご褒美です」

さすが名家だ。使用人にも余裕と諧謔がある。

なんて言っているのかなあ……

——乗降ドアが開いて、真つ先に飛び出してきたのはやはり、可憐ちゃんだ。グラウンドへ駆けながら、

「空堀先輩！　ありがとうございます！」

「着心地どう!?」

「最高です!」

「がんばって!」

返事は強く握りしめるグー。

「KALEN 9」

カモシカのような脚、跳ねるポニーテールがまったくもってカッコイイ。

新ユニは、ピンク。

シャツが鮮やかなピンクに、袖と襟に濃い目のピンクでアクセントが入っている。背番号と胸番号は白、グレーの縁取り。右胸に流れ星をかたどったエンブレム。特に今まで決まっていないうので、勝手に作った。きつちり目の折り立て襟が可愛い。

パンツは白。アクセントラインがシャツと同じ色で入る。右下の番号は逆にピンク。ソックスも基本白。太めのピンクのラインが入る。

シンプルすぎるかな、と思ったが色が派手なのもあって、想像よりはるかに華やかだ。

「……カラちゃんこれピンクすぎない? だいじょうぶ?」

「るーちゃん意外に似合ってるよ! 大丈夫!」

「意外つて。」

と言いつつ半袖を肩までまくる。流乃のは彼女のこの癖のために、ちよつと袖ぐりに余裕がある。金にあかせて、全員サイズを計つての特注品だ。

「これ、あたしんでいーんだよね？」

「RENAULT 5」

「他誰が居ますか。バイク乗つたはると聞いてちよいと洒落利かせてみました。気に入らなきや換えるよ」

「いーよ。こだわらないし」

「ルノー5・ターボ全開サンクつて感で」

「古いなー。むしろ無敵ウイリアムズ・ルノーのレッドファイブ？」

「ナイジェル・マンセルつか。」

「それも古い！　しかし速い！」

「ちよつと走つてくる」

「がんばつてー！」

脚自慢の彼女用に、パンツは短め。ネコ科の猛獣のようなしなやかな白い脚が、目に見えないほどの速さで回り始めた。

「……空堀先輩」

「おう葉っぱちゃん。どう？」

「……どう？はこちらです」

明日葉ちゃんは微笑んでくるり、と後ろ向き。細い背に、

「LEAF 17」

「イケてる！ 気に入った？」

「ありがとうございます」

深々とお辞儀をして、につこり。

ああ、天女だ。

そりゃあ西九条家の下僕共が命でも投げ出すわ。

「肩の力抜いて、がんばってね！」

「はいー！」

ツヤツツヤの目に痛い黒髪を風に流して、明日葉様は駆け出した。

——たとえユニといえども新しいお洋服。みんなわいわいきゃーきゃーはしやぎながら次々に降りてきて、ピッチへ駆け出す。最後に、

「……あなた、これ高かったんちゃうん？ 代表で使うてんのもと同じモデルやろ？」

「まあねー。でも心配は要らんよ」

「ホンマかいな。」

「似合てる？」

「桜の花のようだよ」

「ええかいな。まーせやけどあれやな。サイズはぴったりやけど、画竜点睛を欠くというやつやな」

「ん？」

「ウチはいつもな」

「ナナさーん！ これ！ 渡し忘れてましたー！」

こつとんが走ってきて、手渡す、白いリストバンド。もちろん新品。

「ああなんや、用意してくれてたんか」

「もちろんですよトレードマークでしょう」

「汗かきやねん。目に入ると的確なパスが出せん」

ピシッと着けると、両頬を両手で二つ張った。

パンパンッ！

「おすもうさんみたい」

「『横綱』て呼んでええで」

「『大関』がええんちゃうか。伸びしろがあつて」

「そうしとつか。」

誰が小錦やねん」

「小錦関なら人気・実力・インテリジェンス、どれをとつてもゆうことなからう」

「ホンマ乙女心のわからんお人やで。」

あれか。わざとか。好きになつた子をいじめる小学生か」

「そや」

「……」

「……」

「……」

「……」

「せ、せやけどあれやなあ……」

ナナは、遠い目をしてアップにいそしむチームメートたちを見た。



みんな笑顔だ。そしてハゲハゲとはいえ緑の芝生に、狙い通り、ピンクが映える。春の草原に、咲き誇る花、一六輪。

「強そうか」と言われると正直微妙だ。

しかし、「楽しそうか」と問われれば、これ以上は望めまい。

「……夢みたいや」

ウチのやりたかったことは、作りたかったチームは、全国へ行くチームではなく、こういう、チームやつたんや。

しかしそんなファンタジックな気分を打ち砕く、乙女心のわからぬお人。

「なに第三者視点になつとるんですか。夢や無うて現実です。あなたが引つ張っていかねばならん、現実です」

「……言われいでもわかつとるわい。」

「みてみい、爆勝したるで」

「爆笑されないようにね」

「フン。」

……おおきに」

ナナ、最後小声でつぶやいて、駆け出した。

三十六、思わず頬が緩む。誰の感謝が欲しかったかといえば、チームを作った人のそれだった。スタアナの、バカでかい地声が響き始める。

『……さあウオームアップも宴たけなわ、いよいよ始まります、新生ミラクルズの大冒険、きょうが船出の一戦です！ スタートイングメンバー紹介に移りましょう、

ゴールキーパー！ 心の守護神！ 守口……

ほらカラちゃんこつとんちゃん、コールコール！』

「あつ、はい！」 「おうすまん！」

『守口……！』

「「しのぶ!!」」

『ナンバーワン！

ディフェンダー、右サイドバック！ 戦えお嬢様！ 西九条……！』

「「あすは!!」」

いつかどこかで、電光掲示板に出る顔写真と名前を観ながら、観客席の大勢の、初めて観た人たちがコール&レスポンスをしてくれる……ようなことも、あるんだろうか。

それはまだわからない。

でも、目の前の華やかな絵を見ていると、できないことでもなさそうな、気もしてきた。

## ●二場 迷い・困り・怒る

上町大地は、迷っていた。

現実 is 厳しい。

さすがに新システム新メンバー、試合開始すぐ、練度不足が露呈する。

センターバックのもも、蘭の二人は、「並べ」と言われてそれを意識すると、どちらが相手F  
Wへ突つかかるかお見合いする。サイドバック、左の流乃はいままでウイングだった癖が抜けず、  
前がかつて守備がおろそか。と思えば、右の明日葉は緊張からかべつたり持ち場を動かず、ボー  
ル奪取にもボール回しにも参加できない。

中盤では、美緒が不安定なDFラインが気になって、中央の低い位置から動けず、持ち前のど  
こにでも顔を出す激しいモビリティが発揮できない。エレーナは真面目過ぎて、とにかくボール  
ホルダーに突つかかつていつてはパスで翻弄され無駄走り。ありすはまだ、自分なりの攻撃パタ  
ーンがまったく無く、パスが入っても無理なドリブルを潰されるか、パス先を探しているうちに  
ボールロスト。

頼りにならない中盤を見かねてFWの可憐が下がって、自らボールを奪う。しかしそれをどこへ出すかというところはない。胡桃は真ん中に張っているが、パスを当てるとその瞬間奪われた。ポストプレーと一口にいつても、今日言われて明日できるような簡単な仕事ではない。そしてナナ。

右サイド高めの広大な仕事場を与えられたのはいいが、だだっぴろすぎて持て余す。ワイドに張ると、ボールを貰ってもひとりですんで突進せねばならず、そうになると「相手はユース代表だ」と把握している敵陣が三人・四人・五人と人手を繰り出して止めてくる。といて、真ん中に寄り位置すると、空いた右サイドの空間を敵に突っ走られ、守りを明日葉一人にまかせるわけにもいかない。守りに押し込まれる。

ギャップを作られ、斜めに走られ、サイドを突かれ、挙げ句の果てにはカウンターまで食らって、またたく間に4点を失った。

本日はいちばん可哀想なのはGKの忍で、てんやわんやと走り回るが、こういう時に限って日も悪い。どうにもならないノーチャンス・シュートが雨あられと降り注ぎ、さながらGK練習のよう。逆にまあよくも4点ですんでいる。忍でなければもう倍ほど取られていてもおかしくない。

なんだか巨大なチームバスは来るわ、派手なピンクの最新新品ユニをまとうわ、監督は美男子

だわ、全国行きチームだわ、ユース代表は二人も居るわ……でビビってた敵陣が、いまやのびのびとプレーしている。対するこちらは、どんどん元気が無くなっていく。

前のあれは、フロックだったのかなあ……

いつものやり方に戻して欲しい……

なにをどうやったらいいのかわかりませーん……

ベンチではなこと、マキがキレた。

「……ちよつとコーチ！ なにか策ないの!？」

「アタシ出して!」

もちろん大地は意に介さない。硬い表情を崩さなのまま、腕組み、仁王立ちで戦況を見つめている。

〈……さすがにムチャか〉

この試合、大地が意識して観察していたのは、例のカウンターかポゼッションか、の部分である。

カウンターは強固な守備が無ければ始まらない。しかしこのチームはどうも意識の底に「耐える」「我慢する」が無い。あるいはそういうものを美德であったり長所と捉えたりすることさえ、無いのかもしれない。そういうえば普段の振る舞いからそうだ。

楽しいは正義。

ガマン？ なにそれ南国の通貨？

ピッチに入ったら性格が真逆になる、なんてことはそうそうは無い。

つまりあまりカウンター向きではない。ということとは、さらにその先、「カウンターとポゼッションの融合」などという高邁な理想を抱くのは、ムチャに過ぎる。

しかし、といつてポゼッションで自分たちの意図をガンガン押し付ける、というタイプでも明らかでない。

〈……なんなんだこのチームは、いつたい〉

……とりあえずその疑問はさておく。いまの状況を打開せねば。

これだけいい選手が揃っていて、ここまでボロボロになるのはちょっと想定外だった。

いま、何がいかんのか。

サッカーは攻守が一体である。攻撃がキレてると守りも楽だし、守りがビシッとしてると攻め

もバラエティや遊び心に富む。つまり4点取られたのはデイフェンスだけの責任ではなく、

〈……攻めか〉

攻撃は自分の意図を押し付けける作業である。であるから、さすがにある程度の指針、方向性がないと、みんなで何をどうしたらいいいのか、共通理解が持てない。それこそ、

「ボールを持ったら可憐を探してパスを出せ」

でもいい。「戦術誰それ」というやり方で、プロ、ビッグクラブだって煮詰まったらやってる。

〈……最悪、それでも、いいのだ、が〉

あまりにやぶれかぶれすぎる。

それならまだ、慣れ親しんだシステムとメンツに戻して、とにかく試合を作った方がマシだ。4点は追いつくに厳しいが、とにかくにもサッカーにはなるだろう。いまベンチでクサクサしてる四人も、出せば納得するはず。

もちろん、今日は修練の一環と割りきって、このままツツパるのもアリだ。連携は実戦でしか深まらない。部員が少なく紅白戦でフルメンバー同士の戦えない我々は、特にそうだ。ただしこ



のままだと追加点も取られそうだし、得点の気配もない。おそろしくつまらない一日になる。  
ちらりと時計を見た。前半が、終わろうとしている。  
上町大地は、迷っていた。

S

難波鳴海は、困っていた。

新しい仕事場は広すぎて、まるで目配り気配りが効いて身体にフィットする2LDKから、学校の体育館に引越したような気分だ。

広い、というのは選手同士の距離感が悪いということ。

中盤ダイヤモンド型4―4―2右サイドハーフのナナの隣には、

- ・斜め前にFW胡桃
- ・横にトップ下あります
- ・斜め後方にボランチ美緒
- ・後ろにDF明日葉

の四人が居る。ところがこの四人が、それぞれ不慣れとナナへの遠慮からか、右サイドに出てこない。と、広大なスペースにぼつねん、と独り取り残されることになる。

といつて自分が中央寄りに場所を移すと、そこには交通渋滞が起きており、攻めも守りもやりにくい。その上、空いた右側を相手に使われる。

〈……うーん〉

中盤ダイヤモンド型4―4―2なら十分経験があるので、過去の事例を思い出す。やはり中盤選手四人の活きの良さ、ダイナミズムがモノを言う。さらにできれば両サイドバックもどんどん前へ走り、両FWもウイングばりにサイドに張り出してボールを受けて貰えたと、そこを起点にいろんなアイデアが湧く。

現にこの不慣れな我がチームでも、左サイドでは前へ前へと暴走する流乃と、左タッチライン際まで開いてボールを受けようとする可憐が居るので、エレーナは甲斐甲斐しく二人のサポートに走り回っている。完全に死んでる右よりはずつと活気がある。あれだ。

といつてももちろん、右でそこに対応する明日葉と胡桃を責めるわけではない。違う役割を与えられているのだから。

〈……アシンメは、難しいの tochやうかなあ……〉

アシンメトリ、左右非対称。左右でアタック・ディフェンスの形が違うシステムで、選手の個性を活かす、といえは聞こえはいいが、話は二倍複雑になる。

特に一点、どこが不満かといえは、可憐が遠いことだ。

間に胡桃が挟まっているので、グラウンダー・パスを出すにも角度が無いし、ショートパスを繋ぐチャンスも無いし、浮き球を送るにも遠い。

言うてはなんだが、このチームは少なくとも攻撃に関して言えば、ウチと可憐のチームや。なんでそのホットラインを繋がりにくくするのか。

しかし上町大地はド素人な、サッカー経験が無いが成り行きで部活顧問になった教育大学出たのハンサム先生ではない。よくよくわかつて、こうしているわけである。

だからなおのこと、解せん。

特にありすを見てみると、可憐や流乃をあまりにも活かしておらず、「いいから替われ」と怒鳴りたくなる。

そや。ウチがあそこにいるだけでも、少なくとも攻撃はこんなヘナチヨコやなかつたで。

しかしそれも言ったりやったりするのは憚られる。

大地がこのチームを掌握しようとしているのだ、ウチのできることは、彼の意にそった形で、チームを活性化することだろう。ウチがウチが、と言い出せば去年に逆戻りで、それでは、成長は見込めない。

「……ナナツ！」

「おう！」

珍しくキャプテンからボールが入った。ええいままよ、テキサスの砂漠のように荒涼たる右サイドを、アテもなくドリブルするライカ・ローリン・ストーン。

得たり、とばかりにワラワラと、ゾンビ射撃ゲームのように敵が湧いてきて、捌いて、捌いて、捌ききれずに、潰された。

……やっぱり独りでは、無理やん。

「デифエー……ス!!」

言わでももの指示を叫んで美緒が後退ダッシュするのを転がったまま観ながら、あいつあエライ

なあ、と他人事のように思った。一年生にいま何をするかを教えてあげているのだ。

キャプテンというのはああいう、常になんでも我が事のように思える人間でなければならぬ。ウチや向いてへん。

などといま考えなくてもいいことを考えながら、ゆつくりと立ち上がる。

〈……どないしたもんか。だれをどう使うか……〉

難波鳴海は、困っていた。

S

空堀三十六は、怒っていた。

なんだこれは。

前の試合で見せた生命の爆発のようなイキイキネスはすっかり影を潜め、一人はギク・シヤクとまるで集団ロボットダンスを繰り返している。いやむしろ最近のA Iとネットワークで武装したロボットの方が流麗かもしれない。

原因は簡単だ。おたがい、気を遣いすぎている。

新しいシステムだ、新しいチームだ、新しいコーチだ、ということ、頭の中がいつぱいになって、敵ではなく頭の中のイメージと闘い、ボールではなく頭の中のイメージを取り扱っている。当然、現実とのギャップが生じて、そのたびごとに身体が止まる。

攻守切り替えが一点、ボールを奪った・奪われた、その瞬間に切り替わるサッカーというスポーツにとつてはこれは致命的だ。

もつと獲物を狙う野獣のように、本能でボールを追わねばならん。そんなこた生まれてこの方インドア派、の俺でもわかる。

しかし当事者になるとむしろ見えないのか、あるいは見えてもなにかを我慢しているのか、大地は動かない。

そうそう、ベンチもダメだ。おとなしすぎる。届く届かないは別にして、喚き散らした方がいい。檄を飛ばす、叱る、攻撃や守備のサジェスチョン、叫べることはいろいろあるう、特に今日は。

ああそうか千里を除く四人はレギュラーだったんだ。まさか調子が悪い方が出番が回ってくる、と考える性格の悪いのは居まいが（確証はない）、逆に自分がプレーしているかのごとく試合に入り込んでしまつて、客観的な目で観られていないのかもしれない。

こういう時こそ俺がですね。  
無理ですね。

なんといつても実績がない。素人の方がわかる真理もあるが、それを玄人が聞いてくれるとは限らない。話を聞いてくれそうな玄人といえば……ナナ。

そうだ、あいつだ。

あいつが悪い。

なにを思っているのか考えているのか、今日のあいつはまさに「右往左往」という言葉をゼスチャー・ゲームで表現するように、ヨロヨロヨクヨクと歩いているだけだ。たまにボールを持つても自信のないドリブルで簡単に潰されている。その他のアイデアも無い。

なんであんなに。

あいつが今日の象徴で、他はまさにあいつに引きずられるようにああなっているんだ。

……思ったより「氣い遣いい」なんかな。

ホントは言いたいこともやりたいこともあるけど、これは新しいチームなんで。

んなことあるかあ！

サッカーやってんねんやろ！

戦え！ アホ！

……などというと、喉輪で絞め殺されかねない、ので。

こつとんあたりで代わりに言ってもら、いや、あいつも立ち回りが異様に巧いからな、そんなカタキ役はやってくれんやろう。やはり白い目で観られても俺が……

〈……しかし〉

と、三十六はふと冷静になつて、思う。

〈……サッカーてのは、いやサッカーに限らへんけど人間つてなあ、ふしぎなもんやねえ……〉

同じ一人なのに、あまりに鮮やかで衝撃的で、いつぺんで惚れ込んだ、あのチームとは、ま



まったく真逆のチームだ。

こんなチームなら俺だつて、一生懸命サポートしようなんて思わなかっただろう。サポーターみたいな人たちがまだできてなくてよかった、こんなチームは見せられない。

あ、マズイ、これ西九条さんご覧になるんか。

うわあ……サッカー詳しくないといいなあ……いやスポーツ好きやったらわかっちゃうかなあ……いや人生経験が抱負やったらバレちゃうかなあ……孫バカであることを祈ろう。いや祈らなくてもそうなんだけど。

では、あのチームと何が違うのか。

おそらくは、というより、同じ人間で時間がそんなに経ってないのだから合理的に導かれるその理由は、

「気持ちの持ち方」。

ただひとつである。

〈……リーダーが要るね〉

もちろん上町コーチがそうなのだが、ピッチの中にも必要だ。

美緒キャプテンはピッチの中ではむしろリアクションがとても上手な人で、自分に意図を無理に押し付けたりしない。しかしスポーツなんでも、特にオフエンスの場合は、

「これでどやあ！」

という裂帛の気合いとリスクを恐れぬ蛮勇が……

そりややつぱり、この中では、「どや」という人しか居まい。

あのかいケツを、

うわあらためて見るとホンマにでかいな。低重心はええこつちやけども。

ケツを叩くのは……

〈……遅い！ いやこんなこと言うたらアカンねんけど、遅い！〉

空堀三十六は、怒っていた。

## ●三場 ハーフタイム

ピーツ……

『……さあ前半終了ー！ 4点を奪われた我らがミラクルズですが、試合はここからです！ サッカーは一五秒あれば1点入る競技！ 一分あれば十分逆転できます！

『イスタンブールの奇跡』という歴史的大逆転勝利もあります！ さあミラクルズ、その名の通り、奇跡を起こせるか！』

どこからツッコんだものやら。

まず一五秒で確かに1点入るがその一連の決定的プレーに持っていくために時間が掛かるわけで、だからこそそのロースコア競技である。

一分は一五掛ける四の六〇秒で、4点では逆転にならない。

さらにUEFAチャンピオンズリーグ04―05決勝、リヴァプール対ACミラン、ハーフタイムまで0―3とリードされたリヴァプールが後半に追いつきPK戦まで持ち込んで逆転したのが「イスタンブールの奇跡」だが、差は3点である。

かなり元気なく引き上げる選手たち。古都が飲み物とタオル、保冷剤を配って回る。三十六も手伝った。敷物のブルーシートはダレる選手で埋まり、まるで魚市場のマグロ競り。

「……ごめんねーシート狭くてー！　こんどはもつと持つてくるー！」

努めて明るく振る舞う三十六だが、「うえーい」というような疲れ切った返事しか帰ってこなかった。まだ「狭い」と叱られる方がマシか。

登校前のベッドの中のようにハーftime一五分のうち一〇分が瞬く間に過ぎ、大地が集合を掛けた。ヨロヨロに立ち上がる選手たち。

と、ナナがそつと、三十六に寄ってきた。

「……あんまりカッコエエとこ見せられへんで、ごめん」

「……」

軽く頭を下げられて言われて、面食らう。

でもそれで、カチツ、と火が点いた。

「……なにを、アホなことを、おつしやる」

「え？」

「これから、5点獲つて、逆転して、くれるんでしょう？」

「……いや、相手そこそこ強」

「するよな!？」

「……」

カチン、と音がした。

「……するよしたらあ、言われんでもやるわいな！」

「おう！ ほなやつてくれや！」

「やるつちゅーてんねんやろしつこいなあ！」

「そらすんませんね。しつこー言わんとわかつてもらえん気がして」

「ウチが一番わかつとるつちゅーねん」

「せやな。日本一になるおひとやからな」

「……やかましわ!!」

ホンマどんならん男やで！ 黙ってそこで見とき！」  
「へえへえ、そうさせてもらいますー」

プイツ、と踵を返してズカズカとガニ股で去る。  
入れ替わりに古都。

「……憎まれ役カッコイイー」

「はたきますよ。こういうのもマネージャーさんがやってくれてもいいーんじゃないスカねえ」

「マネージャーは、気分よくやつてもらうことに専念した方がいいと思いきりマース」

「ズルっ」

——大地はとりあえず、stay tuneに決めた。

丁寧に具体的にいま足りない点を指摘し、やるべきアクションを端的に説明する。神妙に聞いていた面々も、「こうしなさい」が降ってきて、いくぶん元気がでてきた。

軌道修正が効けば、ある程度戦えるかもしれない。ダメなら選手とシステムを変えて、いかにも「テストです」的な雰囲気を出してごまかそう。

後年はどんな戦いでも必勝の気合いで臨んだ大地だが、このあたりはまだまだヌルかった。ひよつとするとこの戦いでここまで追い込まれた、いや、追い込まれたとすら理解してないぐらいピンチに陥つたのは、新米コーチ・上町大地のせいかもしれない。

大地の言葉が終わると、はなこが一言、

「出てない人の分まで、がんばって！」

といかにも委員長っぽいセリフを吐いた。「あーい」とやる気があるんだかないんだか微妙な頃合いの声が三々五々あがつて、ナナ。

「……ちよいええみんな？ 円陣組まん？」

おおそうだ忘れていた。ユニ着替えて慌ててたから、試合前にそれを。

「うん。いいね。じゃあ音頭は」

「ウチにやらせて」

美緒は気づいた、ナナの声が低くこわばっていることに。

怒ってる？ 不甲斐ないチームに、自分に？

ふと見回すと、居た。なんか今日はよくナナちゃんがヒソヒソやつてる噂の彼氏が。目が合うと、手刀を前に「すみません」。

いえいえ、とんでもない。

私の方こそ、火が点けられなくて。

自然と微笑みが出た。

ナナちゃんみたいな目標向かって飛んでくような弾丸娘が、心掻き乱される相手か。よほど相性が、いいのか、悪いのか。

……青春だねえ。

全員揃って、大地と古都も輪に入る。三十六は両手を振って断った。ここがたぶん、境界線だろう。

「……たいへんピンチになりましたが」



肩を組み、額を寄せ合い、本音を言う。

「どんな試合でも、勝とうと思つて、戦わなければ、なにものも、得られません。こんなに点差が開いたので、勝てるかどうかはわかりません。でも……」

すう、とひとつ息を吸つて、全部吐く。

「勝つぞ!!」

「「……はい!!」」

「Never Give Up!

Go Ahead!

andi

DOI」

「「MIRACLES!!」」

ナナらしい、気合いの塊、いや気合いそのものと言つた音頭だった。

それは簡単に、伝染する。

というよりも、その声が気魄が、それぞれの中にあるスイッチを、パチリ、と入れた。

跳ねるようにピッチに駆け入る選手たち、両手を叩き、ピッチを睨んで声を出しながらベンチに下がる選手たち。古都でさえ背筋が伸びた気がして、そして大将。

〈……まったくおっしやるとおりだ〉

これを、むしろこれだけを、言わねばならなかったのに。  
僕が。

〈反省〉

ミスは一瞬、学びは一生。

## ●四場 エンジン始動

——後半開始早々、生まれ変わったミラクルズが、敵陣に襲いかかる。激しい出足で敵のボールを奪い、二人目、三人目がそれを追い越していく、素早いルックアップでコースを探し、あるはパス、あるはドリブル。押しこむ、押しこむ、押しこむ、押しこむ。

実況の声も弾む。

『さあ左サイド、流乃のダッシュに可憐が開いて待ち受ける、パス、そして追い越す、リターン、可憐はゴール前へ斬り込む————……クロスウ!!』

パス交換でフリーを作った流乃、ゴール前可憐へキレイなクロス。いい球だったが、慌てて帰った敵CBに弾き返されて、クリア。

『……届きませんでしたがいいい攻撃でした！ ミラクルズの長槍と絶対エースの共演！ 左サイド活性化!』

前半の経験と、大地のディテール修正も効いた。「これは見込みがある」と感じられると、エネルギーも湧いてくる。

左だ、流乃だ、可憐だ、それをエレナとありすがサポートに走る。そこへさんざんボールを供給しておいて、美緒。

性格が、こういう時は、とても悪い。

顔・身体、どう考えてもまたも高速突破を図ろうとする流乃へロング・パスを送るふりをして、右。

ズバッ、と音を立ててDFラインの裏側、誰もいないゾーンにパスを出す。もちろん拾うのはこの人、難波鳴海。

『……と見せてこんどは右だあーーーーーっ！』

難波鳴海のドリブル突破ーーーーー！』

すでに全員の名前とポジションと得意芸を（三十六のメモを元に）頭に叩き込んだ高安が、テンションをかち上げる。

その絶叫に乗るように独り無人の荒野を突き進んだナナ、チラリ、左を見る。  
ハーフタイムひとことだけ、胡桃に伝えておいた。

「ウチと可憐を結ぶ線に入らないでくれ」

邪魔だと言いたいわけではなく、パスコースが二つ欲しいと。無言で頷いた胡桃だが、いままさに見ると、可憐の姿が隠れるほどに、ライン上。

ままよ、と思う。さしものくーちゃんでも、FWは慣れてない。いきなり完璧は求められない。よし構わん、くーちゃんでも脚に当ててくれ。

低く鋭くパスを出す。

PA（ペナルティ・エリア）外側をえぐりきつたところからのマイナスのグラウンダー、もちろんDFはついていけない。

『えぐった！ マイナス！ クロス!!』

……スルーツ!!』

ボールが来るや胡桃、その長くて細い右足をふい、と上げて、ボールはその下を通る。そして、愛する可憐の元へ。

『……ドン！』

……ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

可憐が勢いそのままにネットまで駆けてボールをGKより先に拾い上げ、ダッシュでセンターサークルに戻る。さあここからだ。

ナナも駆けながら、右拳を握って上げて、胡桃に叫ぶ。

「ナイツスルー!!」

「ん」

今日始めて胡桃が口角を上げた。彼女はネコみたいに笑う。

『ミラクルズ、1点返しました！ これで1対4！

左、左と使って敵の意識を寄せていきなりの右、どうですか解説の空堀さん!』

「はい？ 私ですか？

あ、えー、さすがキャプテン、黒いです」

ベンチから爆笑が起きた。正確に言うのと、爆笑してはいけなさと表情や感情を抑えようとして抑えきれず噴出する水蒸気爆発みたいなのが起きた。

「マエストロと呼びましょう。シェフの方がいいかな？」

『必殺料理人ですね！　そして難波選手の見事なドリブル！』

「踊るような躍動感。『ドリブルダンサー』の称号を贈りたい！」

『森之宮選手のナイス・スルーに此花選手のパーフェクト・シュート！』

「はい。どちらも完璧でした。」

「タカちゃん、見たわかるよ」

『ラジオの前のみなさまに！』

「それは失礼しました。」

「とにかく完璧です！　これが！　これが、ミラクルズです！」

『今後の展望は！』

「勝つでしょう！」

『シンブルにありがとうございます！』

「キーマンは？　やはりキャプテンMIO？　エース可憐？」

「全員がキーマンですが、ひとり上げるなら……難波鳴海です。彼女が前半は楽屋に忘れていた、攻撃のタクトを取り戻しました！」

『なるほど！』

「ところで空堀さん、最近ちょっと難波さんといいかんじだと風の噂に」  
「ガセです。」

さあ試合試合！」

『おおーつとそうこうバカ言ってるうちにまた繰り出されるローングアロー！ズルいほど飛び道具、和泉流乃が、走る、走る、走る、そうまさに、駆け抜ける喜びooooooooooooo！』

1点取ると、変わるものである。

もう一発アレやるぞ、とイメージが全員に共有されて、先ほどよりスムーズに迫力を増して、左サイド攻略が進められる。

もちろん相手は同じことをやらせるか、と反省を元にさつきより半歩先・半手先に動いてる……つもりだが、チョーシに乗るとそんなものではどうにもならんのが、流乃の脚。

天性の武器には、どうやっただってかなわない。

ヨユーでコーナーフラッグギリいっぱいまで攻め込んで、ガスッ、と土煙上げて真ん中へのクロス。こんどは胡桃、これは私の仕事、と空を飛んだ。

空を、「飛んだ」。

相手DFから頭一つどころか、上半身まるごと出る勢いで高度を上げると、そのショートカットを振ってボールを捉え、優しく落とす。落とした先もちろん、可憐……

に、GKが勇敢にも飛び込んで、事なきを得た。



「コエーッ！」

ベンチで千里が、言葉裏腹の笑顔、GK目線で叫んだ。

あんなもん繰り返されたら為す術がない。脚でブチ抜かれて、高さでフリーで撃たれる。パスを選択せずヘディングシュートだったら、あるいはパスでも可憐を信頼して叩きつけるような勢いのあるものなら、フツーに1点だった。

「これ繰り返せば自動的に勝てるんじゃない？」

はなこが半笑いで呟いた。

「……そうはいかん」

ようやくベンチに帰ってきた大地が、腰掛け長い脚を組んで言った。

「流乃の脚はそう連続使用が効くわけではないので、あれはここ一番でしか使えない必殺技だ。

むしろあれをどこで繰り出すか、その戦略が重要」

「なるほど」

いま美緒は、とりあえずモメンタムを引き寄せるために必殺技を二発使った。

さあ次は。

『キックオフボール、簡単に天満蘭が跳ね返す！』

そのボールを拾って構えるはまたもキャプテン、さあまた左・流乃か、あるいは右・ナナを斬り込ませるか、あなたのご注文は、DOTCH!』

どちらでもない。

ふっ、とボールを足元に置いたまま、コンマ何秒かの時間を使って状況の変化を見計らって、そうそれはまるで野菜炒めのオイスターソースを最後に入れる瞬間を見極めるように、パス。

真正面。

誰の意識からも消えていた、ありすだ。

ありす受け取ると、さつき大地に言われたことを思い出す。

『いまはとにかく、自分がなんとかしようと思わずに、可憐とナナがどこにいるかいつも把握しておいて、出せる方へ出しなさい』

それならなんとかなりそうだった。

頭の中それだけ考えてて、ボールが来た。

身体が反応する。

背中から来たボールを、右足アウトサイドで、ひよい、とワンタッチ・ノールックパスを、右

サイドに放り込む。

『ありす、フリック！』

ナナだ！ ナナだ！ ナナだーーーーっ！』

もちろんその先にはナナが突っ込んできており、ボールをトラップするや、ペナルティ・エリアに侵入する。前回と違ってDFは配置されていたが、ありすによつて歪められた時間に彼女はパニックになる。たまらず手を出しナナの胴体に抱きつき、引き倒す。

ズザーーーーッ……

と派手に土埃が舞い上がつて、審判をしていた相手の顧問先生、苦笑いしながら笛を吹いて、ペナルティ・スポットを指した。PKゲット。

ナナ、ニコリともせずに取り上げられて、倒れているDFを引き上げてやった。

「すみません……」

と謝るのはおのれのファウル。

「ええで」

と一言返すが、むしろ謝りたいのは自分の方。派手に倒れたが実のところこのぐらいの抱きつきなら、振り払って突進する力も経験もナナにはある。それをしたあと角度のないところからシートをねじ込める可能性と、倒れてPKを取ってもらえる可能性とを、天秤に掛けたままで。

〈……ナナ、蹴る？〉

とキャプテンが口真似で気を遣ってくれるが、遠慮した。  
わずかながら良心の呵責があるのと、PKは職人にまかせた方がよからう、と。

『……さあペナルティ・キックのチャンスです！』

蹴るのはもちろんこの人、ミラクル・カピタン長居美緒！

さあ追撃の一発を決められるでしょうか！

どうでしょう解説の、三十六兄さん！』

「キャプテンですよ？」

どうやって外すんですか。ほらあすこを御覧なさい、キーパーはすでに、へびに睨まれたカエルちゃんゲコゲコです」

『おおまさに、アナコンダの前の哀しい実験動物ヌードマウス！』



「……」

「愛ちゃん笑いすぎ。実況、楽しいけど、スポーツ実況じゃないわね」

「……バラエティ……」

これもド真面目なユミ姉が、顔を覆って笑う愛と実況席にツッコんだ。  
いや楽しいから、いいんだけど。

「でもあのパス凄かったナー」

マキがため息をつく。ありすのアレ、一見簡単なフリックに見えるが、角度やパスのキレ、自分が同じことをできるかといえ、相当怪しい。

なるほど、新構成の攻撃陣四人、なかなかやるではないか。

要するに、最後は可憐とナナなのだ。

ただし、そこへ至るまでの手順にバリエーションがないと、びつちりマークされて攻め手が無くなる。そこで高いのとパスセンスあるのを混ぜて、中盤・守備から入ってくるボールを、いろんな形で可憐とナナに供給する。

これがこのシステムの狙いか。

これじゃアタシもウカウカしてると、本当にポジションを失ってしまう。

ガンバラナイト。

大地はこみ上げてくる笑いをかなり必死で噛み殺していた。  
のは、漫才実況のせいではない。

こうも巧く行くものか、と。

予想以上どころか、想像もしてなかったほどうまく回り出した。

運命の輪というのはどうやらフライホイール（はずみ車）のように、回し始めるとどこまでも  
勝手に、恐ろしい勢いで回るものらしい。

しかし、ふしぎなものだ。

同じメンバーで、同じ相手で。

ちよろちよろつとなんか言っただけで、空気も現実も一八〇度変わる。

逆に言う……

背筋がブルブルツ、とした。

現役の時できえ来たことのないもの、それは、武者震い。

〈……おそろしいポジションだな、ここは〉

コーチというのは。サッカーの場合。  
チームの力を半分にもできるし、おそらくは、倍にもできる。  
キリッ、と顔を作って、腕を組み直した。  
なにせまだ2点を、追っている。



## ●五場 締められる

——しかし敵もさるもの。

「まずい、怒らせた」とでも感じたのか、「まず守備から」に切り替える。フォーメーションまで変えてきた。いわゆる「ゴール前にバスを並べる」というやつで、4―4―2の後ろ四人二列をベツタリゴール前に張り付かせて、スペースを与えない。

特にキレのいいドリブルで泡をふかされたナナには、ほぼツーマンセル（二人単位）。可憐にもマンマーカーがへばりつく。

個人技のある有名選手のいるチームに対するシミュレーション……と、そんなところか。

こうなるとちよつと打つ手が無い。『テイキ・タカ』のような遅攻で相手を崩すには、チーム全体にボール扱いの上手い選手が揃っている必要がある、速さ（流乃）、高さ（胡桃）、強さ（蘭）といったそれ以外の能力で選ばれている選手の多いミラクルズには、難しい。

余談だがこの「引きこもる相手を崩せない」はそもそも本質的にそれに弱い「（隠れ）カウンターチーム」として大地が設計したミラクルズに、延々と（ある段階まで）つきまとう問題だった。いかに想定内のこととはいえ、彼は毎戦のようにこれへの対応に苦慮することになる。

一瞬で2点奪ったあたりまでは「このまま一気に逆転か」と思わせたが、膠着して、させられて、時間ばかりが過ぎていく。

『……さあキャプテンがボールを持って出しどころを探す、探す、探す、しかしどこにもスペースが無い！ 相手も前に出てこない！ これは困った、どうするキャプテン……おーつとミドルシュートー！ ……ヤケクソ気味！』

引きこもられたらミドルシュートで前に出てこさせろ、は定番だが、これにも無理に前に出ずにシュートコースを塞ぐ形で対応する。セーフティ・ファースト。

むろんそれを縫うようにコースを狙ったシュートは、GKに防がれた。

〈……うまいなあ……〉

大地。さすがに強豪校は、こういう「こうしなさい」で練習を重ねられるようなアクションはすこぶる巧い。ウチも守備ではある程度見習わないと。

〈……と言つてゐる場合じゃない〉

打つ手と言えば選手交代だ。トリッキーなマキを入れて崩す。スタミナ自慢のユミ姉を入れて掻き回す。うーん、決め手に欠ける。

「コーチ！ おらつちいつでもイキますぜ！」

第二G Kの千里がスクワットしながら元気よく言つた。

「いやG Kは暇そうじゃん」

「FWで、です！」

ほら、カラちゃん先輩にふつーユニも作つて貰つちやつてるんで！」

「えーっ！」

はなこにニコニコ見せる、フィールドプレイヤーと同じピンクの「20」。ちなみに今着てるG Kユニは、白地に水色の三角形が袖や襟ぐり、胴体に入っている。新選組の法被を想像していただきたい。黒一色の忍のG Kユニと違って、恐ろしく派手である。小柄な千里が自分を大きく見せたいと注文したら、こうなつた。

さつき貰つたばかりだが、たいへん気に入っている。

「ちよつと、FWならアタシが行くヨ」  
「ぶ」

本職のマキと愛がぶられた。しかし先輩を差し置いてでもなんとかしたいという心意気は、買える。

〈……心意気か〉

確かに千里で意表をつくのもありかもな。

「……もうすこし、見てみよう」

もう一度ステイチューン。

指揮官でいちばんむずかしいのはこの、「ガマン」らしい。

しかし時計の針は後半三〇分を指そうとしている。残り一五分で2点いや3点は、なかなか難事業である。

——ピッチでは、ナナが若干苛立っていた。

元来が攻めダルマ、「ベッタ引き」という相手の戦術が基本的には好きではない。それもワールドカップ予選で突破が掛かって1点リード残り一〇分、とかそんな状況ならともかく、練習試合で、2点リードだ。

こんなところからそんなことをして、なんになる。

サッカーは、楽しくやらな、あかんやろ。

「うおりゃあ！」

と一声吼えて、鬱憤ばらしの突進。

目の前にササツと現れてスクリーンになる四人とGK。相手左サイドは「7番は全員で潰せ」と指示が出るかのようだ。吉岡一門を相手にした宮本武蔵はこんな気分だったのだろうか。一対一ならなんとでもなるが……

結局囲まれて、もぎ取られた。

〈……ほとんどイジメやないか〉

デイフェンスでも、美学つてもんがあるろう。

美しくとまではいれないが、取られた方が納得してしまうような、クリーンなボール奪取が力づくは、美しくない。

へ……もつとのめり込んだところで構えて、キャップかもーさんに遠くから入れてもらうか

美緒、もも、二人ともフィードは巧い。また左に意識を集中させて、そーつと右の最奥にでもこつそり待ち伏せを掛ければ……いや。

目の前のDF、MFが「離さないぞ」とばかりにこちらばかり見ている。

……人気モンは辛いねえ。

であるならば困か。むしろムリクリ気味に突進して、バックパスから逆サイドで打開。

あるいはあるすだ。さっきのは非常によかった。さすがウチからトップ下を奪った女。逆にウチからのボールを巧くりフレクションして可憐に通してもらえば、チャンスになるろう。

……が、すこしでもいい位置でボールを受けようとすると、相手選手が痴漢電車のようにくっ

ついてくる。それも複数だ。ああキシヨク悪い。

〈……ああ、もう！〉

ガマンにガマンを重ねていた。

ユース代表で強豪・格上と戦った経験の多いナナは、見た目よりガマンは得意だった。明けぬ夜はない。晴れぬ雨はない。

——三十六はもうすっかり、忘れていた。

タカちゃんとの実況ブースが楽しすぎて、というわけではないが、そろそろ試合後の段取りが頭をよぎる。「戦勝会」と言い切りたいところだが「打ち上げ」の。頼れるこつとんは……さすがに試合終わってからがいいか。よし、あとちよいしたら、あの運転手さんに交渉しよう。

あらためてピッチを見る。

どん詰まり感がすごい。

ピンクが一生懸命ボールを回しては、黒い壁にぼーん・ぼーんと跳ね返されている。

なんだか村上春樹先生の、エルサレム賞演説を思い出した。

壁と卵。

私はいつでも卵の側に立ちたい。

それでも、前半のどんより気分比べれば、ボールを支配して相手を押し込んでいるのだ。立派なもんじゃないか。勝ち負けは時の運、また明日があるさ……

「……あのう、空堀さん」

「はい!？」

「……あ!!」

唐突に。

待っていた「三つめ」が、来た。

「……お忙しいところ、お邪魔しにまいりました」

「いえとんでもない! ようこそ、まいちゃん!」

「……」

はにかみながら、でもあの日よりずっと柔らかい表情で、おばあちゃんに手を引いてもらって  
るまいちゃんは、小さく頷いてくれた。

「こちらこそお忙しいところわざわざすみません、時間、ご都合悪かったようでしたら無理して



来られなくてもよろしかったのですが」

「いいえ、あの、おじやまになつてはいけないと思ひまして、試合の終わった後に……」  
「なにをおつしやいますやらあ！」

腰が抜けるようだった。おばあさま、変な気を遣わんでください……

しかし、いま居てくれているのは、事実。

ピッチ方面振り返つて、どういふ声の掛け方をしようか一瞬だけ迷つて、  
こう。

「……ナナツ!!」

呼ばれたナナ、振り返る。

またなんかややこしいことを言おうとしてんやろか……

「どやどや」といふ顔の三十六が、両手を身体の左側でヒラヒラさせている。まさにその下には、  
おお、ちいさく手を振る女の子。

〈……来て、くれたんかあ……〉

一瞬ほっこり、そして次の瞬間、  
電撃に撃たれた。

彼女は、おかあさんの姿を求めて、可能性はゼロとわかっている、たったひとりで、電車に乗って遠い街に来た。

しかるにあんたはなんや。

誰を使う、何をしてもらう、そんなことばかりや。

お前は、ウチは……

〈……アホやあ!!〉

溢れ出てくる目の水を、汗を拭くフリをして真っ白なりストバンドで拭いた。まだ乾いているそれは、ロクに汗もかいてない証拠。

キッ、と唇を結んで、駆け寄る、主将。

「まいちゃん来てくれたの。よかったねえ」

ん。

みーちゃん、次カウンターになったら早めにウチの足元へ一本ちようだい」

「OK」

ナナの真剣な、というか見たことのある無表情に驚く美緒。

これはまかせるしかあるまい。

流乃と蘭に声を掛けてピッチサイドを指した。ニヤリ笑ったり、拳を握ったり。ベンチでも。

「出して!!」

「よし」

はなこと愛。大地も即答した。

壁をブチ破るには、新しい推進力が必要だろう。これはいいキツカケだ。

替えは……

と、三十六が飛んできた。大地の肩に腕を回して、耳元に囁きかける。

「……大ちゃんこんなこと言うて怒らんといてな、もしよかったら、あ戦術上無理やったらええねんで、もしできんねんやったら、やけど、明日葉ちゃんは置いといて欲しい」  
「……大丈夫」

大地○・五秒考えて決断した。

本当は、はなこを入れるなら、明日葉に替えて右サイドバックが適当だ。新ポジションのツボを掴みつつあるナナと、攻め上がれるはなことのシナジーも観てみたい。

「ホンマすまん！ センキュー！」  
「いや」

しかしいまここに、「天の声」が降ってきた。

スポンサー絡みとはいえ、こういう「流れ」とか「運命」を大地はかなり信じている。そして相当、大切にしている。

と、いうよりも、人智や作為の及ぶ限界が、人々が想像しているよりも、はるかに低いところにしかない、というのを、心で身体で思い知っている。

それらは無駄でも無意味でもない。しかし、それ以上遥かに大きな力の、流れが、渦が、この世界には巻いている。

事実ここで明日葉をそのままにしたことが、後にナナのスーパープレイを生んだ。

「……古都、交替札。」

14 胡桃に替えて11愛、8エレーナに替えて2はなこ」

「はいっ!」

「中盤? 明日葉のところじゃなくて?」

「ナナがキレてるのでその近く弄りたくない。流乃と可憐をガッツリサポートして、ベンチで見るエレのお手本になってやってほしい」

「了解」

理屈と膏藥はどこへでもつく。

「愛は得意の囲プレー。ナナと可憐の使えるスペースを作ってくれ」

「はい」

むしろこちら、胡桃の高さを失う方が惜しかったが、しかしナナと絡むのは愛は去年一年やつてるわけで、プラスもあるう。

「勝つぞ」

「まかせて！」 「はい」

やる気十二分、フレッシュな二人を送り出す。

## ●六場 ウチは浪花の

これが効いた。

愛は美しい見た目に反して泥臭いプレースタイルのFWであり、相手DFがボールを持ってばかりかまわずチェイスを掛けた。はなこもボディの強さや身体能力ではなく、突っ込みの切れ味で勝負するタイプのDFであり、負けじと相手の中盤のボールに遮二無二突つかかっていく。後半途中、もうそろそろ走るのも億劫になつてきていた敵陣を、翻弄し始める。

『……はなこだ！』

替わつたばかりの美原、カミソリ・タックルで足元を刈る！』

基本DFの彼女、普段なら入れ替わつてすり抜けられるような無茶なタックルはご法度だが、いまは違う。

敵、たまらずバックパス。

『あつとバックパス、すかさず愛がアタック！ 躍動している！ ここで拾えば1点だあ!!』

ここでこぼしてくればそのままシュートへ持ち込める。

FWはどんな形だろうと点を獲れば勝ちだ。可憐のような圧倒的な技術やセンスや身体能力は無くとも、「点を獲った」という事実は、消えない。

『おーつとセーフティ・ファースト！ 大きく大きくクリアー！

プレーがアバウトになつてないかあ!?

もちろん簡単にももが拾う！

すかさずキャプテンへ！ ルックアップ、

……ナナだ！』

美緒はさつきの要求通り、ナナに出す。

意外、かなり自陣に近い低い位置に構えていた。

ナナ、受けたボールをひと転がし、

「いけえー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！つ!!」



ボールが、宙を切り裂く。

『あーつと意表をつくハーフフェーからのロング・フィード！ いやロング・シュートか!?』

愛がニア（ボールから近い方のゴールポスト）に走る。彼女はこのチームでの、特にナナと絡む時の「自分の活かし方」がよくわかっている。

相手DFが二人、三人、寄る。さっきのあの高い高いFWがフラッシュバックする。なんとしても潰さねば。GKもさっきの落としをイメージして、身構える。

『ああーっ！?』

実況には絶叫する時間しかない。

しかしその一言で十分、観ているものの代弁になった。

速く高く宙を飛んだボールは、感覚的には、愛の真上あたりで、

ぎゅおっ



〈……聞きしに勝る、というか〉

大地こころで苦笑い。

思い出して欲しい、敵にこの攻撃を防ぐチャンスがあつたかどうかを。この弾道ミサイルの発射点はハーフウェーからすこしだけ入り込んだ地点であり、まだまだ激しいプレスを掛けなくても叱られない位置だ。放たれたそれは予測不可能な軌道を描いて誰も予期しない位置に着弾し、唯一その地点を予見できる熟練技術者によつてのみ、ゴールへと軌道修正が行われる。

「これ繰り返し返してたら勝てるんじゃない!?」

はなこの代わりにマキが叫んだ。

それはおそらく、そうだろう。

もちろんこれがあると意識されるとなんとか防ぎようもあるので、いまみたいに不意打ちと組み合わせれば、だが。

『目が覚めるようなクロス！ 息の止まるようなシュート！』

これ・が・ミラクルズ・です！

3対4！ あと1点で、同点！』

ハイタッチをするぐらいの余裕は出た選手たち、ナナは何やらありすに耳打ちして、まいちゃんの方を見る。

……あれ？ 反応薄いな。

横の三十六が、若干怖い顔をして手招きしている。ま、ええか行ってみるか。

……頭ごなし。はたかれる勢いで。

「アホかお前！」

「え、ア、アホお!?」

「いまのパスがええパスとかそんなサッカーのプロやないとわからんやろが！ まいちゃん見てみほらポカーンしてるやろ！」

「ハ、ハア!? ちゃ、このぐらいの子どもの方が、物事の本質をやなあ！」

「グデグデ言わんと自分で決めれ自分で！」

「……き、き……」

キーツ、と喚きたくるなるのを必死で堪えた。教育上よくないと。

な、何を言うんや、点は誰かが獲ればいいのであつて、そこに参加したというのが重要で、そもそもプロとか言わんでもホラ見てみい、ここにおるもん全員ウチのクロスをポカーンと見てただけやったやろが、そもそもなんやねん「お前」て、「お前」呼ばわりされるような義理がなんであんなアホにあんねん……

と、ポジションに戻りながら悪態をつきながら、しかし、言われるように、確かにまいちゃん  
は、にこにこはしていたが、ウチがヒロインだとは、理解していなかつたようだ。

五歳児には、難しかつたか。

ぬぬぬぬ……

試合再開。

リードが減つてしまった相手、ますます殻に閉じこもる。そしてナナと可憐へのチェックも、さらに厳しくなつた。当たり前だろう、放置すれば防ぎようのない形で二人で点を獲られてしま  
うわけである。

しかしそうなると。

『……今度は左サイド！ 久しぶりに流乃の突破！

しかし食いつかれる！ はなこに戻す！

はなこが切れ込んで、楔のパス！ 愛だ！

しかし振り向けない、ゴール方向振り向けない！

戻す！ ナナ！

さあここからどうする！ 目の前には壁！』

どうもしない、という選択をした。

誰かが前に突つかかってくれば、できたそのわずかな隙を突いてありすを走らせるつもりだった。が、ピッチリ動かない。

ので、その場でボールに足を掛けて、遊ぶように転がした。

見ようによつては挑発にも見える。

さすがにそこまでされると、人間には自尊心というものがあつて。

『デイフェンスが出る！ ひとり、獲れない、ふたり、まだ獲れない、さんにん、囲まれる……  
そこ!!』

三人引きつけて、ゴール真正面わずかなスペースへ鋭いパス。

目論見どおりありますが飛びついて、あっ、と声の出そうなスムーズなターンを見せた。前を向く。シュート、可憐へパス、どちらでも思いのまま。

〈……時間を操る能力だ〉

大地、ようやく今まで感じていたものを言葉で表現できて、安堵する。

ありすの動きを一目見た瞬間から、「これはおかしい」と思っていた。もちろん本人にそんな自覚は無かろうが、身体の変な動きで身体の変な場所で、そして変なタイミングでボールを扱うので、周りが極めて混乱する。ナナや可憐がこれに付き合えるのは、鍛えに鍛え上げた肉体が、身体的に反応するからである。目で見て・判断して・体を動かす、という手順を踏んでいる並のプレーヤーでは、むしろそういう訓練を積んでいれば積んでいるほど、この「歪んだ時間」に翻弄されることになる。

ところがありすは、その時間をただ空費した。

ハッ、と我に返ったDF陣が体勢を整えなおし、身構えてから、ようやくおっとり、と真正面

にドリブルを始めた。

当然、わーつと襲いかかれて、潰される……  
過剰に。

ピーッ……

棒倒し競技のように、華奢でちいさなありすの身体が屈強なDF・MFガールズ四人の身体の下敷きになったのを見て、たまらず審判、教諭の顔になって笛を吹いた。

『……これは酷い！　いくらなんでも強引です！』

また助けだされたありすのユニが顔が手足が、土埃まみれになっているのが痛々しい。罪悪感を、掻き立てる。

ナナは呆れた。

想像以上のタレントだ。

自分の特徴をすでによく理解していて、それをしかも逆張りで使うことで、このチャンスを出した。あれそのままシュート撃つても可憐に通しても、間違いなく1点である。わざわざ、潰



されたのだ。

見つめていると、目が合った。  
にこつ。

天使か。

〈……あとで奢らなあかん〉

『直接FK、フリーキックです！』

もちろん蹴るのはこの人、プレースキックの鬼！

難波鳴海！』

ボールをセットすると、寄ってきたキャプテンが、囁くように訊く。

「……サインプレーは？」

「直接ねじ込む」

「フェイクは？」

「要らん」

「決めてね」

「決めいでか」

『……さあゴール前真正面距離約二〇mちよつと、壁は右側に六枚！ 距離はいいですが真正面近め、若干撃ちにくい場所か。キッカーはナナひとり、ミラクルズは左右に分かれます！ サインプレーか、直接か！』

笛が鳴る。

後ずさる。

ゴール前そこかしこでもみ合うピンクとブラック。

短い助走、ボールにつく、振り上げる脚、

壁が跳ぶ、

身体を倒して、タイミングを外して、右脚を、振り抜く。

『直接だー！っ！』

ボールは降下を始めた壁の上を通って、キーパーの右、キーパーから見て左の上を襲う。しか

しこの距離、壁の上を通るボールなら相当緩くないと、ゴールバーの上を越えるはず。見よ、事  
実ボールは、

『落ちるう!!』

え、と思う間もなく、

鋭角に曲がったボールは、

滝のように落ちてきて、

ゴール右上隅に、吸い込まれた。

『……ンゴウオオオオオオオオオオ！ ゴルゴルゴルゴルゴルゴル、ゴーーーーーボール！  
同点！ 4対4！ 同点っ！ ですっ！』

ようやく喜びを爆発させられるピンクの選手たちが、ナナに次々に覆いかぶさった。

『決めたのは！ 難波鳴海すなわちナナ！  
背番号もーッ！』

「ナナあ!!」

ベンチも実況に合わせた。全員立ち上がっておおはしやぎ。

「コーチ！ やりましたよ、こおち!!」

「ん」

感極まった（見かけによらずよく感極まる）古都にバンバン肩のあたりをどつかれながら、大地はわずかに微笑んだ。

まさに「必殺」という言葉がこれほど似合う武器もあるまい。

FKの名手・中村俊輔選手が日本代表の中軸に居た頃、「FWは点を獲らなくても、いい場所でファウルを貰ってくればいい」などと無茶苦茶を言われたが、それに匹敵する。

確かにセットプレーはサッカーで大きな得点源であり、統計によつては得点の六割がセットプレー絡みという。これこそ、「これを繰り返せば勝てる」という必殺の、防ぎようのない武器だ。

いいぞいいぞ。

左の長槍、右から弾道弾、戦術可憐に、空戦のF-14、時間の国のアリス、そしてFKでドン。武器があり余るぐらいある。

これは……これで強くできなければ、僕があまりにスカタンってことになる。  
……がんばろう。

ひとしきり祝福を受けてナナ、まいちゃんの元へ。横にいるアホは無視。

「……でやった？ お姉ちゃんカッコ良かったか？」

「うん!!」

子どもの笑顔というのは、なんてすばらしいものだろう。

ああ、ウチもできたら、できたらでええんやけど、こんな子どもがほしいなあ……  
こんなこと初めて思ったけど。

「……もう1点!」

「は?」

「ナナちゃん、もう、1点!!」

「ぐっ」

笑顔全開で言われて、むせる。

これは……アホの仕込みか。横を見上げる。アホは明後日の方向を見て、口笛を吹く真似をしている。あとでクロス。

「わ、わかったおねえちゃん、がんばってみるわ！」

「うん！」

「がんば・れー！ー！ー！」

「お、おう!!」

無邪気な笑顔で両手をぶんぶん振られると、力強くうなづく以外の選択肢はない。

目的のためならちっちゃい子どもも利用する、

あの男は悪魔か。

……ま、まあせやけど確かに、ナナちゃんの、ちよつとええとこ観てみたい、もう一回、つちゆーのも、まいのすけの素直な気持ちやろ……たぶん。

自分を奮いたたせる、しかし得意のプレーコールは……裏抜けしてマイナスの折り返し、ペナ

エリアでごちよごちよしてPKガッツ、長クロス、直接FK……  
よし。まだアレがある。

「……みーちゃん」

「次はなに？」

「人左へ寄せて。いま！言うたらボールちょうだい」

「おっけー。」

「なにをするの？」

「それは見てのおたのしみや」

「ふふ」

いちばんむずかしいのを、やろう。

失敗しても得られるものがあるのは、限界を越えようとした時だけだ。

——笛が鳴る。

残り時間は一分。

『……さあ試合は振り出しに戻りました！ この時間からだと次に1点獲った方が試合を制するでしょう！ 解説の空堀さん、どちらが有利でしょう！』

「もちろん追いついたミラクルズです。次の1点も我々が獲るでしょう！」

『ズバリ得点者の予想は！』

「この流れで他の名前が上がりますか？」

……ユミ姉さんです！」

『出ても無いやないかい！』

「……」

「くー、笑いすぎ」

お役御免の胡桃にとつては、観戦しててこんなにもしろい試合も無い。外で観ているとすごくよくわかる。胡桃はバスケット経験が長いからか、スタメンや途中交代にさほどこだわりがない。むしろピッチサイドで現況を把握できるので、これはこれで勉強になる。横のユミに、ポツリ。

「……右、空いてる」

「ん？ そうね、もうこうなったらナナ、ナナで行くのかと思っただけ」

左サイドで、流乃、はなこ、可憐がパス交換で崩そうとしている。もちろん敵も必死の守りで、



そうはさせない。

攻めあぐね、かなり左に寄つたももまでボールが返つてきて、やり直し。

「一回キープ！」

美緒の指示にしたがつて、忍まで戻す。忍は足元で軽く転がして、様子を伺う。隙がない。相手はもう、このまま試合を閉じるつもりだ。

出てこい、と言わんばかりにボールをキープして、すこしずつ、前に出る。ももと蘭が、忍との距離を詰めようと下がる。美緒もそれに従つて、下がる。流乃が最終ラインに帰陣したので、真ん中寄りだった明日葉が右サイドに戻つた。忍はゆつくり、その明日葉にボールを渡す。

その少し前、ずいぶん低い位置に、ナナがいる。

敵は誤解した、妙に落ち着いて構え直したミラクルズを見て、相手も試合を締めて、このまま同点で終わるつもりなのかと。

人間はピンチの時ほど、自分に都合のいい解釈を採用しがちである。

ピッチ全体におたがいがバラバラとバラけ、気持ちがあほんの少し、ゆるんだ瞬間、ナナが手を挙げた。

「明日葉！ パス！ ステイ！」

美緒が叫ぶ。

明日葉、弾かれたように強いパスを出す。ボール、美緒の足元。ワンタッチ、斜め前の、

「ナナッ！」

ズバン！とパスを出す。

「Movin' on!」

お膳立ては、これでいい？

ナナ、ゴールに背を向けそれを受け取る。

MFが二人、寄って来る。普通この場合右サイドバックつまり明日葉、が駆け上がっていくので一人ずつ付くのだが、明日葉は来ない。ので、二人でどちらがナナを見るか、お見合いのようになる。

混乱する二人をまるで輪舞曲ロンドに誘うように、ナナはくる、くると身体を回して、ボールを回して、その二人も回して、できた隙間から、突破。

一人、二人。

いつもの磁石でも付いてるのかという、右脚に吸い付くようなドリブルではなく、ポーンポーン

ンと前に弾くように運んで、自身も一気にトップスピードに乗る。実況が静かに名を呼んだ。

『難波鳴海』

キャプテンの指示も飛ぶ。

「愛！ あー！ 左ワイドオープン！ スペース！」

右ではない、左へ行けということとは、サポートしろという意味ではない。黙って見てろ、ということである。

敵右サイドバック、待ち構える。迫り来るナナ。わずかに重心を左に寄せた、左を抜かれる、と判断して自らも重心を左に傾けた瞬間、右に切り返されて、ブチ抜かれる。

三人。

『難波鳴海！』

お次はCB。このタイミングで取れる、と準備動作を起こした瞬間、ギアを一枚上げて、加速してそのボール奪取予定ゾーンを突き抜ける。

四人。

『難波鳴海ッ!』

たまらずGKが飛び出した。その足元めがけて身体を投げ出す。しかし無謀、ナナにとってはそんな直線的で読める技の方がかわしやすい。ひらり、とばかりに左に避けて、ボールを失わな

い。

五人。

『なんばなるみ、キターーッ!!』

あとは、無人のゴールに、流しこむ、だけ。はたく。

直後に後ろから脚をかけられてバランスを崩すが、もう関係ない。するすると一直線に吸い込まれていくボールを、ただ敵も味方も、見送った。

『難波鳴海—————!!!』

ワ—ッ、と絶叫が上がった。

その場に居た全員が立ち上がり、叫んで、腕を振り、手を叩いた。敵のベンチからさえ、拍手が沸く。

吼えるナナ、またも群がるミラクルズ。

ひとしきり団子になってグシャグシャやったあと、早く伝えたくてしょうがないナナ、まっしぐらに、まいちゃんのもとへ。

「やったでおねえちゃん！」

「うん！」

「カッコ良かったか!？」

「うん！」

「……鳴海師匠」

気がつけばアホが片膝を立てて、そこを叩いた。  
なるほどこれはアレか。

どっつきり、遠慮無くスパイクを載せた。痛くはない程度に。  
アホは、今日は持つていたハンカチを両手に、その靴を磨く。

「キュキュキュ、つと。

……おみごと!!」

見上げて笑った。

エエ顔やった。

いつつもこんな顔してたら、エエ男やのにな。あんな変な、斜めな顔せんと。

「……あたりまえや、つちゅーねん。

惚れてええで」

「もう惚れとる」

「マジか。

ほな惚れ直しいな」

「そうするわ」

「よっしや！ ほんだら」

スーパープレイも飛び出したし逆転もしたし、普通はここで緩むものだが、そうはいかないのが難波鳴海。

そりやどんなことでも、日本一だの世界一だのを狙うような人は、ちよつと変わって無ければならない。

そう、マラドーナのように。

「……もつぱつ、決めたるわ!!」

見ててや、まいちゃん！ ……さとり！」

「あ、いやもう試合閉じた方が」

「最後の一秒まで、攻める姿勢を忘れたら、あかん!!」

せやろか。

まいちゃんは大喜びで手を叩いている。

ま、ええか。

「……ユーミイ、ナナドーしていちいち空堀クンのところ行くんだろネ？」

「さあ？ なにか作戦でも貫ってるんじゃないかしら？ ほら空堀君いろいろ物知りだから」

「きつとそうデス！ スゴイですネ、三十六兄様」

「……」

「胡桃先輩笑いすぎ。」

「マキさん意外にあんな感じなんですネ。エレちゃんは見たままですけど」

「……ユミが、ひどい……」

「可愛いところも一つはないと」

「こつとんも、ひどい……」

——試合が再開された。

敵はもうすっかりやる気なし。なんだか詐欺に遭ったか、交通事故に遭ったかのような気分だ。なんだ、強いんじゃない。最初から。私達ぐらい簡単にノせるぐらいに。最初は弱いかな、と見せかけて食いつかせてあとでガツポリ身ぐるみ丸剥がし。賭場の博打打ちか、あんたら。

相手が厭戦気分だからって遠慮も会釈も無いのが、ミラクルズのいいところ。このチームその構成員、「空気を読む」という日本人と日本社会に必須のスキルが、まるで身についていない。



相手が脱力してるなら、さらに得点するまでよ。

すつかりキツカケづくりが板についた左サイド、また流乃がグリグリ抉って、時間を使う。はなこが寄る。流乃、敵の何本もの脚をうまくいなしてかわして、はなこに出す。はなこ、一瞬考える。

このまま愛の頭に放り込んでも、いいのだが。  
つままない。

せつかく入れてもらったんだから、私も小粋なプレーのひとつやふたつ。

あ、見て、ナナが突っ込んでくる。  
ようし。

はなこも正確なフィードには定評があった。ちよつとプレッシャーが掛かると崩れ易かったが、今のようにはノープレスなら、かなり正確なパスを出せる。

狙いすまして、ゴール前、愛の頭を飛ばして、その後ろ、突進してきたナナの、頭、めがけて、  
フライボーール。

ふわり、と優しく送られたロビング・ボールは、ちょうど撃ちごろ撃たれごろ。

これは本日のヒロイン、難波鳴海がフリーのヘディング・シュートでもう1点だ、と誰もがそう予測した。

ナナが跳ぶ。

あれ？

あんまり高くない？

もともとがあまり高さは無い上に上背も無い。胡桃の絶対制空権が目に焼きつき過ぎてて、パサーのはなこも目算を誤っていた。

いかん、このまま頭上を越してそのままゴールラインを割って……

でもまいいよねもう笛鳴るし。

と、思いきや。

するするする、と頭では無いものが伸びて、そのボールを、弾いた。

ぽーん……

これがまた綺麗な弧を描いて、あのなぜかファウルやオフサイドの笛が鳴ったあとのシュートは美しいように、ゴール左上隅へ、静かに吸い込まれていった。

ピーーツ!!

その笛の音は、得点を告げるものではなく、ファウルを告げるもの。  
そのカードは、もう試合が終わるから、教諭の茶目っ気だったのだろうか。

「故意のハンド、非紳士的行為。」

……退場!」

赤紙が高々と掲げられた、ナナの頭上。

「……へーっ!?」

ナナの炭酸の抜けた声が、沈黙を破った。敵味方問わず、今度は爆笑が巻き起こった。腹を抱えて、涙を流して、ゲラゲラ笑う。まいちゃんもおぼあちゃんも、みんなが笑っているから、つられて笑っていた。

笑ってないのは、三人。  
本人。

我が事のように共感して顔から火が出る、三十六。  
そして指揮官。

〈……まさか本番でやらんだろうな……〉

「五人抜き」をやりたいと思うサッカー選手はゴマンと居るだろうが、「神の手」をやりたがるサッカー選手はそうは居まい。

というかその人、サッカーに向いてない。

高性能車はじゃじゃ馬は、取り扱いが難しい。

三十六が居てくれて、よかった。

……その三十六は、気を取り直して、ナナと漫才を始めていた。こんどは今までと逆、嫁がボケ、旦那がツツコミ。

「アホかお前は！ 何をしてけっつかんねん！」

「いやちようどええボールがつーと来ましてね」

「る、と手に止まったんか。」

「つー、と来て、るー、ああなるほどそれで『つる』。」

「アホーアホーアホーアホー！」

「アホアホ言わんといてえなあ。ウチはアホちゃうで、ウチは、ウチは」

「なんやねん」

「ウチは浪花のマラドーナ」

「マラドーナはちゃんとわからんように手で入れるんです！」

「うわーん、せやから次はちゃんとわからんようにするー」

「しなさんなー！」

「うえーん」

コンビ名はそうね、7 + 36 で『43』なんてどう？

笑顔の渦の中、ナナの大活躍で、「ミラクルズ」の（フルタイムの）初陣は、グデグデのまま終わった。

色でいえばそうピンク色、灼熱の赤よりは、すこしゆるい。

ユニフォームにこの色を選んだのは、正解だった。

いや。

「それはそのようになる」もので、つまりこのチームは、どうやったってピンク色のユニを身にまとう運命にあったのだろう。

ほらご覧、みんなもう、ずっとこのユニを着てたみたいに、馴染んでる。

本日の試合結果、5―4で勝利。

得点者、此花可憐、長居美緒(P)、此花可憐、難波鳴海、難波鳴海。

退場者、難波鳴海。

## ■第五幕

### ●一場 宴

——無事「戦勝会」と銘打てた打ち上げは、もちろん『山嵐』へ。

「ラーメンん!？」とはなごあたりが声を出したが、他には特に異論がないのがうれしいところ。前戦後のピクニックでの乱れ食いつぷりをみた三十六、これはイケる、むしろこういうところではないと叱られる、と思つてのセレクション、当たり。

残念、まいちゃんとおばあちゃんは今夜おかあさんとのビデオ通話があるというので帰つていった。最後はチーム全員と大地、古都、高安、そして三十六で並んで手を振った。今日は間違はなく、彼女こそが勝利の女神。

大きく手を振り返す、まいちゃんの顔は、最初に遭つた時とは別人のよう。

チームバス（ともう言っちゃえ）を乗り付け、ドヤドヤと二〇人が雪崩れ込むと、大将が目を剥いた。もちろん予約はそう取つたのだが、なんせ華のある若い女子がそんな集団で襲撃してく

ることなど当店始まって以来のことです……

「……へー、悪くないね」

「はな、その思ったことすぐ口に出すのやめなつて。前から言ってるけど」

流乃がたしなめる、しかしオサレにうるさいはなこでも、たたずまいは合格、と。

「L字型のお店の片翼を占拠して、それぞれが肩寄せてメニューを覗いてわいのわいの。店入り口に近い方の四人テーブルから、奥・手前で、

大地・美緒／ナナ・三十六。

蘭・愛／はなこ・流乃。

胡桃・マキ／もも・ユミ姉。

エレーナ・ありす／明日葉・古都。

カウンターには忍・千里・可憐・高安、はもちろん司会、基本は立ったまま。

「さ！ みなさんお集まりいただきましてありがとうございます！」

「ずっと集まってるー」

「はいどんどんツツコんでくださいね、宴はライブ！」



これよりミラクルズ戦勝会、賑々しく始めたいと思います、はい皆様拍手くく!!」

わーっ……

二人の店員さんでは間に合わず、大将もホールに出て用意してあったオードブルやサラダを配り始める。すぐ立って手伝う三十六と古都、最初は「それはいかん」と固辞した大将も、

「次からは貸し切りにするよ」

と苦笑いで手を借りた。もう半ばヤケクソ、ジュースはペットボトルや紙パックをそのままテーブルに並べる。さてオードナー。これがまた大変だ。

「ウチは豚バラチャーシューの特大で！」

「早っ！ ナナさん早い、早いよ！」

「ちー、戦場では『早めし・早風呂・芸のうち』やで！ メシとシャワーは二秒で済みます。ほんですぐ練習や！」

「ええっ!? 今日はどういいじゃないツスカあ！ あんな激闘のあとでえー！」

「あんな何もしとらんやろ。ガッコ帰って特訓」

「うそーん!!」

宴会部長と宴会課長が決まりつつある。

「いや。千里大活躍だったよ。ベンチで」

大地が思わず助け舟を出した。

「ですよね！ 盛り上げましたよね！」

「うん。」

よく声を出してたし明るくしてくれた。僕も助かったよ

「ホラ！ ホラ！ 聞きましたナナさん!？」

「大ちゃんそんな甘やかしたらあかなくて」

「見てる！ 見てる人は見てるなあ！」

「ずっとベンチに居て欲しいぐらい」

「でしよう!？」

「はい!？」

みんなで大笑い。

大地は天然か狙っているかわからない。

「千里はあのバカみたいな衣装すごく似合ってた」

「バカとか衣装とか言うなー！」

「はなこ先輩思ったこと口に出すのやめなつて！」

「似合ってるって言つてんだから誉めてんでしょ」

「チー太やめといた方がええで。口喧嘩でおはなに勝てんのはプラトンぐらいや」

「またえらい大物が出てきますね」

「ちよーどいーじゃんちーた、ユニの模様、怪獣みたいだし」

「かいじゅう？ カレ何言つてんの」

「あれ、プラトンで怪獣じゃないの？ あのギザギザが歯なんでしょ、ガブーツで噛みつく」

「おほかちゃんだ。可憐だいぶおほかちゃんだ。」

「ま、このぐらいで無ければあんなシュートは撃てまい。」

「ちつがーうよあんだホントバカだな、プラトンつてのは、えーと、えらい、学者さん、だよ」

「あ、そなの？ 何発見した人？」

「えっ？ あ、いや、えー、プ、プ、プラトニック、ラヴ」

「へー。それって、なに？」

「プ、プラトニック・ラヴは、だな。」

「……あんたにやまだ早い」

「え、なにそれ、ラヴはラヴなんでしょ？ 興味あるよあたしだって年頃の女の子だもん」

人が悪いのは、わかってる連中がくつく笑いを堪えて黙ってることだ。FOXYカレンちゃんがアホ顔と牙のような八重歯をむき出しにして迫る。

「えー教えて教えてちーた」

「いや、えー、あ、そだ！ あれですよあれ、

ナナさんと空堀先輩みたいなもんツスよ！」

ぶほあっ！

ナナが食べかけの唐揚げを盛大に噴いた。



な、いちおうこの人が駆けずり回って新しいこんなエエユニ作ってきてくれたんや。礼は言わな  
あかんやろ礼は」

「言ったよ」

「みんなひとりひとり言ってるって」

「ちやうつてえ！ もっとダイナミックに！ こう、オーヴァーに！ そう、歌舞伎のよう  
に！」

「別に要らないよ」

また三十六笑う。当然のことをしたまでだ。礼というのは、コスト、犠牲を払ってもらった時  
に言うもので。

「それより『この人』呼ばわりですわよ奥様。もうご結婚でもなされたのかしら」

「いやですわねー、披露宴にも呼んでくださらなくて」

「ボク、親友だと思ってたのになあ」

「くすん」

「あんたらー！ー！ー！ー！ー！ー！！」

二年第二テーブルの連携弄りに噴火するナナ。

そうやって反応するからさらに炎上するのであつて。そこへ配膳ワゴンを押す三十六と古都が割り込んだ。

「……はいラーメンどんどんあがつてきまーす！」

「やったー！」

色とりどりの麺類が、湯気とともにテーブルを彩る。

それぞれのセレクトションがまさに性格を表していて、おもしろい。やっぱり横幅のある人がこつてり肉気が多く、細身の人はあつさり野菜つけが多い。

「……エレーナちゃん。チャーシューいる？」

「あ、要らないのデスか？ もちろんイタダキマス。」

でもありすサン、そんな具のないラーメンで大丈夫デスか？」

「だいじょうぶ。私麺類の具つてあんまり好きじゃなくて」

「変わつてマスねー」

「そう？ パスタはアールリオ・アールリオがいちばん美味しいと思わない？」

「ベーコンを五枚ぐらい載せたカルボナーラデスね」

「うどんはかけで。せいぜいおネギをパラリ」

「鶏天味玉坦々カレーうどん麺二玉、鶏天三本追加デ」

「さすがエレちゃんだなー」

「……明日葉ちゃんも、その方向だね」

「わたしより全然凄いデス」

明日葉さん、ひよつとしてラーメン初めてデスカ？ このあいだのカラオケみたいにな

「は、はじめてなことなんかありませんー！」

えつと、えと、三……二、一回め、ですー」

「初めてだね。それでそんなことに……」

「……ぎゃー！ カレ見ろ、またはつぱの山盛り病がー！」

「うわあ！ なんかもやしが雪男みたいになつてるじゃんか！ こつとん、ちゃんと見張つてな  
いとー！」

「わたしお手伝……おわー！」

「ちゃつ、ちゃんと全部食べますー」

「明日葉ちゃん無理しないで、わたしがあとでヘルプするから！」



一年はこのように微笑ましい。

三年はももが超特大用の、中で蕎麦が打てそうな大きな丼ごと噛み砕く勢いで食べ、さながら『西遊記』で猪八戒が村人にごちそうになるシーンを再現している。

二年は、という全員速い。みるみるテーブルの食糧が消えてゆく。ゆったりめなのは美緒ぐらいだが、彼女は「テーブルに残菜を残さないのが私の使命」と持たなくて良い使命感を抱いており、食事終わりがけになつて一気にスパートする。

ちなみにもちろんのように美緒と大地は同じものを食べている（さらにちなみに、湯麴）のだが、こちらは全員でスルーだ。なぜなら、大地に注文権はないので、必然的に同じものになるのである。それはこの地においては太陽が東から昇るぐらい、あたりまえのことだ、とオババは言った。誰だそれ。

「……ささ、準備整いましたのでお食事いただきながら、今日の激戦を振り返りましょう！」

高安が手を叩く。先ほどのビデオカメラが小型プロジェクターに接続され、奥に白いスクリーン。もちろんそれらは高安のカメラを見た瞬間、三十六が連絡してお店に搬入しておいてもらった。西九条家万能伝説。

「おおっ！」

「高安君、前半は全飛ばしで！」

「なにを言ってるんですか、反省には前半こそをじっくりと見てもらわないと」

「反省は後でするからー！」

「美原さん今日はいいいポジね。前半ベンチで盛り上がりつつから出て」

「特に何もしてないけどね」

「るーそれはちよつと酷いよ、見たでしょ？ 最後のナナの幻の神の手の演出を」

「言うなあ！」

「解説はもちろん、我らがリーダー、偉大なる首領様、上町大地！」

「あはは」

拍手に迎えられ、レーザーポインターを手に大地の熱弁が始まった。早送りを駆使してポイントだけを解説する。それがあまりに的確で、はなこから思わずツツコミが。

「コーチ、まるで練習してきたみたいに時間飛ばしてるけど、まさか覚えてるの？」

「ん？ ああもちろん」

「えーっ!? じゃ後半一五分に何があつたか、とか言える？」

「いちばん煮詰まつてた時間帯だね。流れがあるから『このプレー』とは言えないけど、後半では珍しく攻めこまれたところから、ももが奪ってフィードで一気に胡桃の頭を狙って、当てたまでは良かったけど周りのサポートが追いつかなくて、胡桃の足元から奪われた……あたり？」

「高安君送って送って」

「えーっと試合開始と録画開始の差がこれぐらいだから、後半一五分は……」

出た。

そんなような場面だった。

感嘆の声が上がる。

「スッゲー！ さすがコーチ！」

「いや、将棋の棋譜と同じで、流れで覚えればどんなアクションがあつたかはすぐ思い出せるよ。時間感覚はまあ、慣れで」

いや将棋の棋譜が素人にはそもそも覚えられません。

このひとやっぱりスゴイんだな、という空気が充満する。

「……タカちゃんこのまま送って、愛・はなこ投入のここから行こか」

「ほいー」

「えっ、ちよっ、ウチの華麗な突破からの得点と、ウチの体を張ったPK奪取からの得点は!?」  
「胡桃のスルーが見事でした。さすがの戦術眼。キツチリ撃てるポジションをキープした可憐の動きも完璧です。あと美緒のPKは職人過ぎて噴きました。次からも基本PKは美緒でいいね」

「ウチわあ!？」

わはははは……

「……ウチさんはこのあとと思う存分活躍してもらおうので」

「せやかて」

「さてここの交替意図ですが……」

——三〇分過ぎから試合終了まで、約一五分。

みんなで食い入るように見とれた。

高安も司会を忘れ、三十六も古都も、ついでに店員さんも大将も、手を止めて見入った。  
なんて素晴らしい、チームなんだろう。

……ここだけ見れば。

終わった。

大きな拍手が沸いた。最後の赤紙さえ、いいデザートだった。

これは本当に、わたしたちだろうか。

そんな疑いさえ、すこし持った。

「……すばらしい！」

空堀君、決めた。ウチはこのチームを、ミラクルズをサポートするよ！」

「おおつ、ありがたい！」

みなさん、大将の、『山嵐』のサポート決定です!!」

ワーッ……

「ということは、ウチのメンツはきたらみんなタダ！」

「それは無理だなあ」

わははははは……

「一杯一〇〇円!？」

「五〇円引きかなあ」

「男でしよう!？」

「よしわかった、半額!」

「餃子と唐揚げは夕ダで付けます!」

「うーん……ええい、よかろう!」

「よし!」

「あんたアホかあ!　なにが『よし』やあ!」

「は、はい!?　スポンサー様に、あんま無茶な要求は」

「大将!　白メシは無限!」

「無限!　無限は難しいな、わかった、電気釜が尽きるまで!」

「よっしゃあ!」

……あ、あれなんでみんな反応薄いの」

「だから麺類食べる時に白ご飯食べるのナナだけなんだってば」

「なに、なにを言うてるのん、三十六もそうやんなあ!」

「おう、まあ、腹減ってる時はな」

「いつ二人でここへ来たの?」

ユミ姉必殺の死神のカマ。

「へっ!? いや、あ、えー、か、関西人やから、ですよ?」

「スポンサーといえば空堀君、ここで聞いていいことかどうかわからないんだけど」

さつと自分で話題を変えるのが、姉ちゃんらしさ。

「すごいユニフォームとか、大丈夫なの? バスまでチャーターして、お金」

「まかせてください」

こればかりは胸を張る。

「出処は言えませんが、まあ伊達直人みたいなもんだと思ってください、お金の件は、まっつつつたたく心配ありません」

「だてなおと?」

「正体がバレないように虎柄マスク被ってボランティアする人よ。」

まあ、空堀君がそういうなら……」

三十六、ちらり明日葉を見た。知らんふりをして……いや素かな、ラーメンの上にまだ山になつてる、もやしやネギやキャベツやニラと格闘していた。

「えっ、ちよつと待つて!?」

ももが立ち上がる。

「てことは、ひよつとして、これ、きょう、ここ……タダ!」

「あ、ああ、そうですね、これ戦勝会なんで、経費から出しましょう」

おおーっーっーっ!!

「それを、早く、言つて!!」

追加・おおーっーっーっだーっーっーっーっーっ!!」

眼の色を変えたももが、だけではないのだが、多くの者が一齐にメニューに手を伸ばし、爛々と輝く瞳で隅から隅までスキャンし始めた。



……あんたらまだ喰うんか。

オードブル山盛りがテーブルごとにあつて、餃子と唐揚げとチャーハンがついてて、だいたいラーメンを大盛りだの特盛りだので頼んで……

まあ、成長期だしね。

いよいよカオティックになっていく宴、ふたたび忙しくなる厨房とホール、賑やかになる食卓と、千里とバカ笑いしてた可憐が思い出したようにカウンターから振り返って、そつと言う。

「……ナナさん」

「うい？」

口いっぱいに二杯目の豚バラチャーシューの塊を頬張りながら、顔を上げる。

「あたし、間違つてなかったです」

「……まだわからんで」

「ううん。」

今日の試合、あたしサッカーやってきてて、いちばん、楽しかった」

「ほうか。そつちの方は、まあな。

いや、ちゃうで、可憐」

「はい」

「もつとオモロイ試合を、自分で作らな」

「……はい！」

顔をラーメンに戻すと、つと、涙が零れて、スープの上に落ちた。  
うちゃアホみたいなの幸せモンやな。

「……あれー？ ナナさん泣いてんのー!?」

それを見てた、精神がだいたい小学生の千里が、茶々る。

「あほお、ちゃうわい、湯気が目に沁みんねん」

視線が集まる。

いまこの場を作ってくれたのは、ナナだ。

まるで田舎に親類縁者一同が集まった時に、彼らの祖である大婆様を見るように。

「……さとり、ハンカチ」

「あ、すまん。さつき靴磨きに使つてもた」

「どんくさいなあホンマに」

「紙ナプキン使いいな。そこにあるやろ」

「あんたのハンカチで拭きたいんやがな」

「わがままやなあ。」

「あ、ティッシュやつたらあんで。ほれ」

「またテレクラのやんか！ それも違うテレクラやし！」

「頼まれると嫌とは言えない優しい人に見えるから渡されるんやろうなあ」

「スケベ顔してブーツと歩いてるからや」

「プロデューサー」

美緒が助け舟を出した。

ナナはこういう時、案外、素直じゃないね。

「ん？ 僕？」

「そ。どう？」

「ん、んー、ええよ。」

「そんなえらいことができるかどうか、わからんけど」

「……んぐ、そんなことないよ！」

「またもが立ち上がる。」

「こんなに美味しいご飯がおなかいっぱい食べられるのは、空堀プロデューサーの、おかげ!!」

「そうだそうだー！」

「いやまあ……なんですキャプテン」

「今日の、ご感想で、中締めをひとつ」

「ああ。……じゃ」

立つ、視線が集まる、考える。

「思ったことや感じたことは、山とある。でもいまそういうのをコチヨコチヨ言っても、しょうがあるまい。」

で、らしくもなく、両拳を天高く突き挙げて、叫ぶ。

「優勝、するぞー！ー！ー！！」

「なんのだー！ー！！」

期待通り千里が瞬速でツツコんでくれて、みんな大笑い。

三十六も、ニヤリ。

なんのでもいい。

自分の思う「優勝」で。

そして千里、期待以上に、余計なことも言う。

「……そこは

『ナナ、好きだー！』

じゃねーんすか!？」

「ああ、じゃついでにそれも」

「はいドサクサ告白きまちたー！ー！ー！ー！！」

ワーーーーッ……

「ついでかい！  
つていうか！

あんた、あんたなにを、言うтонねん!!」

勢いよく振り下ろした紙ナプキンが、三十六の頭に降る。  
ふあっさくくくん。

「ま。観ました流乃さん、あの優しいツツコミ。さすがおしどりなにかですわね」  
「あたしたちでしたら手刀がめり込んでますもんね、おはなさん。ああデリシヤス・デリーー  
シヤス」

わはははははははは……

本日いちばんの笑いの渦が起き、なかなか、収まらない。

守備の嫌いなナナは、真つ赤な顔をして、ラーメンに向き直って、かぶりつく。

「ナナちゃん、お返事は？」

「しらん！」

「知らんは無いでしよう、『YES』でも『はい』でも、気持ちを伝えないと」

「ええよキャプテン、嫌われて無いだけで」

「ダメよ空P、そんな消極的なことじゃ。狙った獲物は四六時中しがみついてもゲット。これです」

「美緒さんに言われても説得力ないなあ」

「ぐはっ。ぶーめらんっ」

だはははははははは……

横でにこにこ顔で話まるで聞いてないコーチとの対比がまた、もう……

「……もおお、アホなことばかり言うてんと、あんたもはよ食べえな。のびてるやんか美味しいラーメンが」

「食べる食べる。ちゃんと食べるよ」

「もうあかん、そんな、美味しいラーメン食べなあかん。

大将ー！ これもひとつ作ってー！」

「ええって」

「これはウチが食べるさかい」

「まだイケるの!？」

「まだまだ・まだ・まだ、やで。」

見ときや、ウチの本気を」

「別に見たくないツス」

「見とき、言うてんの！」

「ああはいはい、はい」

「あんたもう、ホンマその、真面目に生きー！ー！！」

「俺以上真面目に生きてる人間なんざ世の中に五〇%ぐらいしかおらんー！」

「平均以下やないのー！」

「俺はもう平凡な幸せを掴みたい……」

「あかん、そんなことやったらあかんで、日本や！ いや、世界や！ 世界を、掴むんや！

サッカーの、ためなら、男を泣かすー」

「びえーん。」



おかあちゃん、町内一ぐらいでええでー」

「アホーウ！ おとうちゃんはいつつも夢がちいちやい！

むしろ、むしろ宇宙一やーッ！」

これが関西人か。

打ち合わせ無しで流れるようなコントが繰り広げられるのを観て、その場の面々は戦慄した。それはいいけど、もう、アレじゃん。完全に。

漫才とか、善哉とか、茶碗とか、そういうのの前に付く単語じゃん。

なんだいつのまに。

さすが……さすがナナ！ 仕事が、早い！

「なんやその辛気臭い顔は。

ラーメンやラーメンや、ラーメン持つてこーい！」

「せやからいま来るつて！」

店舗を転がすような笑いの波は、引かなかった。

しあわせは、どこかにあるものではない。  
道すがら、感じるものである。

この日、ナナは、しあわせだった。  
もちろん、三十六も。

気持ちと言葉が裏腹なのは、なんてったってお年頃。

細かいことはどうでもええねん、ぶつかりや聞く扉もあるて。  
抜けないDFいるものか、勝てない勝負があるものか。

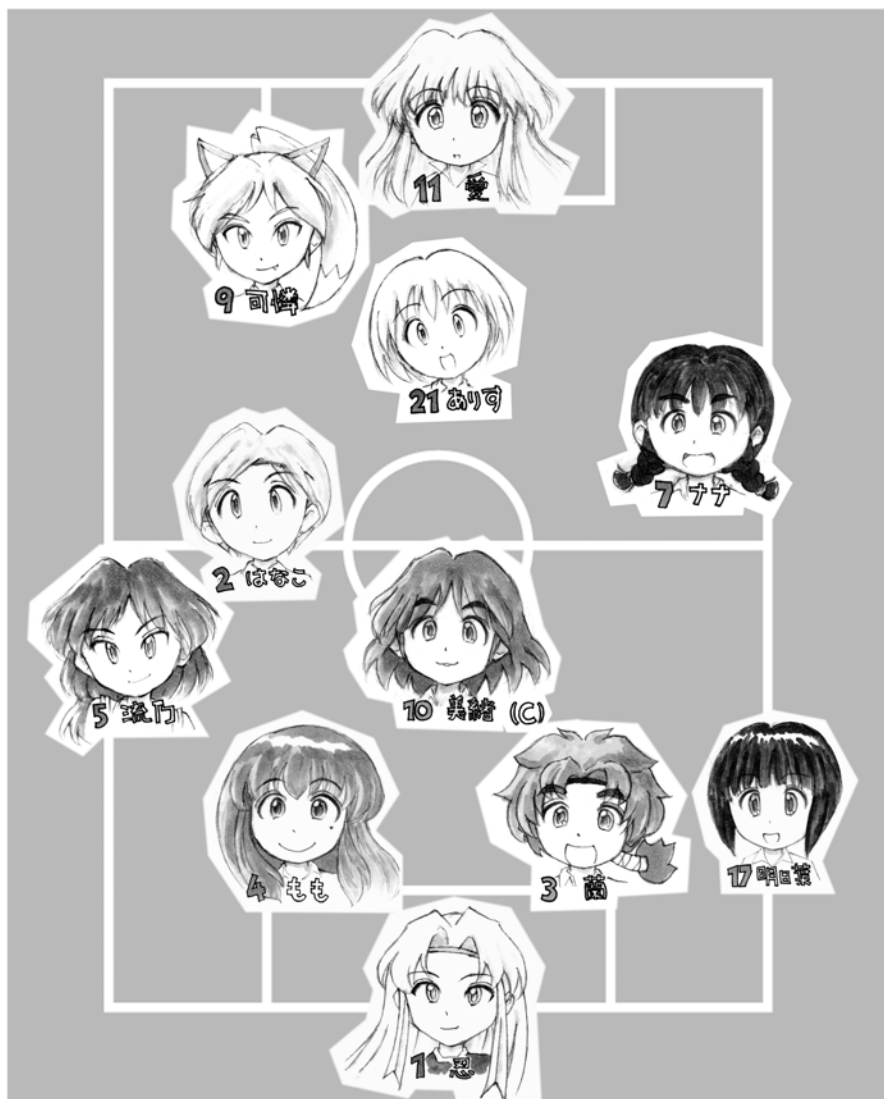
ドリブルダンサー・難波鳴海が今日も行く。

Never GiveUp, Go Ahead, and DO MIRACLES!

Miracles! Episode 7

"43"

(76min) 4-4-2 Dribble Dancer



Reserve



■ あとがき

ありがとうございます、ながたかずひさです。  
お楽しみいただけましたでしょうか。

まずは女子日本代表、W杯優勝おめでとうございます！  
このお話を描き始めた 99 年頃には、アメリカは全く歯がたたない強敵でした。  
(そんな感じのことをナナや可憐がたまに言います)  
それをあの大一番で……いやはや、時は経つもの、状況は変わるもの。  
どんな時でもまさに、ネバーギブアップゴーアヘッドアンドドウ・ミラクルズ！ですよ！

さてさて、初めて本格的なメイクに挑戦してみました。  
筋は同じですが、全書き換えです。  
どうでしょう、姉さん可愛カッコよく描けてました？  
大ちゃんは相変わらずヒドイ男ですねあれ（笑）

この巻が同人時代最後の作品で、当時随分難儀した記憶があります。  
ある程度思う通り書けるようになってくると、  
いいこと描こう、ドラマチックに描こう、って変な欲が出ちゃうんですね。  
それを無理にまとめるから窮屈で……今回読み返してクラクラしました。  
いやぁ面目ない。精進します。  
またみんなの活躍を、手直ししたり、新しく描いたり、していきます。  
楽しみにそして気長にお待ちいただければ。

お読み頂きまして、まことにありがとうございました。  
貴方様に健康と笑顔のあらんことを。

■ おくづけ

書名 Miracles! Episode 16(restart) -Fighter? Sister!-  
作者 ながたかずひさ  
発行 サークル PowerNetwork!!  
発行日 2011 年 8 月 14 日  
Web <http://rakken.net/>  
twitterID KazuhisaNagata  
Mail [nagata@mti.biglobe.ne.jp](mailto:nagata@mti.biglobe.ne.jp)

